

鳥居龍蔵生誕 150 周年記念 国際シンポジウム

鳥居龍蔵と 現代社会

— その学問と資料の意義を問う —



2021

3.21 日 13:00 ~ 17:00

会場：文化の森 イベントホール

主催／徳島県・一般財団法人自治総合センター 後援／総務省

文化の森総合公園

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

日 程 ・ 目 次

13：00～13：05	開会あいさつ 飯泉嘉門（徳島県知事）	
13：05～13：10	海外からのメッセージ	
	【紙上報告】「鳥居龍蔵の学問と世界について －鳥居龍蔵記念博物館の10年と館蔵資料の意義－」……………	2
	長谷川賢二（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）	
13：10～13：35	「戦後日本考古学史における鳥居龍蔵の再評価」……………	7
	中村 豊氏（徳島大学）	
13：35～14：00	「鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料～100年後のいま、できること～」……………	14
	齋藤玲子氏（国立民族学博物館）	
14：00～14：25	「鳥居龍蔵の学術遺産と中国研究～成果の紹介と若干の提言～」……………	20
	吉開将人氏（北海道大学）	
14：35～15：00	「鳥居龍蔵の台湾研究～残された資料の今日的意義～」……………	31
	宮岡真央子氏（福岡大学）	
15：00～15：25	「南米ペルー考古学との出会い～ナショナリズムを超えた文明史観～」……………	42
	関 雄二氏（国立民族学博物館）	
15：25～15：40	十代の提言「鳥居龍蔵に学び、未来を拓く」 全国高校生フォーラム出場者による意見発表	
15：40～16：05	総括コメント「鳥居龍蔵とファミリー」……………	48
	天羽利夫氏（鳥居龍蔵を語る会）	
	【紙上報告】「鳥居龍蔵と現代社会」の関係を問う －シンポジウムの趣旨と論点の整理－……………	58
16：15～16：50	パネルディスカッション ・パネリスト 中村 豊氏 齋藤玲子氏 吉開将人氏 宮岡真央子氏 関 雄二氏 長谷川賢二 ・コーディネーター 石井伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）	

鳥居龍蔵の学問と世界について

— 鳥居龍蔵記念博物館の10年と館蔵資料の意義 —

長谷川 賢 二

はじめに

鳥居龍蔵の学問は、「人類学・考古学・民族学」といわれるが、民俗学や歴史学なども混然としたもので、「総合人類学」と評されることがあるほど多面的・学際的である。今日の細分化された研究の世界とは正反対の特徴を持つとあってよい。また、鳥居は東アジア各地をめぐり、さらには南米を訪れたことがあるように、終生、広域的なフィールドワークを踏まえた研究を続けた。したがって、学問的内容、行動の両面において、彼のスケールの大きさは群を抜いている。こうした学問の帰結点は、一つには固有日本人論を核とする日本人起源論であり、大正期に完成を見るとともに、広く受容された。今ひとつが中国東北部・内モンゴルに展開した遼の研究であったが、完成間近といわれながらも、彼の死により途絶した。ほかにも、巨石文化への関心など、多方面にわたる研究を展開していたが、これらも未完といえる。

今回のシンポジウムは、鳥居の活動や知識、さらには彼が生きた時代における国際的活躍を踏まえるとともに、今も中国や台湾などで評価を得ていることに鑑み、彼の学問とこれに連動して遺されている資料の現代的意義について、国際的観点から検討し、再評価しようとするものである。鳥居龍蔵記念博物館（以下「当館」）の今後の飛躍につながることを期待している。

ここでは、議論の一助とすべく、館蔵資料の状況を中心としながら、鳥居龍蔵記念博物館の現状と課題を概観してみたい。

1 鳥居龍蔵記念博物館

当館は、1965年に鳴門市撫養町妙見山に開設された鳥居記念博物館（以下「旧館」）を前身として、2010年に徳島市内の文化の森総合公園に移転・改組して発足した。文化の森総合公園には、図書館、博物館、近代美術館、文書館、二十一世紀館といった県立文化施設が1990年以来、集中配置されてきた。この通称「文化の森」は各館が独自の展開をする一方で、複合性もあり、そこへ6番目の施設として当館が設置されたのである。

当館は、文化の森内はもちろん、徳島県内でもただ一つの、特定の個人の名を冠し、顕彰する歴史系博物館であるというテーマ性の強さが特徴である。鳥居に関係する資料を収集保存の対象としながら、人類学・考古学・民族学史や鳥居にゆかりのある国内外の諸地域の歴史・文化にも触れつつ展示や普及教育といった活動を展開することで、鳥居の顕彰に努めている。

文化の森への移転により、資料の保存や展示の環境は格段に向上した。また、常設展の展示替えや企画展の開催、他館と連携したイベントの実施などによって、利用者数も旧館時代に比べると大幅に増加し、多大なメリットがあった。旧館の最終年度であった2009年度は8千人強、それ以前は5千人前後であったのに対し、現館における直近の2019年度は2万人弱となっていることから明らかである。ただし、とくに常設展観覧者についていえば、高齢者が10%を超えており、同一施設内にあり、かつ類縁性の強い県立博物館よりも高率となっている反面、遠足利用が少ないなどの現状からすると、利用者層の幅を広げるための工夫が必要であり、2020年度にはロビー展の開催など、新たな試みを始めている。

2 館蔵資料の特質と意義

当館の最大の特徴は鳥居自身に関するナマの資料が集積している、世界でも唯一の機関だという点にある。1990年代に鳥居の再評価の機運を生み出した東京大学総合研究博物館の写真乾板、国立民族学博物館の民族資料は著名だが、ほかにも東京大学東洋文化研究所では、鳥居が東方文化学院東京研究所に在籍していた頃の大量の写真を所蔵している。このように、関係資料をまとまった形で収蔵している例は他にもあるが、鳥居の存在証明ともいえるほど、全生涯にかかわる資料を一括している点で、当館の資料は、それらとは異質なコレクションとなっており、独自の存在意義がある。

館蔵資料の形成過程は大まかに、次のようにまとめることができる。

先述したように、鳥居は、東アジア各地を渡り歩き、南米にまで及んだ。飽くなき探究心が彼を突き動かし、機会を貪欲に活かし、前進し続けた。そうした調査活動の中で、彼は多くのノートや写真、拓本、考古資料、民族資料などを遺すことになった。

また、彼の学問が「総合人類学」と評される幅広さを持ったことも先に触れたとおりであるが、その背後にあった知識はさらに幅広く、地理学、文学、美術史学、宗教学、地質学、古生物学など多くのジャンルに及んでいた。言語に関しても、英語はもちろんのこと、ドイツ語、フランス語、ロシア語といった欧米の言語や、アイヌ語やモンゴル語、台湾原住民族の言語など、調査地の住民の言語を習得しており、すぐれた語学能力を持っていた。こうしたことから、鳥居は、知識源泉であり、研究材料でもあった書籍・雑誌、また史料の抜粋などのメモ・ノートを大量に遺すことになった。これらは、彼の学知の基盤と研究スタイルを伝えている。

さらに鳥居は、フィールドで得た調査成果をもとに、該博な知識を活かして思考したが、その結果は膨大な著述や講演などとして国内外に発せられた。それゆえに既刊・未刊をあわせて多くの原稿やその前提となるノート、草稿などを蓄積している。

このような活動の過程では、国内外の多くの人物との交流を経ており、書簡や受贈資料なども少なからず集まっており、鳥居の知的ネットワークの様相も反映されている。

以上のとおり、館蔵資料は鳥居の研究にかかわって生成したものが多くを占めているが、それだけではない。彼の生育や履歴に関するもの、例えば、小学校の卒業証書、少年期に手にした書籍、東京帝国大学の辞令なども現存する。さらに、妻きみ子をはじめとする家族の研究や生活に関するものも含まれている。鳥居が東京帝国大学を退職した後に自宅に設立した「鳥居人類学研究所」は、家族全員をメンバーとするものであったが、そうした強固な関係が資料群にも反映されているとみてよい。したがって、館蔵資料は研究活動の跡というにとどまらず、彼自身の人生を凝縮したものといっても過言ではないであろう。

ところで今日、鳥居を評価する尺度は、『鳥居龍蔵全集』に収載された数多の著作など、公刊されたものにもとづいている。研究者に対する評価であるから、当然といえる。また、その方向性は、肯定、批判、否定、あるいは黙殺に分岐する。例えば概説書レベルでも、現代のDNA研究にもとづく日本人起源研究に関する書籍において、鳥居の学説が研究史として顧みられている例がある一方、人類学に関する書籍で鳥居を抜きにした学史が述べられている場合もあるように、鳥居への視線は一様ではない。19～20世紀前半の研究がそのまま生命を保ちうるというつもりはなく、また鳥居を全肯定すべきという意図もないが、関係学史の中で適切な位置づけが与えられるべきところ、必ずしもそうっていないという現実があるように感じる。

いささか脇道にそれてしまったが、一般的な鳥居への評価はよきにつけ、悪しきにつけ、鳥居の「表層」を照射しているといつてよい。当館の資料もそれを補完する性格を持つが、それだけにとどまらないのが重要である。鳥居の人生の凝縮という面では、彼の人物像の「深層」に迫るものとなり、リアリティを持った等身大の存在として、また、公刊されなかった諸研究を含めて全体像をとらえる手がかりになっていくと考える。

以上のような館蔵資料について、旧館時代以来、整理と調査を継続し、現在では鳥居龍蔵を語る会や歴文クラブ（徳島県シルバー大学校徳島校OB会）のメンバーから成るボランティアの協力も得な

がら、また、ときには外部の専門研究者の支援も受けながら、地道な整理作業とデータベース構築を続けている状況にある。総数はおよそ7万点で、漢籍や洋書を含む書籍、雑誌、原稿、メモ・ノート、書簡、拓本、写真、ガラス乾板・フィルム、考古・民族資料などといった多様な性格のもので構成されている。

3 資料公開の現状

資料整理に多くの時間を割く中で、新しい資料や事実の発見は少なくない。しかし、それは当館の独占物ではなく、広く公開することで、資料の公開・活用につながるようにしていく必要がある。当館では、そうした趣旨から、資料公開のステップにするため、年1回の企画展の開催、年数回の常設展内のトピックコーナーの展示替えを重ねている。

とくに大きな画期だったのが、2016年度に開催した開館5周年記念企画展「鳥居龍蔵—世界に広がる知の遺産—」であった。館蔵資料の傾向がかなり把握できてきたことから、中間総括として資料から復元できる鳥居の知の世界を示したものであった。同展の図録は資料群の特色が分かるよう編集したもので、館蔵資料解説書としても意義深いものであった。さらに、最近では、鳥居の主たるテーマであった日本人起源研究を中軸に設定した企画展が多かったが、その都度、新たな資料の公開ができるよう努めている。今年度開催の生誕150周年記念・開館10周年記念企画展「鳥居龍蔵の学問と世界」もその延長上にある。

また、2～3年に1回の頻度で発行している『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』では、実際に資料整理に携わる職員の手による資料紹介をできるだけ多く掲載しようとしている。写真をふんだんに用いつつ、資料公開の手段として活用しているのである。

これらは意義のあることだが、資料へのアクセスを開放するためには、目録情報の公開や資料のデジタル化による網羅的な公開が必要である。鳥居の学問の幅広さゆえ、個々の資料を正確にとらえ、基礎的なデータを記録し、それをもとにデータベースを整備する作業は難度が高く、さらに記録内容の検証、データベースの仕様作成と修正を繰り返してきた。そうした過程を経て、2020年度後半に至ってようやく、館蔵資料のデータベースを公開することができた。資料の概要データを検索できるもので、画像表示も可能である。鳥居の幅広い研究領域と資料の多様性からすれば、十分といえるレベルで網羅的な資料整理をするのは、ハードルの高いことである。そこにこだわる限り、いつまでたってもデータベースの公開に踏み切ることはできないことになる。そこで、当館に何があるか知るための手がかりを提供するというスタンスで少しずつ公開を始めることにした。今後は公開と修正を反復しながら、「集合知」としてのデータベースに発展させていきたい。まずは公開情報件数を増やしていくことが重点課題である。

これとは別に、2019年度から整備を進めているのが、高精細画像を主体としたデジタルアーカイブである。文化の森総合公園内の各施設が共同で運用している「とくしまデジタルアーカイブ」の一部でもあるが、従来から各地の研究者からの要望が多かった、鳥居の調査ノートを優先的に撮影し、公開している。これらについても、オープンな研究資料として、参加型の翻刻を進めるなどによって、やはり集合知の蓄積につながる必要があることが必要であり、そのための環境整備を進めたいと考えている。

開館以来の10年間、当館が蓄積してきた知見も多くなり、基礎的な資料整理と公開がスムーズに進み始めたところである。一方で、資料の多くは、書籍、雑誌、メモ・ノートなど、洋紙でできたものであり、酸性劣化が不可避であるという問題がある。中性紙の封筒や容器による保存をしながら、収蔵庫の環境管理、バックアップとしてのデジタル化など、対策に努めている。

4 ネットワークと資料の力

資料の整理と調査は、当館の活動の根幹といえるが、これまでの取組みを顧みると、鳥居龍蔵を語る会との協力関係、ボランティアとの作業の中での情報交換とディスカッション、国内外からの問い

合わせや調査来館が継続的であったこと、企画展等の準備に当たっての関係機関や研究者から受けた支援などが絡み合っ、当館の学術的な基盤が整い、またそれは展示や普及教育の発展につながってきたと思う。専任職員数が少ない小規模館であるからこそ、かえって多様なネットワークの作用が大きかったと感じるのである。こうした館外との協働の積み重ねが、先に鳥居龍蔵を語る会との共編により刊行した『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣出版）や今回のシンポジウムの開催などを可能にしたといえるだろう。さらに最近では、宮岡真央子氏（福岡大学）にご尽力をいただき、国立台湾史前文化博物館との相互交流に踏み出そうと検討を開始している。館蔵資料への新たな光があたることが期待でき、ぜひとも前進させたいと願っているところである。

ところで、国外からの来館については特筆すべきである。開館以来、ほぼ毎年来館者が続いているのである。多くは特定のテーマに即した資料調査の希望によるものであり、把握できている資料の範囲内で応じてきた。中国、韓国、台湾、スペイン、米国（中国系留学生）からの実績があり、日本に留学中の大学院生が来館調査したこともある。来館者の関係地域に関する調査が多いが、2013年8月に1か月程度滞在したスペインのラファエル・アバ氏の場合は、館蔵資料のうちの洋書について整理・分析し、鳥居の国際性を検討し、その成果を含む論考を当館研究報告第2号に投稿いただいた。

このような国外からの来館の継続は、関係の深い県立博物館と比べても際立っており、当館とその資料が独自の存在感を示す側面とあってよい。資料のもつ誘引力のなせることともいえる。

館蔵資料の魅力—これは当館に限らず、博物館にとっては非常に大切なものである。そして専門家でなくても強いインパクトをもたらさう。これに関して、高校生に係る事例を紹介しよう。

当館は、2014～15年度、「博学連携推進モデル事業」として、徳島市立高校歴史研究部との連携により、生徒による鳥居研究を支援したことがある。初年度はアイヌ民族を起点として鳥居の人物・研究の総体をとらえ、2年度目は鳥居の日本人起源論の現代的意義と課題を深く掘り下げた。鳥居が遺した資料を実見し、また、鳥居の著作を精読し、現地を歩き、考えるという活動を繰り返し、議論しながら自主的な思考が成長していった。

この活動の中で、生徒たちが強く反応したものの一つは、鳥居による徳島市城山貝塚発掘調査に係る記録写真である。自分たちが現に暮らしている徳島と鳥居が結びつき、しかも、鳥居が完成させることのなかった調査報告書に掲載されるはずであったと思われる写真であることを知ると、余計に興味をかきたてられたようである。

ついでながら、このときの生徒たちは、高校日本史Bの教科書に掲載されている日本人の起源の解説について、鳥居説に近似していることに気づき、鳥居が過去の存在でないことを実感し、関心を高めたという側面があったことも興味深い一幕であった。

このモデル事業の経験から、当館は中学生・高校生の歴史文化研究の公募コンクールである「鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム」を2016年度から毎年実施することで、人材育成に努めている（今年度は新たに「全国高校生歴史文化フォーラム」も実施）。当初は徳島市立高校歴史研究部の参加もあったが、その中には、鳥居の台湾調査に興味を持った生徒がおり、当館で鳥居自身の調査記録を実見したことが契機となって、それらを撮影し、内容を精査するとともに、鳥居が執筆した報告を読み込んで、調査を検証することを通じ、学問や科学の意味を考えようとする取組みがなされた。

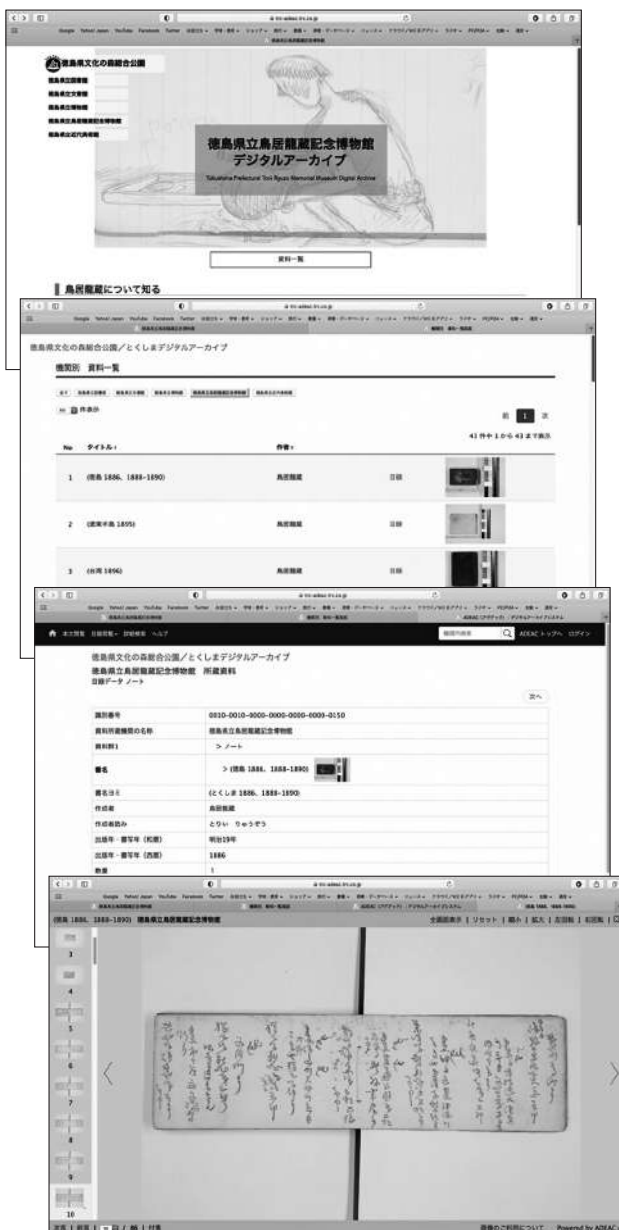
いずれの場合も、指導者である教員との相談の上で、当館において選定した資料が起点となっていたが、例えそれが調査記録のような地味なものであっても、実見することでその歴史性を感じて触発され、それを起点に思考が動き出したものである。研究者とは異なり、研究テーマがあって初めて資料にアプローチするのではなく、その逆といってもよいような、資料との接触から始まる活動であった。

おそらく、機会さえあれば高校生に限らず、ゼロの状態から資料に接することで関心をかきたてられることはありうるのであろう。そのためにも展示や普及教育活動の充実はもちろんだが、そういう機会に目を向けてもらったり、足を運んでもらったりするための方策が問題である。鳥居の学問、学説と当館の資料をいかにして広く知ってもらおうかという観点からの模索を続けていきたい。

おわりに

以上、館蔵資料の状況を中心として、当館の現状と課題を縷々述べてきた。鳥居龍蔵生誕150周年は開館以来10年間の活動を顧みる格好の機会であり、次の10年へのスタートでもあるといえる。先にも述べたように、国立台湾史前文化博物館との交流など、新たな活動が始まろうとしている。そして、来る2023年度には、鳥居の没後70周年を迎える。こうしたタイミングで、当館としては、鳥居の学説と資料について、さらに活かし、発信していけるよう取組みを進めていかなければならないと決意を新たにしているところである。

【デジタルアーカイブ】



【館蔵資料データベース】



戦後日本考古学史における鳥居龍蔵の再評価

中 村 豊

はじめに

近年鳥居龍蔵は、鳥居龍蔵記念博物館の積極的なとりくみもあって、再評価が進みつつある。一方で、戦後日本考古学界における評価は、今日なお否定的な状態が定着している。私は、こうした否定的評価は過剰で、研究・人材など今日の日本考古学界に受け継がれた側面が少なからず残存すると考えている。

1 戦後日本考古学における評価

戦中から戦後、和島誠一（1937）や、ねずまさし（1949）など、マルクス主義史学の立場から、鳥居の否定的評価が鮮明になって今日なお継続している。たとえば、近年開催された、国立歴史民俗博物館主催の特別展『弥生ってなに?!』は、鳥居評価の現状をよく表している〔国立歴史民俗博物館2014〕。

鳥居の海外調査が、日本の大陸侵出を機に、軍部の助力を受けておこなわれたもので、日鮮同祖論に与するような論考が散見できるのも事実である。しかし、鳥居の人類学的思想・意識まで「軍国主義」に基づくのかは検証すべきである。

たとえば1942年（緒言は1941年12月2日）『遼代の画像石墓』の、燕京大学学長ジョン・レイトン・スチュアートによる序文（全集第5巻末、小林知生による解題を参照）には、次のような記述がある。

これら2つの国家間〔中国と日本〕に対立感情の顕著な時代に、鳥居博士と燕京における中国人の同僚はもちろん、彼の下で師弟関係に尽くす機会を歓迎する学生達も、このような障がいを超えて学術を探究する方法を論証したのである。

日中戦争のさなか、真珠湾攻撃の直前というタイミングでの、アメリカ人のスチュアートによるこの証言は、「軍国主義」の対極にある、鳥居の人類学的思想・意識の本質をきわめて適切に言い当てている。

また鳥居は、日本の先史文化の遺物を古事記・日本書紀の記述と重ね合わせたという批判をうけることがある。鳥居の研究に、「記紀」の記述に依拠した部分があることは事実である。これに対しては、次の論考を紹介しておきたい。1915年の「考古学民族学研究・南満州の先史時代人（伝説）」では、

古事記ならびに日本紀には、日本にかつて真正日本人の新石器時代があったことについては、これをかいま見ることすら記されていない。紀元712年および720年といずれもかなり古い文献ではあるが、しかしこの点について知るにはあまりにも新しく、かつ学術的でない。ところが考古学だけは、日本には神話時代以前に（中略）新石器文化期があったことを納得のいくように明快に示している。〔鳥居1915（1976）〕

すなわち「記紀」は日本の先史時代を知るうえでは新しく学術的ではないとまで明記し、考古学こ

そこを明らかにしている」と指摘しているのである。

また、「歴史教科書と国津神」[鳥居1924a]における発言は注目すべきものである。

文部省の歴史教科書を見ると、最初のページに日本建国の神話を掲げて、古事記や日本紀にあるような神代記をごく平易に書いて始めとして居る。(中略)日本の古代に就いてもう少しく学術的に明らかに書いて貰いたいと思う。(中略)

今日行われて居る我が国の中等学校の教科書には(中略)古事記や日本紀の神話伝説に書いて居ることをそのまま書いて居る。(中略)文部省令の趣旨を変更して、(中略)アイヌが石器を使って居ったところに我々の祖先も来て、やはり石器を使って而して段々に進歩して(中略)ということを知らす方が必要であろうと思う。

すなわち、中等学校の教科書や文部省令にまで踏み込んで、日本列島の歴史は「記紀」から距離において石器時代から始めるべきであると説いているのである。

以上のように、鳥居の人類学的研究意識が「軍国主義」でないことは明白である。

2 戦後日本考古学に受け継がれた研究成果

(1) 鳥居龍蔵と山内清男

鳥居とは対照的に、日本考古学史上高い評価を受ける1人に山内清男(やまのうち すがお)がある。山内は鳥居が東京帝国大学在職中に人類学教室教官として指導した1人である。この両者に学術上の系譜関係はないか検証してみたい。

大村裕[2008、2014]は、①縄文土器が「極東」地域において孤立し[鳥居1916、1923a]一系統をなす、②縄文時代の石斧にみられる擦り切り技法が「極東」周辺地域と関連している[鳥居1910、1915、1924b]、③朝鮮先史土器に2系統みられる[鳥居1917]などが山内の研究にも受け継がれていると指摘する。とくに重要なのは、日本考古学史上の画期をなす「ミネルヴァ論争」(註1、図1)における山内の主張に強い影響をあたえた点にある。

大村が詳しく論じているように、鳥居[1923b]の「石器時代に於ける関東と奥羽との関係」と、山内[1936]の『ミネルヴァ』誌上「日本考古学の秩序」とはその発想が酷似している。すなわち、東北地方の石器時代「出奥派」(亀ヶ岡式のこと)がそれ以西の諸地域よりもずっと遅れて展開するという大正頃までの俗説を批判し、出奥派の土器は古くから東北地方にさかえて、むしろ関東地方へ南下してきたというのである。また、1921年には、

我々の祖先のいわゆる弥生式土器を残したところの遺蹟は、単に関東とかあるいは越の国というに止まらずしてかの出羽、奥州の果てまでもこの遺蹟が存在しているのである。(中略)我々の祖先は蝦夷征伐に就いて、幾多の困難と時日を費やしている。(中略)この歴史と遺蹟遺物の事実が矛盾して来るようになって居るのである。[鳥居1921]

として、平安時代の『続日本後紀』にすでに石器時代の文物が土中に埋没している記述がみられる点も指摘している。

鳥居はアイヌ派(縄文土器使用者)と固有日本人(弥生土器使用者)の併存という殻から抜けだすことができなかったが、出奥派(亀ヶ岡式)の独自展開と南進、固有日本人が早くに東北地方まで進出していたという、当時としては先鋭的な考えをもっていたことがわかる。それが「ミネルヴァ論争」における山内説へ発展的に引き継がれた。

ところで「ミネルヴァ論争」において、喜田貞吉[1936ab]は宋銭と亀ヶ岡式土器との共伴を、東北地方で石器時代の終末が遅れた根拠とする。これに対して鳥居は1928年に古銭による安易な年代決定に注意を促している。

古泉〔古銭のこと〕の取り扱いも、不精確であると、非常なる誤解を来すことがある（中略）室町時代の遺蹟、または遺物とともに、不幸にして開元通宝とか、宋銭とか単に一個または二個出た場合があるとしても、これは決して古泉が時代を示す標準にはならないのである、若しかかる場合に、その古泉で遺物の時代を確定すると、非常なる誤りである。以上の如き例が、室町時代－鎌倉時代－藤原時代・・・さては上代と遡って考えて行くも同じことであって、これは最も注意を要せねばならぬことである。〔鳥居1928〕

(2) 欧米学界への精通

鳥居と山内とは欧米の学界動向への精通という点において共通する。山内は1931年金関丈夫（かなせき たけお）からマックス・エベルト編『先史学事典』〔Max Ebert 1924-1932〕の貸与を受け、この影響のもと名著「日本遠古之文化」などを執筆したと回顧する〔山内1968〕。このエベルト編『先史学事典』の重要性をいち早く考古学界に紹介したのは鳥居〔1930、1932、1943〕である。私は鳥居龍蔵記念博物館の旧鳥居蔵書中に同書を確認した（図2）。

山内は日本列島における農業の起源と展開について、エデュアルト・ハーンによる分類〔Eduard Hahn 1919（ハーン1994）〕を引用することが多かった〔山内1932（1939）、1934、1937、1947〕。縄文時代を高級狩猟民、弥生時代を褥耕（Hackbau）に比定し、おもに植物質食料採集から発展した女性の仕事として捉え、鉄器の普及した古墳時代以後男性も加担し、集約化した園耕（Gartenbau）になったとする（図3）。

鳥居も、「我が上代の農業と農具」〔鳥居1925〕において、人類史における農業の発展過程を、ハーンの4ステージ、①鋤の文化、②鋤の文化、③園芸文化、④商業文化を用いて区分し、さらにフランツ・カール・ミュッラーリヤの著作〔Müller-Lyer 1908（ミュッラーリヤ1921）〕を踏まえて説明を加えた（図3）。すなわち、鋤の文化を植物採集の延長に位置づけて女性の仕事とし、ヨーロッパの鋤の文化を家畜を用いて男性が農業に従事したことで起こった、農業上の革命とする。この書こそ、農業の発展段階と性的分業を説明するうえで、鳥居の「我が上代の農業と農具」のみならず、山内の農耕の起源に関する諸論文〔山内1932（1939）、1934、1937、1947〕にも参照されたのではあるまいか（図3）。

さらに、ミュッラーリヤは農作の起源以前に狩猟と漁撈がありこれを第1群－下等狩猟民、第2群－高等狩猟民、第3群－漁業民に分類する。第3群の漁業民は、西北アメリカから東北アジア、すなわちベーリング海峡兩岸に存在することを指摘する。

魚類、殊に鮭が豊富で農作でなければ見られぬような食料の過剰を与えられている。大部分は定住して大きな家を所有し、あらゆる技巧的な器具道具を製作し、貧富に分れ、或者は奴隷すら持って、商業を営み、分業を知っている。獣類の食料品並に商品（水獺の皮その他）の豊富な為とその分化は諸種の関係に於てその他の多くの牧畜或は農作に人工的の食料源泉を有せる民族に凌駕している。〔ミュッラーリヤ1921〕

すなわちサケの余剰によって農作以前の民族としては異例の、定住、階層・分業・交易の発達した、食料生産民に匹敵する社会を形成している点を指摘している。著名な「サケ・マス論（註2）」〔山内1964、1969〕につながるかのような記述を含む点で、とくに注目される。鳥居〔1936〕も北米北西海岸から東部シベリヤ、アイヌなどベーリング海峡兩岸地域の諸民族の物質文化、精神文化、住居の形態、貝塚などにみられる共通性に注目し、比較研究の重要性を説いている。

山内は「日本遠古之文化」〔山内1932（1939）〕において、青銅器の出土状況に培目し、集落でも墳墓でもない所から、複数まとまって出土する状況を、欧州の研究事例から仏語「デポ」の用語を使用して、交易関係の遺構と解釈している。

鳥居は「考古学民族学研究、南満洲の先史時代人（仏語）」〔1915〕において、伴出造物のない状況で銅鐸が4-5個出土する状況に注目し、交易に関する遺構という立場をとっている。以上の点は、もっと評価されてもよいと思う。

おわりに

以上、戦後日本考古学史における鳥居龍蔵の位置づけについて検討を加えてきた。

戦中、戦後に下された鳥居に対する否定的評価は現代まで継続する。一方、東京帝国大学人類学教室在籍中に鳥居の指導を受けた山内清男は、日本考古学の研究発展に大きく寄与した研究者として、高い評価を受け続けている。今回、現代の考古学研究にも受け継がれている重要な論点を鳥居と山内との学術的系譜関係として見出すことができた。これは、現代の考古学研究と鳥居との連続性を認めることにつながる。そうして遺された論文と蔵書が我々に語りかけるのは、鳥居龍蔵最大の遺産は、今日の日本考古学研究の基礎を作った人材を育成したことに尽きる、ということである。

註

(1) 日本石器時代の終末をめぐる、1936年雑誌『ミネルヴァ』上で、山内清男と喜田貞吉との間で交わされた論争。九州から東北まで縄文時代の終末に大差ないという山内の見解が、東北地方では鎌倉時代まで残るとした喜田を結果的に論破した。以後土器編年研究の重要性が周知されたため、日本考古学史上の画期に位置づけられている。

(2) 縄文時代の東日本に遺跡が多く、西日本に遺跡が少ない理由のひとつとして、食料資源としてのサケ・マスの評価する。山内は1947年頃からその考えを披露してきた。

参考文献

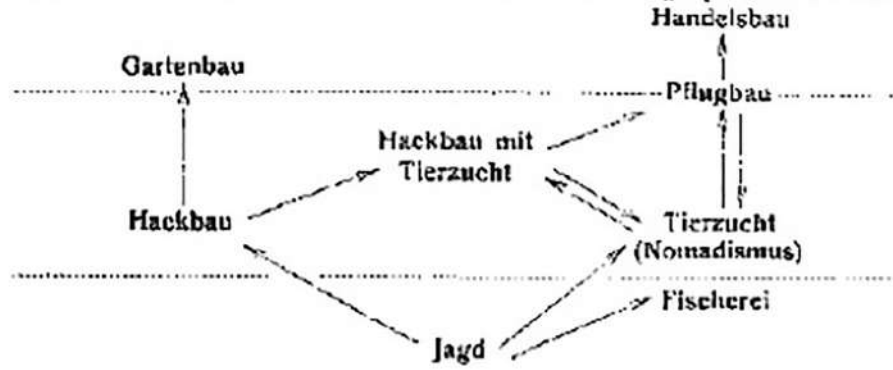
- 大村 裕 (2008) 『日本先史考古学史の基礎研究』 六一書房
大村 裕 (2014) 『日本先史考古学史講義』 六一書房
喜田貞吉 (1936a) 「日本石器時代の終末期に就いて」『ミネルヴァ』 1-3
喜田貞吉 (1936b) 「又も石器時代遺跡から宋銭の発見」『ミネルヴァ』 1-6・7
国立歴史民俗博物館 (2014) 『企画展示弥生ってなに?!』
鳥居龍蔵 (1910) 『南満洲調査報告』 東京帝国大学 / 『鳥居龍蔵全集』 10、朝日新聞社、1976年
鳥居龍蔵 (1915) 「考古学民族学研究・南満洲の先史時代人 (仏語)」『東京帝国大学理科大学紀要』 36-8 / 『鳥居龍蔵全集』 5、朝日新聞社、1976年、小林知生訳
鳥居龍蔵 (1916) 「古代の日本民族移住発展の経路」『歴史地理』 28-5 / 『鳥居龍蔵全集』 1、朝日新聞社、1975年
鳥居龍蔵 (1917) 「朝鮮総督府大正5年度古蹟調査報告 平安南道、黄海道古蹟調査報告書」朝鮮総督府 / 『鳥居龍蔵全集』 8、朝日新聞社、1976年
鳥居龍蔵 (1921) 「吾人祖先の石器時代と国津神」『東亜之光』 16-1 / 『日本周囲民族の原始宗教－神話宗教の人類学的研究－』 岡書院、1924年に再録 / 『鳥居龍蔵全集』 7、朝日新聞社、1976年
鳥居龍蔵 (1923a) 「原始時代の人種問題」『中央史壇』 6-6 / 『鳥居龍蔵全集』 1
鳥居龍蔵 (1923b) 「石器時代に於ける関東と奥羽との関係」『人類学雑誌』 37-6 / 『武蔵野及其周囲』 磯部甲陽堂、1924年に再録 / 『鳥居龍蔵全集』 2、朝日新聞社、1975年
鳥居龍蔵 (1924a) 「歴史教科書と国津神」『人類学雑誌』 39-3 / 『鳥居龍蔵全集』 1
鳥居龍蔵 (1924b) 『人類学及人種学上より見たる北東亜細亞』 岡書院 / 『鳥居龍蔵全集』 8
鳥居龍蔵 (1925) 『人類学上より見たる我が上代の文化』 叢文閣 / 『鳥居龍蔵全集』 1
鳥居龍蔵 (1928) 「わが上代の或年代を定むる一方法に就て」『武蔵野』 11-5 / 『鳥居龍蔵全集』 1
鳥居龍蔵 (1930) 「私の小さい省棚」『考古学』 1-2
鳥居龍蔵 (1932) 「私の今日この頃」『ドルメン』 1-7 / 『鳥居龍蔵全集』 12、朝日新聞社、1976年
鳥居龍蔵 (1936) 「我が先住民石器時代に就ての疑問」『武蔵野』 23-10 / 『鳥居龍蔵全集』 1
鳥居龍蔵 (1942) 『遠代の画像石墓 (英語)』 Harvard-Yenching Institute / 『鳥居龍蔵全集』 5、小林知生訳・解題、序文J.L.スチュアート
鳥居龍蔵 (1943) 「私の半生と丸善」『学燈』 47-12 / 『鳥居龍蔵全集』 12
ねずまさし (1949) 「原始日本の経済と社会」歴史学研究会編『日本社会の史的究明』 岩波書店
エデュアルト・ハーン (1994) 『犁農耕起源論』 農林統計協会、川波剛毅・佐藤俊夫訳
フランツ・カール・ミュッラーリヤ (1921) 『文化の諸相と其進路』 大村書店、鼓常良訳
山内清男 (1932) 「日本遠古之文化 IV 縄文式以後」『ドルメン』 1-8 / 『日本遠古之文化補註付・新版』 先史考古学会、1939年 / 『山内清男・先史考古学論文集』 1、先史考古学会、1967年
山内清男 (1934) 「石庖丁の意義」『ドルメン』 3-11 / 『山内清男・先史考古学論文集』 4、先史考古学会、1967年

- 山内清男 (1936) 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1-4 / 『山内清男・先史考古学論文集』3、先史考古学会、1967年
- 山内清男 (1937) 「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』6-1 / 『山内清男・先史考古学論文集』4
- 山内清男 (1947) 「米作と日本の祖先たち」『新農芸』2-6 / 『山内清男・先史考古学論文集』4
- 山内清男 (1964) 「日本先史時代概説」『日本原始美術I』講談社 / 『山内清男・先史考古学論文集』新3、先史考古学会、1969年
- 山内清男 (1968) 「矢柄研磨器について」金関丈夫博士古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』平凡社
- 山内清男 (1969) 「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史1』学習研究社 / 『山内清男・先史考古学論文集』新5、先史考古学会、1972年
- 和島誠一 (三澤章名義 / 1937) 「日本考古学の発達と科学的精神」『唯物論研究』62
- Eduard Hahn (1919) *Von der Hacke zum Pflug-Garten und Feld, Bauern und Hirten in unserer Wirtschaft und Geschichte*, Leipzig
- Franz Carl Müller-Lyer (1908) *Phasen der Kultur und Richtungslinie des Fortschritts*, München
- Max Evert (1924-1932) *Realexkon der Vorgeschichte*, Berlin



図1 『ミネルヴァ』創刊号表紙

Stammbaum der Formen der Nahrungsproduktion.



Stammbaum der Formen der Nahrungsproduktion.*)

Wir haben nun elf verschiedene Formen oder Typen der Nahrungsproduktion kennen gelernt, nämlich:

- I. Jagd und Fischfang
 - 1. Niedere Jägerei,
 - 2. Höhere Jägerei,
 - 3. Fischerei,
- II. Tierzucht
 - 4. Tierzucht,
 - 5. Hackbau mit Jagd, (Indianer)
 - 6. Hackbau mit Fischerei (Ozeanier),
- III. Ackerbau
 - 7. Hackbau i. e. S. (mit wenig Jagd und Tierzucht) (Afrikaner),
 - 8. Hackbau mit Tierzucht,
 - 9. Pflugbau,
 - 10. Gartenbau,
 - 11. Handelsbau.

食料生産諸方式の系圖

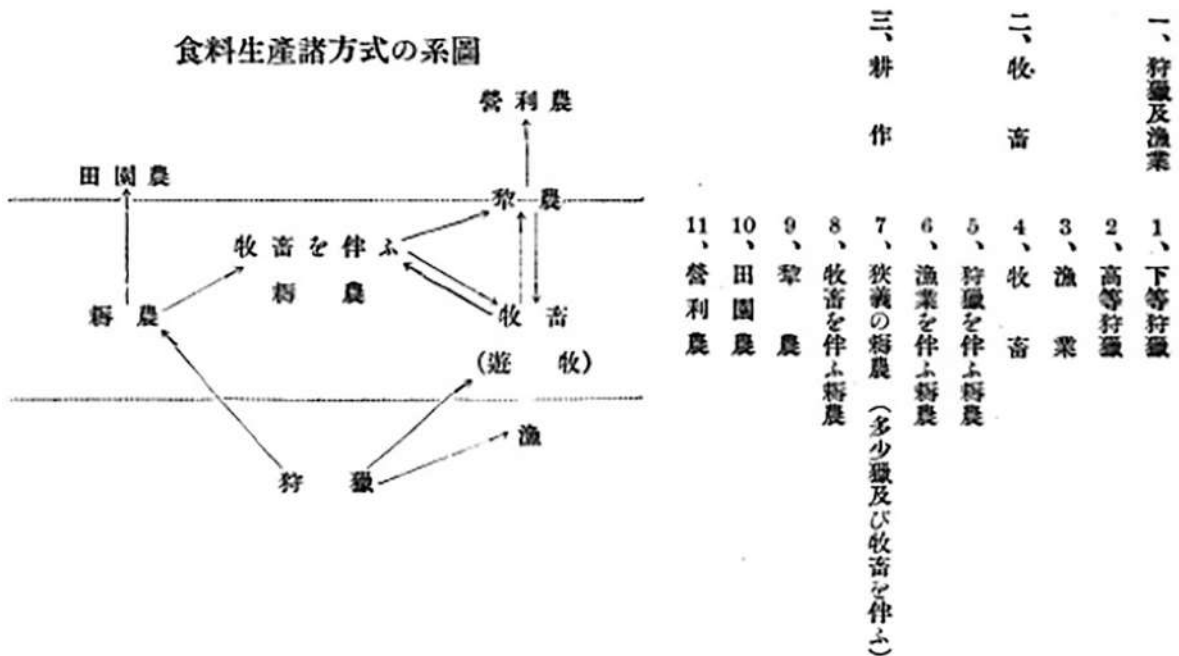


図3 食料生産方式の分類と変遷 (Müller-Lyer 1908 [ミュッラーリヤ 1921])

鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料

～ 100年後のいま、できること～

齋藤 玲子

1 はじめに

日本の人類学・民族学と考古学の黎明期の中心的テーマは、「日本人」の起源をめぐるもので、アイヌとの関係についての議論が展開された。当時、研究活動を始めた鳥居龍蔵にとって、千島列島および樺太(サハリン)という日本の北方のフィールド調査は、そうした民族起源論と直結するものだった。しかし、鳥居の関心は日本にとどまらず、早い段階から東アジアの民族の形成にあり、アイヌと隣接する民族へと調査研究を進めていった。

本発表は、昨年刊行の『鳥居龍蔵の学問と世界』に寄せた「千島・樺太調査」(齋藤2020)をもとに、シンポジウムの趣旨に沿って短くまとめたものである。1899(明治32)年の千島での調査は、鳥居の調査歴の初期のものでありながら、その内容は高く評価され、多くの研究者によって引用・検討がなされてきた。人口が少ない千島アイヌの貴重な記録であり、その時に収集された生活用具など約70点が残されている点も重要である。また、2回実施された樺太調査は、千島調査ほどには注目されてこなかったが、1回目の1912(明治45・大正元)年の調査復命書が近年見つかったことや、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵のノート類が公開されたことなどから、今後の研究の進展が期待される場所である。

2 調査の背景

日本で人類学の学会が発足した当初、日本列島に石器や土器を残した「石器時代人」と当時の「日本人」およびアイヌとの関係は大きな関心事だった。「じんるいがくのとも」第2回研究会(1884年)で、札幌農学校の渡瀬荘三郎が発表した「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」は、竪穴住居遺跡の住人はアイヌではなく、伝説に出てくるコロボックルだとするもので、『人類学会報告』1巻1号(1886)に掲載された。「じんるいがくのとも」の中心人物だった帝国大学理科大学の坪井正五郎はその見解に関心を示した。翌年、後続誌『東京人類学会報告』2巻11号にM.S.(白井光太郎)が反対意見を寄せると、坪井はそれに対する反論を次号に載せ、日本の先住者をめぐる「コロボックル論争」が開始された。しかし、白井は植物学に専念するため人類学から離れ、2人の論争はまもなく終息する。代わって論争を展開するのが帝国大学医科大学教授の小金井良精で、坪井のコロボックル説対小金井のアイヌ説は、坪井の死(1913年)まで他の研究者らを巻き込んで続いた。

その間の1899年に鳥居が千島でおこなった調査は、恩師の坪井の説に反する証拠をもたらすことになった。すなわち、石器や土器、竪穴住居を使っていたのは千島アイヌであり、コロボックルはアイヌと異なる民族とはいえない、としたのであった。コロボックル論争については多くの論考があるので、詳しくはそれらを参照いただきたい(坂野2005など)。

次に、当時の千島・樺太における民族の状況について簡単に述べておく。明治の始まりとともに蝦夷地から北海道となった地に住むアイヌは平民として戸籍に登録され、同化が進められた。一方、千島と樺太の住民はロシアとの国境画定に翻弄された。

安政2(1855)年の日露和親条約(日魯通好条約)では、千島列島の択捉島とウルップ島の間を国境をひき、ウルップ以北をロシアとした。このとき、樺太はこれまでどおり混住の地と定められた。1875(明治8)年の樺太千島交換条約は樺太をロシア領、千島列島全島を日本領と規定した。1884年、北千島のアイヌ97人は保護を理由に北海道に近い色丹島へ移住させられ、鳥居が調査をした1899年に

は、その人口は62人にまで減少していた。

樺太島では、南部にアイヌが居住し、ウイльта（当時はオロッコと呼ばれた）が中部と北東部に、ニヅフ（同じくギリヤーク）が北部に暮らしており、エヴェンキ、ウリチ、サハもごく少数ながら居住していた。1905年、日露戦争後のポーツマス条約によって島の北緯50度以南が日本領になり、日本の統治は1945年の第二次世界大戦終戦まで続いた。鳥居の千島および樺太の調査は、このような状況下でおこなわれた。

3 千島調査

1899年4月、千島列島北端のシュムシュ島で入植を進めていた「報効義会」の郡司成忠から、同島で見つけた竪穴住居の屋根に刺さっていた骨鏃のついた矢の束について、「コロポグルの遺物ではないか」と調査を請われた坪井は、鳥居に調査を頼んだ（鳥居1953）。

出発前の準備期間は短く、千島での滞在も約ひと月半（うち色丹島に25日ほど）だった。にもかかわらず、成果をあげることができたのは、鳥居が千島やカムチャツカに関する民族誌等の文献を読みこんで、問題意識を持ち、調査すべきポイントを想定していたことと、アイヌ語もかなり習得していたと推定される（吉原2013）ことなどが理由と考えられる。

鳥居は千島調査以前には、同地域およびアイヌに関する論文等をあまり書いていないが、江戸時代の書物から外国語文献まで渉猟した興味深い論考もある。「西比利亜の土人」は、シベリアの地図に「22の人種」の居住地を示して概説を付したもので、とくにアイヌとギリヤーク（ニヅフ）に関心を寄せていたことがうかがえる。アイヌの居住域についてはサハリン島の南部から北海道までとし、シュムシュから色丹に移住した人々については「十分に調査せざる人種なるを以て」アイヌかどうか保留とされていた（鳥居1895 / 1976）。

この4年後に色丹島の調査に赴くことになったわけだが、千島で調査中の1899年5月と6月発行の『東京人類学会雑誌』158・159号に「千島ニ関スル人類学上ノ参考書」上・下として、19の文献について概要を付して紹介している。外国の文献が多く、それらを紹介したこと自体が評価に値するものであり、鳥居は文献から、千島アイヌの歴史やその移動について、かなり正確に把握していただろうと推察される。

3-1 千島調査の実際

鳥居が東京を出発したのは5月6日で、函館から軍艦武蔵に乗り、南千島経由で北に向かい、25日にシュムシュ島に到着した。調査をおこない、30日に同島を離れ、6月5日に色丹島到着。29日に同島を出発するまで、千島アイヌの調査をした。鳥居の著作にもとづいた調査ルート（図1）をあげておくが、公開されたノートに歯舞群島の水晶島から見る国後のスケッチがあるなど、活字化されているよりも多くの場所で調査をしたこともわかったので、今後修正すべきだろう。

鳥居はまず色丹島で、50歳代前半のグリゴリーという千島アイヌの男性を助手として雇った。グリゴリーは、「正しく北千島アイヌ語を語り、ロシア語、日本語をよくし、且つ彼らの説話等もよく知っているから」「頗る大切な仕事をする事が出来た」と述べている。

千島アイヌの本拠地であるパラムシル島とシュムシュ島に上陸し、移住後に廃墟となった住居跡などを調べてまわった。千島行きのきっかけとなった竪穴住居や骨鏃についてグリゴリーに聞いたところ、彼はいずれも自分たちが使用したものであり、骨鏃は今も製作使用していると言った。鳥居は「これまで疑問としていたこの遺跡遺物は彼等のものであると確定した」と書いている（鳥居1953）。

移住先の色丹島では、人名、言語、説話、信仰、「土俗」などの聞き取り調査と実物資料（模型を含む）



図1 千島列島の調査ルート（齋藤2020）

4-1 1912 (明治45・大正元) 年の南樺太調査

上述のとおり、近年明らかになった調査行程は、鈴木・出村の報告に詳しい(鈴木・出村2015)。上野を出発したのが7月18日、函館、小樽を経て、樺太の大泊(現コルサコフ)に入ったのが23日。東海岸を北上しながら発掘調査や聞き取り調査などをおこない、中部の敷香(現ポロナイスク)に進み、幌内川を遡上して北緯50度の国境まで探査した。8月24日に敷香を經ち、9月6日に上野に戻った。

2020年に公開された鳥居龍蔵のノート(北海道・サハリン1921?)は、1912年の調査時のものと考えられる。たとえば、7月29日アイ村でアイヌの長老バフンケからの聞き取りが記されており、復命書と一致する箇所がいくつも見受けられる。1921年の調査は樺太北部のみでアイヌ集落での調査は行われておらず、このノートの読解が進めば、さらに南樺太での調査の詳細が明らかになり、当時の樺太アイヌの貴重な記録となるだろう。

また、このときの調査をまとめた論考は知られていないが、1919年の「考古学民族学研究・千島アイヌ」には、調査の成果が盛り込まれている。

4-2 1921 (大正10) 年の北樺太調査

東京帝国大学の人類学科生・宮坂光次を同伴して6月24日上野を出発、29日に北樺太西岸のアレクサンドロフスク(亜港)に着いた鳥居は、大陸のデカストリに渡りキジ湖周辺まで1週間ほど調査をした。7月9日に亜港に戻ると、今度はツイミ川を下りながら調査をおこない、東海岸のチャイヴォまで行き、再び調査をしながら7月26日に亜港に戻り、東京へは8月3日に帰った。鳥居は、1912年に調査した南樺太のポロナイ川とともに二大河川であるツイミ川は先住民が居住する中心で「各種の民族が多くこの河畔に集まって居る」と述べ、二度目はツイミ川を調査しようと考えたわけである。

調査では、船の漕手として雇ったニヅフから聞き取りをしながら、おもにニヅフの集落に立ち寄って調査をおこなったほか、トナカイとともに移動生活をしていたウイльтаのようすも写真に収めた。

4-3 樺太調査の出版物と評価

中川裕は、鳥居の写真を取り上げた展示図録の「北千島・樺太・東部シベリア調査」の解説のなかで、(執筆当時詳細が明らかでなかった1912年の調査を除いて)1919年、1921年の成果はいくつかの出版物となっているものの、どちらかというに見聞記・旅行記に終始しており、『千島アイヌ』のような民族誌としてまとまったものが書かれることはついになかったようである、とした。しかし、当時の北樺太、東シベリアの状況について、ロシア語の文献に頼るしかないため、実際の現地の様子を記録した日本語による報告書の存在はやはり貴重であり、また、出版物に掲載された写真類は、いまや撮影すべくもない非常に興味深い民俗資料が記録されている、とも評した。

5 鳥居が残した千島・樺太の写真と実物資料

鳥居が1990年代に注目されるようになったのは、1988-89年度の科研費で東大の総合研究資料館に残されていた写真(ガラス乾板やアルバム)の再生と整理がなされ、公開されたことが大きい。そして、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵のノート類が公開されたいま、国立民族学博物館(以下、民博)が収蔵する東京大学理学部人類学教室旧蔵の民族資料と、上記の写真、ノート類とを照合することにより、新たな知見がもたらされる可能性がある。

鳥居が撮影した千島アイヌの民具の写真は、大部分が民博の標本資料番号と照合できている。一方、樺太で収集された民族資料は、台帳類との照合ができていないものが少なくなく、鳥居の著作や報告書と同時代に石田収蔵の残した写真・ノート等を改めて検証する必要がある(齋藤2013)。次に、民族ごとに実物資料の状況や課題について挙げてみる。

5-1 千島アイヌ

日本国内に限らず世界的に見ても、千島アイヌに関する資料は、実物資料も写真も非常に少ない。そのため、鳥居の収集した民具と、撮影した写真は貴重なものとなっている。小杉康は、「物質文化

からの民族文化誌的再構成の試み ―クリールアイヌを例として」で、鳥居が残したものをはじめ、国内にあるおもな千島アイヌ資料を丹念に検証した（小杉1997）。

それから20年以上が経ち、国内外にあるアイヌ民具の研究が進むなかで、鳥居の収集した資料も再検討される時期ではないかと考える。たとえば、テンキと呼ばれる籠細工は千島アイヌに特有のもので、その製作技術は伝承されていなかったが、2000年ころにアイヌの工芸家が鳥居の収集した資料の熟覧調査などによって、復元した（齋藤2020）。また、発表者は近年、針入れと暦についても短い文章を書いており、このうち暦については、完全に解明されてはいないものの、ロシア正教会のペグ・カレンダーと呼ばれるものであることは間違いないと考えている（齋藤2019）。資料がアイヌ文化の復興に活用されたり、新しい知見が得られたりと、今でも物質文化研究の可能性は多く残されている。

5-2 樺太アイヌ

鳥居が収集した樺太アイヌの資料は、記録上は判然としなかった。しかし、1912年の復命書ならびにノートによって、栄浜アイ村で調査をしたことが確実となり、民博所蔵の東大旧蔵資料のうち、樺太アイヌ資料と推定されながら付随するデータのなかったものに、鳥居が収集した可能性が出てきた。たとえば民博の標本資料番号K4566とK4570は、東大の台帳『土俗品目録』での旧番号はK80、名称「布地片（2枚）」、地名「シベリヤ」、記事に「鳥居講師採帰」となっている。これらは、ロシアの博物館に所蔵されている資料によく似たものが複数あり、袖口に巻き付けて使うものとみて間違いのないだろう。『土俗品目録』は収集後しばらくしてから整理を経て作成されたものであり、記載に間違いや不足もあるので、別の記録等からも検証していかねばならない。

このほかにも、詳しい収集年月や収集地の書かれていない資料は、地域と民族が正しく分類されていない可能性もあり、民博の1993年の特別展図録「国立民族学博物館所蔵鳥居龍蔵収集の標本資料目録」の分類については、再度しっかり比較検証すべきである。

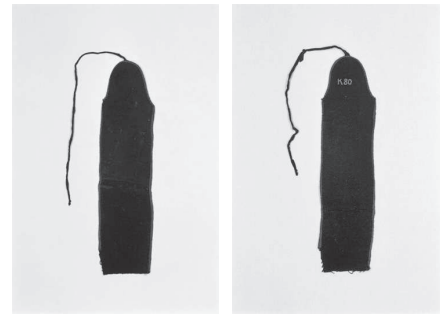


図3 鳥居が収集したとされる“布地片”（民博所蔵K4566、4570）

5-3 ウイルタおよびニヅフ

この2民族については1912、1921年の調査時に資料が収集されたが、1912年の記録がなかったためか、大部分の資料は『土俗品目録』に「大正十年七月、鳥居講師採集」と記載されている。

1912年の「拓殖博覧会樺太協會出品目録」に、鳥居の所蔵品として出品された「アイヌ土俗品」と「ギリヤークオロツコ土俗品」の名称が挙げられ、後者に「守神10種」が含まれている。鳥居の初期の著作「アイヌの木偶と云へる物」（1895）は、アイヌの木偶ではなく、ウイルタのものであることを指摘したもので、以前から関心をもっていたことをうかがわせる。民博が所蔵する東大旧蔵資料のなかで、ウイルタの木偶と推定されるものは9点あり、うちK2703～07の5点は鳥居が収集したという情報が付随していたが、詳しい収集地や収集年はわからなかった。しかし、公開されたノートの8月7日のページにはウイルタの偶像が描かれており、復命書によると同日は「「オロツコ」ノ村落「ロリタマ」ニ到リ風俗ヲ調査シ…」」（地名はおそらくルクタマの間違い）とあるので、所蔵資料を同定できる可能性がある。

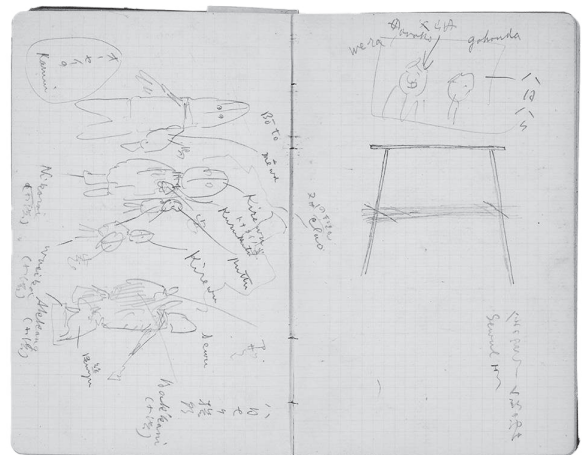


図4 鳥居のフィールドノート（北海道・サハリン1921?）（鳥居龍蔵記念博物館所蔵）



図5 鳥居が収集したとされる木偶（民博所蔵K2706）

6 おわりに

鳥居の調査後も千島アイヌの人口は減少を続け、20世紀半ばころには千島アイヌとしてのアイデンティティを表明する人はほとんどいなくなった。千島アイヌに関する調査記録は世界的にも貴重なものであり、鳥居自身もそれを認識していた。一方、樺太アイヌについては1912年に短期間ながら調査をしたにもかかわらず、個別の論考らしきものを書いていない。さらに、北海道アイヌについては、千島調査の際に立ち寄った択捉島以外、実地調査をした記録は今のところ知られていない。古文献に関する論考はいくつかあるものの、北海道のアイヌについて調べなかったのは、なぜだろうか。理由はいくつか思いつく。すでに北海道アイヌについては多くの調査記録があるため、千島や樺太での調査を行うことのできた立場からそちらに重点を置いたこと。北海道よりも千島・樺太のアイヌのほうが古い文化を保持していたとの説を持ち、民族の形成に関心を寄せていたことから、他民族との境界にあった人びとを重視していたからと考えられるだろう。

鳥居の千島・樺太での調査成果および関連資料が、もはや収集することのできない貴重なものであることはよく知られてきたが、それぞれの資料の照合や分析にはまだなすべきことが残されている。今後は、近年公開されたノート類を利用させていただきながら、樺太調査の行程や収集資料の同定などにも着手していきたい。

【おもな参考文献】

- 大塚和義「鳥居龍蔵の千島（クリール）アイヌ調査」「鳥居龍蔵のサハリン（樺太）とアムール（黒竜江）の調査」国立民族学博物館編『民族学の先駆者 鳥居龍蔵の見たアジア』26-30、32-36（国立民族学博物館、1993年）。
- 小杉康「物質文化からの民族文化誌的再構成の試み ―クリールアイヌを例として」『国立民族学博物館研究報告』21（2）：391-502（1997年）。
- 齋藤玲子「日本北部周辺の先住民族資料の理解のために」『民博通信』141：18-19（2013年）。
- 「千島アイヌの暦」『季刊民族学』168：72（千里文化財団、2019年）。
- 「アイヌのテンキとそのひろがり」『月刊みんぱく』44（12）：14-15（国立民族学博物館、2020年）。
- 「千島・樺太調査」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣、2020年）。
- 坂野徹『帝国日本と人類学者 1884-1952年』（勁草書房、2005年）。
- 杉浦重信「鳥居龍蔵の南樺太調査について」『北方博物館交流』17：32-35（北海道博物館交流協会、2005年）。
- 鈴木仁・出村文理「南樺太における鳥居龍蔵の先住民調査と復命書 附・「東海岸アイヌ族其他種族ニ関スル人類学調査復命書」翻刻」『鳥居龍蔵研究』3：49-86（2015年）。
- 東京大学総合研究史料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界 ―鳥居龍蔵の見たアジア―』（東京大学総合研究資料館／東京大学出版会、1991年）。
- 鳥居龍蔵
- 「アイヌの木偶と云へる物」1895年『鳥居龍蔵全集』第7巻：441-443（朝日新聞社、1976年）。
- 「西比利アの土人」1895年『鳥居龍蔵全集』第7巻：546-552（朝日新聞社、1976年）。
- 『千島アイヌ』吉川弘文館1903年『鳥居龍蔵全集』第7巻：1-98（朝日新聞社、1976年）。
- 「考古学民族学研究 千島アイヌ」原著は（仏文）『東京帝国大学理科大学紀要』第42冊第1編、1919年。小林知生訳、全集第5巻（朝日新聞社、1976年）。
- 『ある老学徒の手記』（原著1953年／全集第12巻所収、朝日新聞社、1976年）。
- 中川裕「北千島・樺太・東部シベリア調査」東京大学総合研究史料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界 ―鳥居龍蔵の見たアジア―』（東京大学総合研究資料館／東京大学出版会、1991年）。
- 吉原秀喜「鳥居龍蔵とパラサムレック ―1895（明治28）年のコラボレーション―」『鳥居龍蔵研究』2：193-202（2013年）。

鳥居龍蔵の学術遺産と中国研究

～成果の紹介と若干の提言～

吉 開 将 人

1 はじめに

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下「博物館」と略称）が開館10周年を迎えたことを、心から喜ぶたい。

10年前の開館記念シンポジウムに際し、私は求められて新聞に寄稿し、「徳島市で展示されるようになったこれらの品々は、今後地元の方々の手で整理・研究され、オリジナルな資料として鳥居の内面をより深く照らし出すであろう。鳥居の業績がこれまでにない新たな像を結ぶことを、私は大いに期待している」と述べた（吉開2010d）。期待したとおり、博物館の歴代スタッフの皆さんによる着実な仕事の成果として、膨大な収蔵品が秩序だったものとして整理されたことにより、半ば忘れられていた品々が改めて研究者の関心を集め、鳥居に関する論考が相次いで世に出されるようになっていく。今回のシンポジウムのテーマである鳥居の「学問と資料の意義」についても、すでにユニークな企画展示が開催され（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館2016）、また先頃にはこのテーマに直結する論文集『鳥居龍蔵の学問と世界』が刊行された（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会2020）。遠方に住む研究者の一人として、地元の皆さんの日頃のご苦勞に対して感謝するとともに、鳥居に対する熱い思いに心から敬服する次第である。

私は、かつての鳥居と同じように若き日に偶然の縁で中国に渡り、以後、中国に対して深い関心を抱くようになり、特に西南中国をフィールドとして中国研究を続けている者である。私の渡航地域は中国・台湾に限られていて、日本国内各地から極東各地にまで及んだ鳥居のそれとスケールのまったく比較にならないが、今回のシンポジウムの開催にあたり、鳥居の「学問と資料の意義」とその「現代的価値」を報告するよう求められた。以下では、私の中国研究のなかから三つの成果を選び、それによって鳥居の「学問と資料の意義」を紹介し、それぞれの議論の内容に照らして若干の提言を行ないたい。

2 鳥居の「学問と資料の意義」を同時代の学問的世界観に照らして理解する

鳥居の没後、その「学問と資料」に関して発表された研究成果は膨大にある。それらの研究のうち、日本国内で発表されるものの多くは、「鳥居という人物」や鳥居が立脚した「日本という場」「日本の学問」に対する関心を前提として行なわれてきた。一方、海外をフィールドとする日本人研究者や海外の研究者によって発表されるものは、鳥居の調査対象であった現地に関する研究において、今日その「学問と資料」にどのような意義を認め得るのかという関心から行なわれてきた。

私は、従来型のこれら二つの関心のあり方とは異なる研究があってもいいだろうと考える。鳥居その人やその人生に特別な感情を抱きやすい日本人や、あるいは鳥居の「学問と資料」の価値を知る「日本通」の外国人研究者に向けた研究は、すでに十分な成果があり、後述する新史料の新たな可能性を除けば、おそらく単なる細分化に向かうことが目に見えている。そもそも、日本人にとって鳥居が活躍した戦前の記憶はもはや遠い過去のものとなり、鳥居その人やその人生に特別な感情を抱く日本人は減るばかりであろう。また、日本の国際的地位が低下するなかにあっては、鳥居に関心を持つほどの「日本通」の外国人研究者が増えることもあまり期待できない。このままでは、日本国内でも海外

でも、常連の鳥居龍蔵研究者が思い出したように時々成果を世に出すだけ、という状況になることが懸念される。

私は鳥居の「学問と資料」にはさらに研究を深めるべき多くの鉱脈が今も眠っており、特に博物館に収蔵される資料は、第一級の「宝の山」であると考えます。もし上述のような状況になるのであれば、あまりにもったいないことである。過去の成功経験にとらわれずに鳥居の「学問と資料」に対する新たな研究視角や利用方法を開拓し、鳥居に関心を持たない人々にも理解しやすいかたちで、その価値を発信することが必要である。

そうした考えから、中国研究を専門とする研究者である私は、鳥居本人に関心はないが中国史には関心を持つ日本人や、そもそも彼を知らない中国国内の歴史学界の研究者たちに、鳥居の学術遺産について関心を持ってもらいたいという思いで、鳥居に関する幾つかの研究を行ってきた。

その特徴は、鳥居の「学問と資料」を「鳥居という人物」や鳥居が立脚した「日本という場」「日本の学問」に対する関心とは無関係に、単に中国研究に役立つ貴重な研究資料として中国研究の関心に利用するというものである。あるいは、それは扱う対象に対してあまりにも冷淡でこれまでの鳥居研究の研究史を無視するものだ、という批判を受けるかもしれない。しかし私は鳥居の学問に深く関心を寄せ、またこれまでの研究蓄積に敬意を抱く者として、あえて幾つかの提言をしたい。

第一の提言は、鳥居の「学問と資料の意義」は、今日的な常識や学術的関心によるのではなく、同時代における鳥居の学問的世界観に照らして理解しようとしなければならない、という点である。

鳥居は「日本という場」に身を置き、「日本の学問」に貢献した研究者であり、最終的に独自の「日本人」論を壮大な学説として世に出した。そのことに鳥居の業績の特徴があることは否定しない。しかし、鳥居が一貫して「日本」を軸とする関心につき動かされて海外を調査していたかと言えば、それはあり得ない。鳥居の時代の「日本」が今日の日本の版図と比べてはるかに大きいものであったことは言うまでもない。そしてこのこと以上に重要なのは、鳥居の学問的関心の広がり「日本という場」「日本の学問」という今日の私たちの常識とはかけ離れたもので、その発想も日本が西洋列強の後塵を拝しつつアジアへと雄飛を夢見ていた特殊な時勢を背景とするものであった、という点である。

そのことがよくわかる事例として西南中国調査について見てみよう。鳥居龍蔵は、1902年9月から1903年2月にかけての約半年間、西南中国に滞在して現地調査を敢行した。ここで言う西南中国とは、今日の中華人民共和国西南部を意味し、おおよその地理範囲としては湖南西部・貴州・雲南・四川省（時にチベット自治区までを含む）にまたがる。この地域は現在においても多くの非漢民族（少数民族）が暮らす土地で、中国共産党が言うところの全国55の少数民族のうち25が、漢民族（漢族）とパッチワーク状に組み合う分布状況を見せている。鳥居は、この西南中国（チベット自治区を除く）の広大な地域をぐるりと一周めぐるようにして、広域にわたる調査旅行を行なったのである。

1903年3月に帰国した鳥居が政府に提出した出張報告書「人類学上取調報告」（以下「報告」）が、同年5月5日の『官報』に掲載されている（図1）。鳥居はその中で「清国」への「旅行調査」の目的について、



図1 「人類学上取調報告」

小官ノ今回清国ヲ旅行調査ヲシタル目的ハ、聊カ愚考ノ存スル所ニシテ、之ヲ開陳セハ左ノ如シ。小官ハ大学ノ命ニ依リ、台湾本島及紅頭嶼ニ赴ク都合四回ニ及ヘリ。此四回ノ出張ハ、専ラ台湾ノ生蕃而已ニ就テ、調査ナシタルモノナリ。台湾生蕃ノ調査ニ就テハ、台湾生蕃人其ノ者ノミヲ調査ナシタリトテ、未タ其人類学的性質ヲ発見スル能ハス。是等蕃人ニ関係アル他ノ蛮族ノ比較調査ヲ待テ、始メテ其性質ノ何タルヲ明ニナスヲ得ヘシ。……欧人中説ヲナスモノアリ、台湾北部ノ生蕃即チ所謂黠面蕃ト称スルモノハ、支那ニ現在スル苗族ト深キ関係アリト。若シモ此

説ニシテ事実ナリトセハ、彼ノ黥面蕃ナルモノハ、素南支那ニ棲息セシモノニシテ、其一部分カ台湾ニ移住シ、遂ニ今日ノ黥面蕃ヲナセリト云ハサル可カラス。小官ノ今回清国ニ旅行セシハ、全ク黥面蕃ハ苗族ノ一種ナルカノ疑問ヲ決定セント欲スルニアリシナリ。(句読点は筆者加筆、以下同じ)

と述べている。これにより、鳥居の西南中国調査が、それに先立って彼が台湾で行なった「生蕃」(今日の台湾で言う「台湾原住民」)調査の延長上に計画されたものであることが明らかである。具体的に言えば、「台湾ノ生蕃」の中でも「台湾北部ノ生蕃即チ所謂黥面蕃」(今日の「タイヤル族」)が「支那ニ現在スル苗族」と深い関係を持つという西洋人の学説に刺激を受けて、「黥面蕃」は「南支那」から台湾に渡ってきたのではないかという仮説を立て、それを裏づけるために「苗族」の現地調査に赴いたということである。

ちなみに、「苗族」という表記を持つ民族は現在の中華人民共和国にも存在し、中国の漢字音によって、日本を含む海外では一般的に「ミャオ族」と呼ばれている(図2)。中国共産党が言うところの全国55の少数民族のうちの一つで、西南中国を代表する非漢民族である。ただし、鳥居が現地へと向かった時代においては、歴史的に南中国各地に暮らしてきた雑多な系統の非漢民族の総称が「苗族」であった。現地調査の後に鳥居は調査対象を「狭義」「純粋」の苗族に限定したことを強調しているが、それさえも現在の中国における民族分類を基準にすれば、今日言うところのミャオ族だけでなく、他の複数の近隣諸族を包括するものであったことがわかる。

以上をまとめると、鳥居は純粋に台湾「生蕃」の民族史的関心から南中国の非漢民族全般に漠然とした関心を抱いて「清国」に渡り、今日のミャオ族を中心とする西南中国の非漢民族を調査したことになる。

今日のミャオ族を含め、西南中国に暮らす非漢民族に対しては、1980-90年代に日本民族あるいは日本の基層文化の源流を南中国からブータン方面にかけての地域に求めようとする「照葉樹林文化」論が流行したため、その後の日本国内ではそうした視点で関心を持たれることが少なくない。生前の鳥居もまた、日本列島および海外各地での調査成果を集大成して独自の「日本人」論を世に出した際、西南中国の「苗族」を「日本人」の系譜の一つとして位置づけ、銅鐸を「苗族」の一部に見られる青銅製楽器「銅鼓」と関連づけるなどの主張を行なっている。ただし、鳥居のそうした発想は、あくまでも西南中国での知見を基礎とした、帰国以後の後付け的な「思いつき」によるものに過ぎず、本来的に「苗族」に注目したのは、「日本人」論的関心ではなく、純粋に台湾「生蕃」の民族史的関心によるものであったことが、前掲「報告」などの当時の記述からわかるのである(吉開2007)。

しかもその契機を用意したのは、「日本人」論とは無関係な、今日の台湾で言うところの「台湾原住民」に関する学説であり、そしてそれは実に西洋人の学説であった。そこには「日本という場」や「日本の学問」を主眼にしていた形跡は見えず、むしろ西洋学術界に対する鳥居のライバル意識を読み取るべきである。先に、鳥居の「学問と資料の意義」を、今日的な常識や学術的関心によるばかりではなく、同時代における鳥居の学問的世界観に照らして理解しようとしなければならぬと述べたことの意味が、これによってご理解いただけたであろう。

鳥居の「学問と資料の意義」を、今日の私たちの常識を捨てて理解することの必要性は、以下の事実について検討することによって、さらに明白となる。

鳥居は、西南中国から帰国して4年後の1907年に、正式な調査報告書として『苗族調査報告』(図3)を刊行する(以下『調査報告』)。その末尾には、以下のようにある。



図2 鳥居が撮影した現ミャオ族

支那ノ古書タル『書経[尚書]』ヲ繙ク毎ニ、余ガ一種云フ可カラザル感興ヲ以テ読ムハ、彼ノ「三苗」記載ノ條ナリ。漢民族ノ未ダ侵入セザリシ以前ニアリテハ、其地ノ中央部及び南部ハ彼等「三苗」ノ盛大ナル居住地ナリシナリ。……昔日ノ三苗ノ国ハ今ヤ悉ク漢民族ノ有ニ帰シ、……支那ノ古代史上ニ於テ、否ナ東亜ノ古代史上ニ於テ最モ著明ナリシ三苗ノ状態ハ實ニ上記スルモノノ如シ、吾人ハ今筆ヲ投ジテ其当時ノ彼等ヲ推想ス、又豈ニ一種ノ感慨ナキ能ハザランヤ。(□は筆者補足)

これにより、鳥居は西南中国で自らが調査した「苗族」の民族史を、中国古典中の「三苗」に関する上古史の記事と結びつけて理解していたことがわかる。

注目したいのは、彼が「苗族」の先住地を、自らの調査地であった西南中国辺境とせず、中国大陸の「中央部及び南部」の広大な地域としている点である。鳥居は、「南部」すなわち江南などの長江流域にとどまらず、「中央部」すなわち黄河流域の中原もまた、太古において「苗族」の暮らした土地であり、中国への「侵入[者]」の漢民族がそれを駆逐した結果、現状が形作られた、と理解していたのである。つまり、中国先史文化の担い手は漢民族ではなく「苗族」であった、そして先住民族の「苗族」と外来民族の漢民族はまったく別の歴史伝統を持つ民族であって両者は交わることがなかった、というのが当時の鳥居の考え方だった(漢族外来/苗族先住説)。実は明治日本において、漢族外来/苗族先住説に立つ中国文明論や中国民族史像は、決して鳥居一人の孤立した考え方ではなく、西洋学術界に由来する最先端の学説で、学校教科書などを通じて日本の社会全般にも広く流布していたのである(吉開2008・2020a)。

「黄河文明」や「中国四千年の歴史」というイメージを強く持つ今日の私たちにとって、漢民族が中国大陸の先住民族をもとにして形作られたものであるとする認識や、また中国大陸の土着民族である漢民族の祖先が中国先史文化の担い手であったと理解することは、すでに半ば常識となっている。今日までの中国国内の考古学的成果もそれを支持しており、少なくとも漢族外来/苗族先住説を裏づける証拠は何もなく、今となっては、漢族外来/苗族先住説は過去の荒唐無稽な学説に過ぎない。

しかしながら、このような今日的常識に照らすだけでは、鳥居の西南中国調査の意義は理解することはできない。同時代における鳥居の学問的世界観に照らして理解するならば、鳥居は台湾「生蕃」の源流を求めて西南中国に赴いたが、それは「苗族」が中国大陸の先住民族であると認識していたからであり、その認識を前提に、外来民族の漢民族の黄河流域への侵入、黄河流域の先住民族の「苗族」の南下、そして「苗族」の台湾への移住という、太古の東アジアにおける壮大な民族史の展開を想定していたからであることがわかる。鳥居の西南中国調査は、要するに中国大陸を舞台とした「有史以前の中国民族史」というべき関心から行なわれたものだったのである。

結局のところ、鳥居は西南中国における「苗族」調査で、台湾「生蕃」の源流につながる決定的な発見をすることはできなかった。しかし、「苗族」の諸文化に中国文化の古層を認め、報告書末尾に先の記述を残すことになった。そして先述のように、日本とのつながりを着想として得て、後に「日本人」論を壮大な学説をまとめ上げる際、西南中国の「苗族」を「日本人」の系譜の一つとして位置づけるに至ったのである(吉開2013)。

3 中国近代学術史研究への応用—清末中国知識人への影響

第二の提言は、鳥居の「学問と資料の意義」を同時代における鳥居の学問的世界観に照らして理解するだけでなく、その学術的成果の影響についても同時代における国際環境を踏まえ、日本国外に

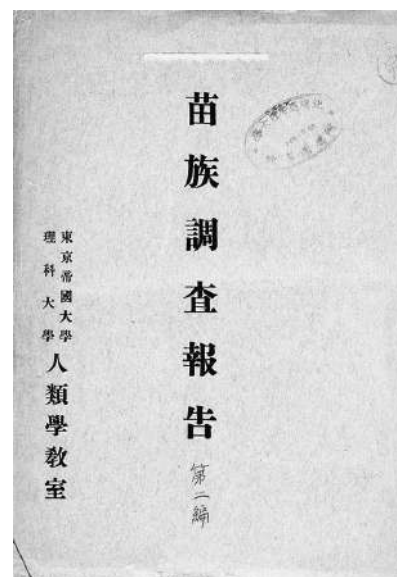


図3 『苗族調査報告』表紙

も目を向けて理解する必要がある、という点である。

先に、1903年3月に帰国した鳥居が前掲「報告」を政府に提出し、それが同年5月5日の『官報』に掲載されたことを紹介した。鳥居のこの報告に読者として接したのは、日本人だけではなく。政治的混乱の中にあつた清朝末期の中国を逃れ、隣国日本に活動の場を移していた中国知識人たちの中にも、それを読み、注目した者がいたのである。その一人が蔣智由という人物であつた。

当時、蔣智由は、今日の横浜中華街の一角にあたる住所で、『新民叢報』という雑誌を、近代中国を代表する中国知識人として知られる梁啓超とともに、漢文で発行していた。「観雲」という字で、彼が同誌の第31号（明治36〔1903〕年5月10日刊）に発表した「中国上古旧民族之史影」という論文（図4）には、以下の記述が見られる。

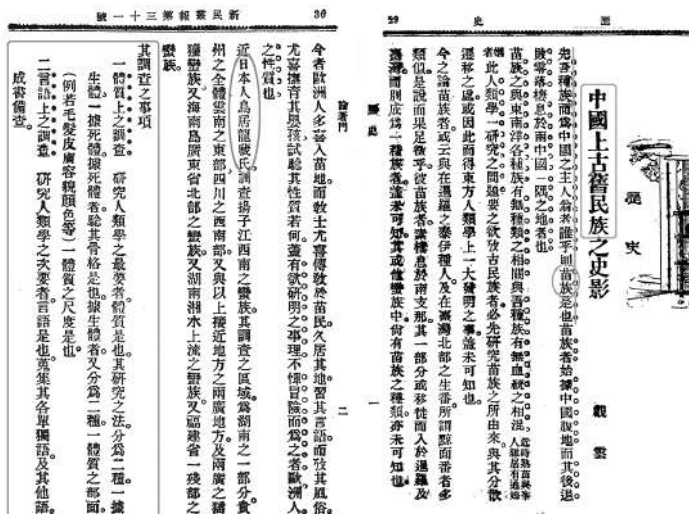


図4 『新民叢報』上の蔣智由論文

わが種族〔漢民族〕の前に中国の主人だつたのは誰か。それは苗族である。苗族は、当初中国内地にいたが、その後〔漢民族に〕敗れ退いて凋落し、南中国の辺境に暮らすようになった。苗族が東洋・南洋の各種族と種類〔種族〕上の関係を持つのか否か、わが種族と血統の混合があるのか否か（近時の熟苗〔と呼ばれる民族集団〕は華人〔漢民族〕と雑居し通婚する者である）、これは人類学の一つの研究上の問題である。要するに、〔中国の〕いにしへの民族を研究しようとする者は、必ずやまずは苗族の由来と分散移動を研究しなければならないのである。これによって東洋の人類学に一大発見があるかもしれないが、いまだ明らかではない。……近ごろ日本人の鳥居龍蔵氏は、揚子江西南の蛮族を調査し、その調査地域は湖南の一部分、貴州の全体、雲南の東部、四川の西南部で……あつた。その調査項目は、（一）体質上の調査……、（二）言語上の調査……、（三）土俗上の調査……、（四）考古歴史上の調査……、（五）写真撮影であつた。……苗族は、今日にあつて衰退し凋落しているが、往古にあつては広い地域に暮らしており、その勢力はあるいは今日の何百倍であつた。その文化の有無、および文化の程度がどのようであつたかについては、歴史上の謎である。（下線は筆者による加筆）

下線部で鳥居の西南中国調査が紹介されているが、その内容は『官報』掲載の前掲「報告」の抜粋である。5月5日の『官報』記事が5月10日の『新民叢報』に漢訳されて紹介されていることに驚かすにはいられない。それほどまでに、中国知識人たちは鳥居の西南中国調査の成果に衝撃を受けたのである。

そのことの意味を理解するには、ここに至るまでの中国知識人たちの「自国史」「自民族史」像の変容について、若干の説明が必要である。前近代の中国において、「天下」の広がりやその枠組みを理念的に論じたり、文明の内と外を区別する「華夷の別」（いわゆる「中華思想」）を論じたりして、それを歴史と結びつける議論をすることは盛んに行なわれていたが、そうしたものは西欧近代に由来する「国民国家」的な枠組みを前提とした「（自）国史」「（自）民族史」的な歴史認識や歴史叙述の方法と質的に異なるものであつた。中国知識人は近代以後、海外から中国に流入した書物を通じてすでにそのことを意識しつつあつたが、中国の伝統思想や歴史学におけるその欠落を重大な問題として理解するようになったのは、すでに近代的な「自国史」「自民族史」の構築に一定の成果をあげ、さらには近隣諸国の民族盛衰の歴史を含めた「東洋史」の構築へと進もうとしていた明治日本で暮らす蔣智由や梁啓超など、留日知識人たちが初めてであつた。彼らは日本の各種新刊書を通じて、「自国史」

「自民族史」構築の参考となる最新の知識を得ることを目指し、伝統的中国思想における「華夷の別」ではなく「民族」（当時の用語は「種族」）概念により、満洲族が漢民族に君臨する清朝国家体制を論じ、現状の当否と将来像を中国の過去の歴史と関連づけて評価しようとした。また、日本を含む列強に侵食されつつある母国の現状に強い危機感を抱き、伝統的な「王朝史」とは異なる近代的な「（自）国史」を新たに世に出すことによって、母国の大衆の「愛国心」を鼓舞しようとし、それに役立つ過去の史実を太古の歴史にまで探し求めたのである。

こうした動機による「自国史」「自民族史」の構築に向けた活動の中で、蔣智由が明治日本の歴史学説から学んだのが、先に鳥居の台湾から西南中国への関心の展開について読み取った、漢族外来／苗族先住説であった。蔣智由の「中国上古旧民族之史影」論文には、漢族外来／苗族先住説からの影響を容易に見て取れる。彼らが最新の歴史学説として出会ったばかりの漢族外来／苗族先住説について、折しも日本人の鳥居が母国の辺境から現地調査の成果として関連する知見を持ち帰った。蔣智由はそのことに衝撃を受けて各地の中国知識人に向けてそれを速報した、と理解されるのである（吉開2009a・2011）。

今日から見れば荒唐無稽な学説に過ぎない漢族外来／苗族先住説は、蔣智由や梁啓超らによる受容と宣伝を経て、中国学術界では1930年代まで、中国社会一般には1940年代まで強い影響を残した。鳥居の西南中国調査の成果についても、漢族外来／苗族先住説の流行・残存をめぐる中国学術界・政界の姿勢と連動するかたちで、その後20世紀前半の中国国内において、時に崇敬の念をもって利用され、時に警戒心をもって排斥されるという展開を見せたのである（吉開2009b・2010a・2010b・2010c・2020a）。

以上二つの話題は、ともに中国近代学術史研究としての成果である。「学術史」の研究というと、それを「学史」についての研究と混同する人が多いが、両者は本質的に異なるものである。

「学史」は、研究者が自分の進める研究の位置づけを明らかにするために、過去の学説の展開をたどるもので、過去の学説との異同を示すことによって自らの研究に意義を示すという目的意識を持つ。関心の対象は、過去の学説やその基礎となったデータ、背景としての諸学説、さらには過去の研究者その人である。

「学術史」も、過去の学説や研究者その人に注目する点ではそれと変わりがないが、問題意識としては学術を切り口に歴史を読み解こうとすることに重点があり、関心は学説そのものや研究者その人ではなく、それを生み出したもの、すなわちその研究者の活動や思考に影響を与えた制度、社会、政治、国際関係、思潮などにある。

鳥居の過去の学説や学術活動は、「学史」研究においては、あくまでも今日に至るまでの通過点として、しかもすでに若干色あせた存在として紹介されるものでしかない。ところが、「学術史」研究においては、上述のような荒唐無稽で今日的には全く意味を持たない誤った学説であっても、真正面から扱うべき研究上の主題となり、鳥居の過去の学説や学術活動はそれ自体として光を放ち、背景にある歴史的な諸問題を浮かび上がらせ、その歴史的意義を自ら語ろうとするのである。

4 中国近代史研究への応用—辺境地域史における史料的意义

第三の提言は、鳥居の「学問と史料の意義」は中国近代学術史の研究だけではなく中国近代史研究からも考える価値のある問題であり、中国近代史研究への利用価値を示すことで、従来とは違う対象に向けて鳥居の「学問と史料の意義」をアピールすることができるだろう、という点である。

日本国内で鳥居に対する関心が高まった1980-90年代に、その西南中国調査の意義を紹介したのは、おもに人類学者たちであった。彼らは、鳥居のもたらした民族資料や写真などの記録が、自分たちの時代に現地ですべて入手できるようになった人類学のデータとどのように対比可能であるかを論じることで、鳥居の学術遺産の価値をわかりやすく世に示したのである。しかし今や中国社会の急速な近代化により、人類学的フィールドとの物理的距離は近づいたが、歴史的時間の流れとしては鳥居の調査した「過去」は遙か彼方へと遠ざかり、現地ですら風景はそれとあまりにも隔たったものになっ

てしまった。今日、かつての人類学者たちと同じ手法で鳥居の西南中国調査の意義やその遺産の価値を主張しても、新奇性や説得力はない。

そのように考えて、私は鳥居の西南中国調査について、人類学ではなく歴史学的手法により、研究を進めてきた。その成果の一つが、前章までに紹介した中国近代学術史の研究であり、もう一つが以下に紹介する中国近代史の研究である。

西南中国は、黄河流域の中原や華北を中心とする一般的な中国王朝史・中国史全体から見れば歴史の片隅でしかない。ところが、各王朝・国家の辺境経営に注目した場合、歴史的にきわめて重要な役割を果たした地域である。鳥居が西南中国で通過した経路もまた、歴史上の幹道であった。鳥居の西南中国調査時の通過地点で、歴史的な関心から注目される場所は無数にある。

私は、目下進めている中国近代史関係の研究課題の必要から、2018年に四川省南部の涼山彝族自治州（州都は西昌市）という地域を調査し、その際に、そこがかつての鳥居の通過地であることに気づいた。

涼山は、今日「彝族（イ族）」と呼ばれる非漢民族が、多く集住する地域である（図5）。鳥居は前掲の「報告」でこの地を通過したことを述べ、今日のイ族を当時の呼称である「獯猓」と呼んで記述しており、また写真を撮影し、帰国後に発表した数々の講演や論文の中でも現地で得た知見について紹介している。ところが、西南中国調査の正式な成果報告書である前掲『調査報告』は、あくまでも「苗族」への関心から執筆されたものであり、同書に涼山の「獯猓」についてのまとまった記述はなく、「獯猓」についての報告書と呼ぶべき著作も存在しない。ただ幸いにも、鳥居は1926年に『人類学上より見たる西南支那』という旅行記（図6）（以下『西南支那』）を刊行しており、現地についての詳細な記録を見ることができる。

例えば、鳥居が1903年1月に通過した「越嵩城」、すなわち現在の四川省涼山彝族自治州越西県の中心都市について、鳥居は前掲『西南支那』に以下のような記述を残している。

[1903年1月10日] 越嵩城に達した。……今夜此処の知府〔「同知」の誤記、以下同じ〕を訪うて暫し談話した。……一月十一日、晴天、今日は当地にて獯猓〔現イ族〕を調査するに就いて一日滞在することになった。午前九時知府は余を旅館に訪問し、本日晚餐に招待するとの挨拶があったが、余は午前十時に知府を衙門に答訪する約束をした。午前十時約に依つて余は衙門〔役所〕に赴いた。衙門には人質として獯猓を六十余人、大人と子供とを合せて入監してあつた。若し代りのものが来れば在監のものは帰すといふことになつて居るとのことである。余は其の中より大人六名、小兒二名、少女四名を撮影し、後に大人四名の身体を測定した。……今日獯猓が衙門に來り、訴へをするのを見た。

同書全般における鳥居の記述は、現地で目撃した人々の姿や文化については詳細だが、歴史学的な関心対象となる当時の街や役所の様子は簡略で、面会した人物に至っては、相手が高官であっても名前さえ記録していない。彼にとっては、おそらく関心事ではなかったのだろう。



図5 鳥居が撮影した現イ族

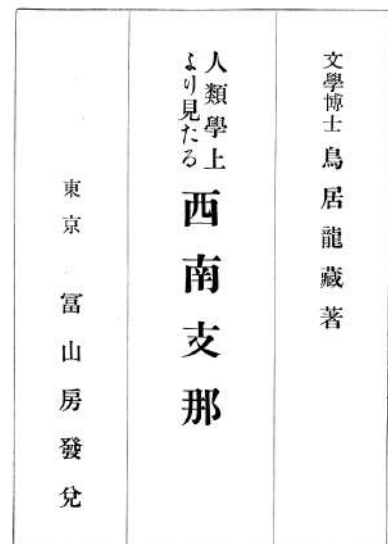


図6 『西南支那』中表紙

しかし幸いにも、この地は辺境地域ではあるが、中国国内の他地域と同じく、様々な文献が残されている。なかでも、鳥居が旅した清朝末期の地方官府が各地の歴史・地理・現地事情などについてまとめた地誌（地方志）は、鳥居の記録と比較すべき最良の材料となる。この「越嶠城」についても、1906年刊行の馬忠良修・馬湘ほか纂・孫鏘ほか続修『（光緒）越嶠〔嶠〕庁全志』（以下『全志』）が存在する（図7）。「庁」とは、県（あるいは州）と同じく中央集権制の末端に設けられた行政単位の名称である。

この『全志』の記述を参照すると、鳥居と知府との面会日が清朝の旧暦で言えば光緒28年12月12・13日に相当することから、面会相手として条件に適合するのは、寧遠府の同知（次官）として越嶠庁に在任していた孫鏘（浙江省奉化県〔現寧波市奉化区〕人、光緒27〔1901〕～光緒29〔1903〕年冬在任）ただ一人となる。『全志』の巻首には、その出版に貢献した人物として、孫鏘の肖像が掲載されている（図8）。鳥居は、まさにこの人物と面会したのである。

『全志』には、鳥居の記述の後段部分に関係する内容として、「同知署」（衙門）内に「供役所」、すなわち「夷〔現イ族、鳥居の言う「獠猓」〕目〔頭目〕を羈縻〔軟禁〕して換班〔輪番交替〕させる」場所があり、1867年に建てられて1870年に増築されたこと、1900年に雨で「夷卡」が倒壊し、1901年に同知の孫鏘が衙門の「三堂」東側の「夷卡」を修築したこと、などの説明が見える。これにより、1903年に鳥居が同知の孫鏘を訪問した際、目撃したのはまさにこの「換班」の制度であり、「人質」の写真を撮影した場所は、「供役所」の「夷卡」と呼ばれた施設で、孫鏘が修築したものであったことがわかるのである。

鳥居が面会した越嶠庁同知の孫鏘は、「夷務」（夷人〔鳥居の言う「獠猓」〕に対する統治）の近代化に特筆すべき業績を残した地方官であった。清朝は1901年から近代改革（清末新政）を始動し、その影響がこの辺境の地にも及んでいたのである。『全志』によれば、孫鏘は県城で近代的教育の振興などに尽力したほかに、夷人に対しては「剿」（鎮圧）ではなく「撫」（懐柔）の方針で臨むべきであると主張し、現地の夷人戸口など社会の実状を調査させ、また「〔夷〕卡」の「夷童」の教育と、漢語・夷語の分類編訳（語句対訳一覧作り）を命じたという。鳥居が旅した越嶠は、開明的な地方官であった孫鏘の下、時代の狭間に立ち現れた、一瞬の平穏のなかにあったと言えるのである。

鳥居が残した写真を調べてみると、越嶠庁衙門の「夷卡」で撮影したと見られるものが見出される（図5）。写真を注意して観察すると、人物の背後に、元々は縦書きであった文字列が横向きになって見えることに気づく。今日知られる画像を表裏反転させてみると「越嶠〔嶠〕撫夷」と読めそうである（図9）。「撫夷」（夷人〔鳥居の言う「獠猓」〕の鎮撫）の2文字は、以上で述べた孫鏘の政策や「夷卡」の実態と矛盾しない。衙門の牌や聯、あるいは標語など、文字が書かれていた廃材を再利用して



図7 『越嶠庁（全）志』



図8 孫鏘（玉僊〔玉仙〕）肖像



図9 図5写真（表裏反転）の一部

建てた「夷卡」の塀や建物の壁を、背景として撮影されたものであろう。この写真で世に流布する画像は、ガラス乾板の表裏を誤って焼き付けたものと見るべきである。

清代の「夷卡」の実態を撮影した写真は、ほかに例を見ない。その点からもこの一枚の古写真の価値が見て取れよう。

以上、鳥居が「越嶲城」で記録した「知府」や「獮猓」の「人質」をめぐる、彼が目にするものなかったであろう『全志』を利用して考証を加え、鳥居が残した記録や写真が、中国近代史研究のなかに置かれることで新たな学術的価値を生み出すことを明らかにした（吉開2020b）。

今回紹介したのは、限られた地域の特殊な歴史に関係するものに過ぎなかったが、おそらく前掲『西南支那』など、鳥居の中国大陸各地での調査に関する様々な記録には、他にも多くの歴史的に重要な記述が残されていると思われる。

あるいは、中国現地に今回の『全志』のような官府編纂の各種史料が残っているのであれば、中国史を検討する上で鳥居の記録は価値を持たないと思うかもしれない。ところが、鳥居が旅した清末の中国については、地方の政情や経費の問題で地方志編纂そのものが成し遂げられなかった地域も多く、また地域によって完成度に優劣の差が顕著である。また一般的に、中国史料は膨大にあるとはいえ、かつての中国の人々にとって当たり前のことは記録されないのであり、各地の日常風景のなかにあったものの多くは当時の史料にまとまった記述がなく、むしろ外国人旅行者などが好奇の目で記録した文章や、彼らが現地で撮影した写真が価値を持つことの方が多いのである。

そうした状況にあって、鳥居の記録や写真は、官府編纂史料の空白を埋める内容を含む可能性を持つ。同時にまた、現地の各種史料は、鳥居が現地で記録して残さなかったもの、あるいは鳥居が記録したもののその後の歴史を明らかにし、鳥居の調査の意義を中国史の中で歴史的に評価することを可能にするのである。

5 「宝の山」の博物館資料―「原典」そしてその根本史料としての「日記」の重要性

以上、中国研究を専門とする日本人研究者の立場と関心から、鳥居の西南中国調査を題材に三つの研究成果を紹介し、あわせて若干の提言を試みた。

最後に、ここまでの議論を踏まえ、研究の基礎となる資料面の問題について論じ、今後の研究の大きな可能性を述べて全体の結びとしたい。

以上の議論のなかでも幾つか言及したように、鳥居は西南中国調査から帰国すると、まず前掲「報告」（図1）をまとめ、また多くの発表や講演をこなし、少なからずの論文を発表して、最終的に前掲『調査報告』（図3）を刊行している。これらの文章や刊行物は、鳥居の死後、関係者たちにより、1970年代に整理されて『鳥居龍蔵全集（全12巻・別巻）』（鳥居1975-1977）に収録された。また鳥居本人も、世を去る直前に『ある老学徒の手記』という回顧録（鳥居1953）を出版し、自らの言葉で自身の学問の形成過程を説明している。

これらの全集と回顧録の完成度の高さは、後の研究者たちが鳥居の学問を理解する大きな助けとなり、1980-90年代に鳥居研究の一大ブームを生み出した。しかしながら、全集と回顧録の利便性は、鳥居が様々なかたちで残した「原典」、すなわち初出の文章や刊行物の現物を利用する機会を減じさせた。研究者たちは、全集と回顧録だけによって、鳥居の学問について研究し、論評するようになったのである。

1980-90年代にこの問題に気づいた人がいなかったとは思えないが、鳥居の弟子や全集の出版に尽力した人々がまだ存命中であった時期には、それを指摘することは大いに憚られたに違いない。そして残念なことに、今もなお全集と回顧録だけによる研究が世に出され続けているのである。

そうしたなかで、私を含め、今日の幾人かの研究者たちは、鳥居の原典のほとんどが全集に収録された際に手を加えられていること、あるいは翻訳に際して意識・誤訳が生じていることなどに気づき、意識的に原典である文章や刊行物を利用して鳥居の学問を語り始めている。21世紀の鳥居研究は、この原典主義をまずは基本原則としなければならない。

さらに、博物館が開館から10年になるまでの過程で、徳島に残る鳥居の資料が整理・公開され始めたことで、今後の鳥居研究はさらにもう一段階高みに進もうとしている。

鳥居は前掲『西南支那』(図6)の序文に、それが「日記の文章に一つも加筆や削減等を実施せず」にまとめたものであることを述べている。こうした記述によって、鳥居が調査時に「日記」というかたちで詳細な記録を残したこと、そしてそれが前掲『調査報告』のような学術成果や『西南支那』のような出版物の基礎データとなったことが、従来から研究者の間では知られていた。ところがそれらの現物は正式に公開されておらず、一部を鳴門の博物館の展示ケースで見る以外になかったのである。

今日、博物館に収蔵された「日記」の現物は、その幾つかが画像データベース上ですでに公開され、未収録のものについても、博物館が研究者に対して利用の便宜を図り始めている。今後、「日記」の公開と利用が進む中で、鳥居研究は文章や刊行物に基づく原典主義から、またそれらの根本史料である「日記」などの各種史料に基づくものへと、さらなる展開を見せることは確実である。

私にとって『西南支那』をその根本史料である鳥居の日記の記述と比較しながら再検討することは目下急務の課題であり、先頃、新型コロナ流行の谷間に徳島に向いて、日記を閲覧する機会をいただいた(図10)。私自身の都合で調査時間が限られ、また短い時間で記録して持ち帰ったデータさえも、その後の多忙のために十分な分析をするに至っていない。そのため、今回それを利用し、以上での議論に盛り込むことができなかつたことを、残念に思う。

ただし、以下のわかりやすい例を、ここまでの議論と関連づけて簡単に紹介することは可能である。

ここに挙げたのは、鳥居の西南中国調査時における「日記」の冒頭部分の写真(図11)である。そこには、調査の目的が「苗族の調査」にあり、「台湾の黥面蕃は南洋[今日の東南アジア]、ふいりつびん[フィリピン]、まれい[マレー]諸島[今日のインドネシア]より来りしにあらず、台湾海峡を渡り支那人に追はれ来たりし苗族ならん」とする西洋人学者の説に触発されたことが動機であったと記されている。このことは、

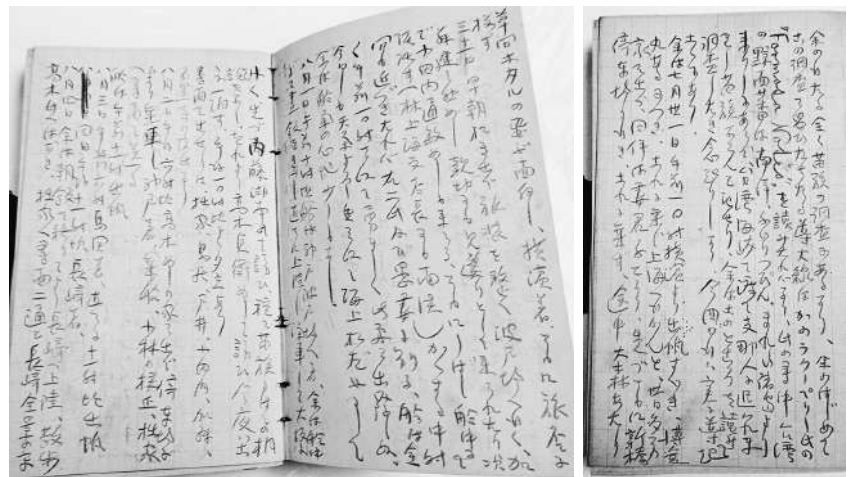


図10 鳥居の「日記」

前掲「報告」をはじめとする鳥居が帰国後に発表した論文・講演、さらには前掲『調査報告』や『西南中国』などの著作の記述とも、完全に一致する。重要なのは、それが調査の過程での後付けの発想ではなく、出発時点からの一貫した動機であったことが、これによって明らかとなる点である。

しかも、これに続く部分の「日記」の記述によれば、西南中国に向けて横浜を出港した鳥居は、途中で神戸に入港するとすぐに、その足で大阪に「先づ内藤湖南氏を訪ひ、種々苗族に付ての相談をなし」ていることが確認される。内藤湖南とは内藤虎次郎のことで、1907年に京都帝国大学文科大学の東洋史学講座における初代教員の一人となり、中国史学を中心とする「支那学」の分野で卓越した業績を残した歴史学者である。鳥居との面会は、それ以前に内藤が新聞記者であった時期に相当するが、鳥居が「苗族」という課題について、西南中国とは無縁な内藤を相談相手に選んだことを重視するなら、

図11 「日記」冒頭部分の記述

西南中国調査に向かおうとする鳥居の関心は、必ずしも中国の西南中国辺境そのものにあっただけではなく、むしろ中国大陸の歴史の最も中核の部分にあったと理解される。当時の鳥居にとって、西南中国辺境の「苗族」を調査することは、中国史の最も古い部分を明らかにすることを意味していたのである。先に述べた議論は、これによって改めて説得力を持つことになるであろう。

以上では、鳥居の西南中国調査に焦点を絞り、私の研究テーマのなかから三つの成果を選び、それによって鳥居の「学問と資料の意義」を紹介して、若干の提言を試みた。博物館に所蔵される鳥居の学術遺産は、なおも多様な研究の可能性を秘めた「宝の山」である。小文が、新たな研究への道案内になれば幸いである。

【参考文献】

- ・ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『開館五周年記念企画展 鳥居龍蔵—世界に広がる知の遺産』（同館、2016年）
- ・ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣出版、2020年）
- ・ 鳥居龍蔵『ある老学徒の手記—考古学とともに六十年』（朝日新聞社、1953年）
- ・ 鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集（全12巻・別巻）』（朝日新聞社、1975-77年）
- ・ 吉開将人「鳥居龍蔵と東アジア—歴史学説と心象地理」北村清彦編『北方を旅する』（北海道大学出版会、2007年）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代—漢族西來說と多民族史観」『北海道大学文学研究科紀要』124（同研究科、2008年）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代（続）」『北海道大学文学研究科紀要』127（同前、2009年 [2009a]）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代（3）」『北海道大学文学研究科紀要』129（同前、2009年 [2009b]）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代（4）」『北海道大学文学研究科紀要』130（同前、2010年 [2010a]）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代（5）」『北海道大学文学研究科紀要』131（同前、2010年 [2010b]）
- ・ 吉開将人「苗族史の近代（6）」『北海道大学文学研究科紀要』132（同前、2010年 [2010c]）
- ・ 吉開将人「民族史学者 鳥居龍蔵—博物館開館記念講演を前に」『徳島新聞』（2010年11月6日 [2010d]）
- ・ 吉開将人「鳥居龍蔵の苗族論と清末中国知識人—鳥居の業績を同時代の中国人はどのように読んだか」『鳥居龍蔵研究』創刊号（鳥居龍蔵を語る会、2011年）
- ・ 吉開将人「鳥居龍蔵と銅鼓研究—鳥居を「民族史学者」へと導いたもの」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』1（同館、2013年）
- ・ 吉開将人「中国近代学術史上の良渚考古学—中国文明多元論、“長江文明論”の歴史的系譜」中村慎一・劉斌編『河姆渡と良渚—中国稲作文明の起源』（雄山閣、2020年 [2020a]）
- ・ 吉開将人「『人類学上より見たる西南支那』を読む—中国近代史研究史料としての鳥居龍蔵の旅日記」前掲『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣出版、2020年 [2020b]）

【図版出典】

図2・5・9：鳥居龍蔵写真資料研究会編『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ 第4部 写真：満洲・千島・沖縄・西南中国（東京大学総合研究資料館標本資料報告21）』（東京大学総合研究資料館、1990年）、図7：中国インターネットサイト「孔夫子旧书网」<http://book.kongfz.com/22117/1761382533/>（2021年2月21日閲覧）、図10・11：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館提供。以上以外は、筆者撮影。

鳥居龍蔵の台湾研究

～残された資料の今日的意義～

宮 岡 真央子

はじめに

鳥居龍蔵（1870-1953）は、台湾のオーストロネシア語族系先住民である原住民族¹の人類学研究を目的に、東部、離島、山岳地帯において史上初の学術調査を実施した。日本が台湾を植民地とした翌年の1896年（明治29）から行われた鳥居の調査は、固有の文字をもたず言葉も通じない人々に対し、集団名や地名を尋ねるところから始められた。そして5回の調査を通じ、原住民族の全体像をつかもうとし、その成果を世に問うた。原住民族研究史と原住民族史に鳥居が刻んだ足跡は、1世紀後の今日も消えることはない。

鳥居にとって台湾は、人類学の師である坪井正五郎（1863-1913）からの声かけが契機となり、思いがけず出会った調査地であった（鳥居2013：115-116）。しかし、この調査を機に鳥居の身分は人類学教室標本整理係から同教室雇員に切り替えられ、第2回の調査後は同教室の助手になった。鳥居の人類学者としての活動は、台湾において本格化した。

鳥居が台湾に通った時代、台湾にはすでに鳥居より先に彼の地に赴き、調査に着手しつつあった3人の同志がおり、鳥居の調査は彼らによって支えられた。田代安定（1857-1928）、伊能嘉矩（1867-1925）、森丑之助（1877-1926）である²。今日の台湾研究において、彼らの業績の再評価が進みつつある。彼らの台湾研究との比較と対象のなかに鳥居の台湾研究を再配置したとき、その特徴や意義はより鮮明に浮かび上がるであろう。

本稿はそのような問題意識のもと、鳥居の台湾研究、とりわけ原住民族に関する人類学研究の資料について、今日の台湾における学術界の動向、原住民族自身による文化研究や文化復興との関係を視野に入れつつ、現代における価値と意義を論じるものである³。以下では、鳥居龍蔵が台湾調査に臨んだ際の学術的視野について確認した上で、鳥居と同志たちとの関係を概略する。そして彼らの台湾研究と対比させて鳥居の台湾研究の特徴について予備的に考察し、さらに今日の学術動向や博物館活動のあり方をも踏まえ、鳥居の台湾調査の資料がもつ今日的な価値と意義、今後の可能性について考えたい。

1 台湾調査に臨んだ鳥居龍蔵の視野

写真機携行という着想

鳥居は台湾調査に先立ち、当時の欧州人類学の研究方法と研究成果を参照した。この点は鳥居の視野と学識の広さを示しており、鳥居の台湾研究を方向づけもした。

鳥居が台湾で用いた研究方法として特筆すべきは、調査に写真機を携行し、写真を用いて原住民族を記録し、それを学術資料として残したことである。日本の人類学・考古学史において、従前の調査では専門の写真師が随行する形だった。調査者みずからが調査地に写真機を携行したのは、鳥居の台湾調査が初めてのことであったという（鳥居2013：117）。鳥居自身は、スケッチが上手い坪井正五郎らに比して自分は原住民族の「顔や何かは絵で描けないので、写真の必要を感じて大学で一台写真機を買って貰って、自習し、現像は大学教室の倉庫中でやった」と回想した（鳥居1936：6）。しかしこれについて角南は、鳥居が「絵が下手という理由だけで写真を取り入れたのではなく、写真の記録性・

客観性を取り入れようとしたことが最大の理由であろう」として、鳥居の先見性を評価する（角南2011：425）。鳥居が「顔や何か」と表現したのは、原住民族の身体形質の調査を念頭に置いていたものと考えてよい。末成は、鳥居にとっての写真が「調査の本質的な一部をなし」ていたこと理由を、「鳥居の関心が考古学の遺物、遺跡や生活文化の中でも衣食住に関する物や身体形質におかれていたこととも関連する」とみる（末成2001：25）。

鳥居の調査への写真機携行という着想の背景に、范が指摘するように、当時の日本で写真が情報媒体として存在感を増していたという事情があるのは間違いないであろう（范2011）。ただしそれに加え、鳥居が坪井を通じて、欧米の人類学界における写真をめぐる動向について知識を得ていたであろうことも考慮すべきと思われる。坪井は、1889-90年（明治22-23）のパリ、ロンドンへの留学中、『東京人類学会雑誌』に多くの通信記事を寄せたが、その随所で写真について触れている。例えば船旅の寄港先で一時下船した際、物売りや土産物屋から現地の住民や遺跡の写真を購入した（坪井1889a：518）。坪井が熱心に通ったパリ万国博覧会の人類学部門展示では、書籍や標本資料とならび写真の展示が大きな位置を占めていた（坪井1889b：85）。そして、人類学的写真の撮影と収集で知られるロラン・ボナパルト王子（Prince Roland Bonaparte、1858-1924、ナポレオン一世の弟リュシアンの子孫）とパリで知り合い、邸宅での晩餐会に招かれて交流した（坪井1889b：89）。

ボナパルトは、軍を退役後に形質人類学を学び、地理学・人類学・博物学的関心に基づく多数の写真撮影し、出版した人物である。とりわけ19世紀後半に欧州で開かれた複数の博覧会で「展示」のために海外各地から連れてこられた人々を被写体とし、人類学的写真（正面と側面からの肖像写真）を撮影したことで知られる。また、学術調査団の一員としてスカンジナビア半島北部や北米、メキシコに赴き、現地で写真を撮影した。ボナパルト発行の写真集には、被写体の名前や年齢、身体計測のデータが添えられた（Edwards 2008）。これらの写真が、形質人類学の研究資料として提示されたことを示している。

鳥居は坪井からの情報と坪井が持ち帰った学術書や資料により、19世紀欧米人類学での写真がもつ役割と意義を具体的に理解し、自身の調査方法として採用したのだと考えられる。鳥居はフィールドを台湾から他へ移して以降も、写真撮影を調査の一部として続けた。

欧米人類学の研究成果の参照

また鳥居は、調査に先立ち文献で調査地に関わる理解を深めようとした。その際、当時原住民族に関する直接的見聞に基づく文献記述は少なく、鳥居は台湾北部の淡水に居住するカナダ人宣教師マッケイの名著『遠き台湾から』、漢籍『台湾府志』を参考にした。このほかに、ヴェルノーの『人種誌』や、「フィリピン、ボルネオ、スマトラ、セレベス島の諸島についての人種学上の書籍も参考として」読んだという（鳥居2013：116-117）。鳥居は台湾調査の出発前に、原住民族と東南アジア島嶼部諸民族との比較を視野に入れ、欧米の人類学研究を参照していたのである。その背景にも坪井の導きがあったと推定できる。

坪井は留学先のロンドンで人類学関係の書籍を渉猟し、その一部57冊を全7回の文献解題の連載で取り上げた（坪井1890-1891）。そのなかには、上述のヴェルノーの『人種誌』のほか、フィリピン、ボルネオ、スマトラ、セレベスなどを含むアジア・太平洋の民族誌や地誌類も多数挙げられた。それら大量の洋書は、坪井により人類学教室にもたらされた。

後に鳥居は坪井について、「土俗学上の事項に対しては教導するところが最も多く、太平洋諸島・阿弗利加等の未開人に就ての紹介は最も多かった」と回想する⁴（鳥居1931：3）。台湾調査前に鳥居が読んだ欧文書籍も、大半は坪井を通じて知り得たものであったろう。

2 鳥居龍蔵の台湾調査の同志

学兄田代安定

田代安定（1857-1928）は薩摩出身、鳥居より13歳年上で、フランス語、博物学、植物学を学び、

内務省博物局係、農務省農務局陸産係を歴任中、大島や種子島の調査、沖縄・宮古・八重山での2度の植物と旧慣制度の調査、ロシア、サンクトペテルブルクでの万国園芸博覧会出席と現地大学での半年間の植物学研究などを経験した。1886年（明治19）に農務省辞任後、東京帝国大学嘱託で沖縄・宮古・八重山に再び調査に赴き、練習艦金剛に便乗してオセアニア各地で人類学・植物学調査を実施した。この頃の田代の調査報告は『東京人類学会雑誌』にもたびたび掲載されている。その後日清戦争に志願し、1895年（明治28）4月、台湾西方の澎湖諸島占領に従軍後、6月に台湾本島に上陸した。まもなく台湾総督殖産部の技師に就任、同年9-10月には東部宜蘭の調査に着手する。その後も植物学・林学分野で活躍し、恒春熱帯植物殖産場の開設に尽力、台湾から一時帰郷した鹿児島で生涯を閉じた。1945年、沖縄研究成果の一部が『沖縄結繩考』として出版された⁵。

鳥居の第1台湾調査は田代らが行った総督府殖産部の調査に同行する形で行われ、また第2回調査にも田代が深く関与したという点は、別項で詳述した（宮岡2020）。鳥居の第3回以降の調査における田代の関与は今のところ定かでないが、やはり鳥居の調査を支えていたと考えられる。田代は、鳥居の第3回調査に先立ち、自身の知り得た南部の原住民族の情報を鳥居に書き送った。その文章は鳥居を介して『東京人類学雑誌』に掲載された（田代1898）。台湾最南端の恒春に台東と同様のアミの集団が居住すること、「サリセン蕃」（今日の屏東県北部のパイワンもしくはルカイに相当）の家屋や習俗、鳳山（今日の高雄・台南）の平埔族が伝えるトンボ玉の装飾品のことなど、田代の見聞が詳述されている。本来は鳥居への私信であったことに鑑みれば、これは田代から鳥居への次の台湾調査に備えた情報提供であったとみてよい。田代が様子を伝えた恒春各地の集落を、鳥居はそのすぐ後の第3回調査で廻った。また、田代が「サリセン蕃」と呼んだ集団の諸村落には、第4回調査で先ず訪れた。このような事情を勘案すれば、田代は鳥居の調査計画に対して継続的に具体的な助言や提案をしていたと考えてよからう。第3回以降の鳥居のフィールドノートには、田代に手紙や電報を送った旨の記録が散見される。

この頃の田代は、総督府の常勤専門職にあり、鳥居龍蔵、伊能嘉矩、森丑之助と比べて最年長で、もっとも安定した社会的地位と経済的基盤を有した。台湾の各方面の人脈にもある程度通じていたはずである。田代は、鳥居の台湾調査における後見人のような存在であり、同様に伊能や森の援助をもしていた（笠原2005；2016：16）。田代は、博物学的知識を持ちつつ、植物学の専門家として総督府技師の任にあった。人から植物学者と言われるのを嫌い、政治学者と自認していたとも伝えられる（松崎1934：117）。自分より若く自由な立場にある若者に、自分には果たし得ない役割を期待していたに違いない。なかでも鳥居は、東京帝国大学という当時の日本で唯一の大学組織に身を置き、統治機構とは距離を置いた立場と視点から原住民族について専門的に研究できる立場にあり、伊能、森とも異なる存在だった。その鳥居に、田代は人類学の専門家としての役割を大いに期待したのだと考えられる（cf. 中生2011：150）。

学友伊能嘉矩

伊能嘉矩（1867-1925）は、現在の岩手県遠野市出身、鳥居より3歳年上で、幼少時より祖父から四書五経を学び、漢文の素養を身につけた。下等小学校卒業後、10代後半で自由民権運動に参加した。経済的事情で継続的な就学が果たせず、1887年（明治20）に上京、新聞社や出版社で編集業務に従事する。その時期に坪井正五郎と出会い、1893年（明治26）10月に東京人類学会へ入会、翌年12月には鳥居と伊能が連名で発起人となり、同会の下に「人類学講習会」を発足、1895年（明治28）1月から3月まで毎週のように会合を開き、坪井の人類学講義などが行われた。当時の東京人類学会の会員のなかで、鳥居と伊能はもっとも熱心な坪井門下生であったといつてよい。鳥居と伊能は、互いを「学友」と呼んだ。

1895年（明治28）5月8日に日清講和条約が批准され日本への台湾割譲が決まると、伊能は台湾へ渡って人類学の調査研究を行うことを決意する。原住民族統治のための人類学調査の必要性和自身の渡台の決意を訴える趣意書「余の赤志を陳べて先達の君子に訴ふ」をしたため、関係者に配った。その熱意が認められ、11月に陸軍省雇員の身分で台湾に上陸し、台北に到着すると台湾総督府雇員を命

じられた。台湾行きを心に決めた伊能の頭には、従軍した田代、遼東半島調査を決めた鳥居のことが意識されていたのかもしれない。

伊能は東京出発時に坪井から助言を受け、台湾到着後の1895年（明治28）12月、田代安定とともに「台湾人類学会」を発足させた（伊能1896）。そして同月から『東京人類学会雑誌』に毎月のように報告記事を書き送った。伊能は台湾において終始台湾総督府の雇員や嘱託という不安定な身分のまま調査研究に明け暮れた。後述する栗野伝之丞との共著『台湾蕃人事情』（伊能・栗野1900）を皮切りに、さまざまな書籍を総督府のもとで著す。1906年（明治39）に遠野へ帰郷すると、自宅に「台湾館」と称する一角を設けて研究を続けた。死後の1928年、研究の集大成の遺稿が『台湾文化志』（全3巻）として出版され、柳田国男が序文を寄せた⁶。

田代とは異なり、伊能と鳥居がともに長期で調査に出かけたことはない。しかし、鳥居は台北に着くと伊能と会い、台北近郊を案内された。鳥居が蘭嶼に滞在の折、台湾全島を調査中の伊能が西部から東部へと移動するために乗った汽船が蘭嶼に寄港し、孤島での調査に奮闘する鳥居と一時の面会を果たしたこともあった。伊能は全島調査の報告書『台湾蕃人事情』において、鳥居と田代の東部調査の結果を多く参照し、両者の原住民族の分類についての見解を一部取り入れて、自身の分類を提示したと指摘されている（笠原2012：21）。伊能と鳥居との対照性については後述する。

助手森丑之助

森丑之助は、1877年（明治10）1月、京都で出生した。鳥居龍蔵より7歳年下である。長崎商業学校で語学を習い、日清戦争時、陸軍附通訳として遼東半島へ派遣される予定が休戦で中止となり、1895年9月、18歳で陸軍附通訳として台湾へ赴いた。公務での接触を機に次第に原住民族に魅了され、原住民族居住地を踏査するようになる。その過程で鳥居龍蔵と出会い、鳥居の第4回調査の助手を願い出て人類学調査の基礎を学び、東京人類学会にも入会、その後は自身も調査で写真撮影を行った。総督府の雇員や嘱託などの身分で原住民族や台湾の地理、森林、植物など幅広い分野の調査に従事し、1908年に開館した台湾総督府博物館（現在の国立台湾博物館はこの所蔵資料を母体とする）には設立から関与した。1913年（大正2）年に一時東京に引き上げたが、翌年には台湾に戻り、その後も原住民族の調査研究を続けた。台湾総督府臨時旧慣調査会から原住民族諸集団の写真をもとめた『台湾蕃族図譜』第1、2巻を1915年に、タイヤルに関する民族誌『台湾蕃族志』第1巻を1917年に刊行した。上記著作と写真集は各10巻の刊行が計画されたが、それは実現しなかった。1918年に刊行元の臨時旧慣調査会が廃止になったからとされる（笠原2013：6）。森が東京に保管していた調査資料が1923年（大正12）の関東大震災で焼失し、晩年は調査成果を復元してまとめようとする傍ら、台湾総督府の強硬策に抵抗する原住民族ブヌンに新たな生活基盤を整備するために奔走した。そしてその計画が頓挫し、失意のうちに台湾の基隆港から門司港へと向かう船上で姿を消した（楊南郡2005：81-97）。森は生前、上記著作の他に、雑誌や新聞に約100篇の文章を書き記した⁷。

森が鳥居とともに第4回調査で行った「学術探検」は別稿に詳述した（宮岡2013）。森は鳥居を手本として台湾山地での調査を継続し、その過程で原住民族の写真や記録を多く残したという点のみ、ここで確認しておきたい。

3 鳥居龍蔵の台湾研究の特徴

俯瞰する視点

これら鳥居龍蔵の同志の存在を視野に入れて検討した時、鳥居の台湾研究にどのような特徴を指摘できるであろうか。精確な把握には、各人の研究成果の詳細な比較検討が必要だが、筆者には今その余裕がなく紙幅も足りない。ここでは予備的考察として、近年の先行研究をも参照しつつ、とくに伊能嘉矩との対比で以下3点述べたい。

鳥居龍蔵の台湾調査は合計5度行われたが、その行程を地図に描くと、台湾を時計の針の方向にぐるりと1周した形となる（図1参照）。第1回の台湾調査は、1896年（明治29）8-12月に東部の花蓮・

台東をめぐる。第2回は1897年（明治30）10-12月に台東から南東約90kmの海上に浮かぶ蘭嶼に出かけた。第3回は1898年（明治31）7-12月に南部の恒春半島で行われた。そして最長期間となった第4回は、1900年（明治33）1-9月に南西部の屏東から中部にかけての西部山脚部や山岳部を北上しながら進み、中央山脈を東に抜けて北上し、宜蘭を訪ねたところで終了した。このときは北部山地のタイヤル居住地への探訪も予定していたが、未実施となった。そして1910年（明治43）12月-翌年2月の第5回の調査は、第4回でやり残した北部の新竹、苗栗、角板山、宜蘭において行われ、予定では蘭嶼にも再度赴くはずだったことが近年の研究と公開された鳥居龍蔵のフィールドノートから明らかになっている（石尾2013：2020；宮岡2013）。

鳥居の調査の軌跡について笠原は、鳥居が「計画的に各回の調査対象地域を分けた」とみる（笠原2012：23）。鳥居は当初から、原住民族全体を見渡す、俯瞰する視点を持ち合わせていたのであり、それは伊能嘉矩と共通したものだ（笠原2012：11）。

伊能嘉矩は、1897年（明治30）5-12月、原住民族に関する全島調査を実施した。鳥居が第2回の台湾調査で蘭嶼に滞在したのはこの年の10-12月であり、上述のように伊能と鳥居は同島で短時間の再会をした。伊能のこの全島調査は、台湾総督府から出された「蕃人教育施設準備」の命によるもので、この復命書として刊行されたのが、栗野伝之丞との共著『台湾蕃人事情』（1900）である。同書は、研究史上初めて原住民族の各民族集団の名称と全体的な分類、各集団の居住地や習俗などを示した書籍であった。ただし、蘭嶼の住民についての言及はされず、台湾島の原住民族のみを対象とした。

笠原はこの書の「画期的な意義」を、「自力では到達できないほどの高さから原住民族の全集団を一望のもとに俯瞰する、という視点を初めて打ち立てたところにある」と指摘する。伊能はこの前年の台北付近・宜蘭の調査とこのときの全島調査によって、「自分が実際に接することのなかった集団まで含めて原住民族全体を見渡す」視点を持ち、それは添付の色分けされた原住民族分布図により端的に可視化されたと論じる（笠原2012：11）。

鳥居の成果物のなかで、伊能が『台湾蕃人事情』で示したような原住民族全体の分類体系と分布図を提示したのは、伊能より10年遅く、第5回の調査に先立ち刊行された伝説による原住民族の概論においてであった（鳥居1910；cf. 笠原2012：23-24）。ただし、確かに鳥居は早くから俯瞰する視点をもっていた。鳥居の第1回の東部調査の成果をもっとも詳細に記した報告文（1897a）では、東部の住民の集団名称と分類の全体像を提示しており、そこにすでに鳥居の「俯瞰する視点」の一端が示されている。そして鳥居は、場所を違えて繰り返す調査により、実際に原住民族全体を見渡そうとした。またさらには、後述するように、鳥居は空間的・時間的にもより広い視野に立って原住民族を俯瞰しようとした。

未漢化の原住民族の探究

鳥居が第1回の調査で対象とした台湾東部は、清朝期、西部の「前山」に対して「後山」と呼ばれていた。鳥居がこのときの調査地を東部に決めた背景には、田代安定の関与もあったであろうが、鳥居自身は「東部の事情を知るもの少なきに依り余は殊に東部を撰んで調査を為した」と述べている（鳥居1899a：339）。第2回調査の対象を蘭嶼としたのも、同様の理由と思われる。従前には総督府一行による調査の報告書が総督府に提出されたものの、それを除いて、この島についてはほとんど知られていなかった。鳥居はこの島での自身の調査研究を「未だ其島の動植人類、其他総て科学上の事柄は

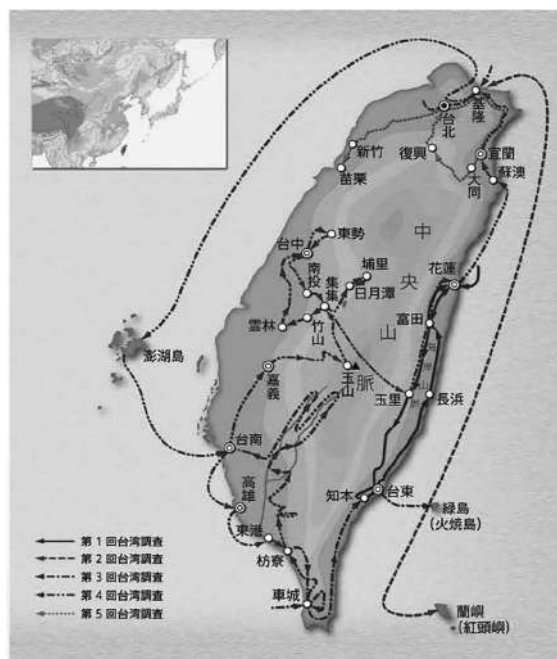


図1 鳥居龍蔵の台湾調査の路線（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館作成）

全く世に現らはれ居らず」、「未だ人の手のつかざる彼等人類の研究」だと記した（鳥居1897a：519-520）。そして第3回以降は、地理的事情もよく知られていなかった山岳地帯の村落を主対象とした。

つまり鳥居はかなり意識的に、清朝期の文献にはほとんど記載がなく詳細が伝えられていなかった、漢民族の影響を被っていない地域を選び、自身の調査地とした。その行程は必然的に探検の様相を帯び、第4回調査でこれを支えたのが森丑之助であったことは、先に触れたとおりである。他方、伊能嘉矩の調査はそれとは対照をなす。伊能の調査は山脚地帯沿いに、山地住民と平埔族の双方が見渡せるような旅行ルートで行われた（笠原2012：6）。1896年（明治29）から1900年（明治33）の間に伊能が実施した全島調査を含む5度の調査全体でも、訪れた場所の3分の2以上が平埔族の村であった（笠原2017：5）。

鳥居が未漢化の原住民族のもとに向かい明らかにしようとしたことは、原住民族の来歴であり、彼らが何者かということであった。その結果、例えば第1回の東部調査では、集団同士の関係や新旧について、おおよそ以下の点が明らかになった（鳥居1897a）。

山地居住の原住民族「有黥蕃」（今日のタロコ、セデック、タイヤルに相当）と「高山蕃」（今日のブヌンに相当）は、西方より移住してきたという伝承をそれぞれもつ。前者の故地は中部の埔里社（現南投県埔里鎮）の辺りと推測される。後者は中央山脈に居住し、北は「有黥蕃」に接し、南は「擺安蕃」（今日のパイワン、ルカイに相当）に接する広い範囲に及ぶ。両者は古い時代から東部に居住してきたのではなく、ある時代に東部山上への大移動があったものと考えられる。他方、平地居住の原住民族のうち「平埔蕃」（今日のタイヴォアン、またはシラヤ、マカタオに相当）は南部の鳳山（現在の高雄市、屏東県）から、「加禮宛蕃」（今日のクヴァランに相当）は宜蘭から、どちらも明らかにごく近代に移住してきた。東部に古くから居住する集団は、「阿眉蕃」（今日のアミに相当）、「卑南蕃」「知本蕃」（ともに今日のプユマに相当）である。

第2回調査でも蘭嶼の複数の村落で、蘭嶼への移住に関わる口碑伝承を聞き取り、彼らが伝える移住元の地名がバシー海峡を挟んだフィリピン北部バタン諸島のバタン（Batan）島とイタバヤット（Itbayat）島であることを特定し、蘭嶼とバタン諸島との密接な関係を明らかにした（鳥居1902）。

以上の鳥居の調査を通じて得た見解は、今日の学術的見地に照らしても、しごく妥当なものである。鳥居は集団の境界と分類を考察する際に、身体形質、習俗、物質文化の特徴を探り、基礎語彙を収集するとともに、来歴に関する口碑伝承を聞き取った。そして、台湾において漢民族の到来より古い時代に展開した民族の往来の一端を明らかにした。

原住民族の口碑伝承から各集団の歴史的な移動の過程やその間の集団間の交渉を再構成するエスノヒストリー研究は、鳥居の調査から30余年後、台北帝国大学土俗・人種学研究室の移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一の3人により全島規模で行われ、成果は1935年刊の大著『台湾高砂族系統所属の研究』に結実した。上記の鳥居の調査研究は、実地調査に基づくこの方面の研究における先駆的な業績に位置づけられる。

なお、鳥居は、身体形質、物質文化、言語、および漢民族到来以前の歴史の調査に重点を置く一方、原住民族と漢民族との交渉の過程にはほとんど注意を向けなかった。この点は、伊能嘉矩との大きな違いであるとバークレーは指摘する（Barclay2001：118）。伊能は、台湾に赴く前から原住民族の教育に使命感を抱き、平野部に居住し清朝期に漢化を経験した人々に強い関心を寄せ、清朝期の文献を渉猟した。また、全島調査の際にも各地の総督府関係機関で資料や情報を積極的に入手した。それにより原住民族と漢民族との交渉の歴史を明らかにしようとした。上述のように鳥居と伊能との間で調査地が棲み分けられたのは、その結果であったといえる⁸。付言すれば、鳥居も平埔族に関する調査を行いはしたが、そこでも身体形質や言語を主な手がかりに、平埔族がマレー系に属する原住民族であることを見極めることに力点が置かれた（鳥居1897b；1898；1900）。

周辺諸民族との比較、欧米人類学との対話

人類学的にみて原住民族が何者であるかを探ろうとする鳥居の研究は、周辺民族との比較を要請した。そしてそのために、欧米人類学を参照し、対話が行われた。

例えば第1回調査の報告では、東部の「卑南蕃」(現在のプユマに相当)の髪型や入れ墨などの習俗がフィリピン北部諸民族のそれと類似することを、欧米の先行研究から具体例を示しつつ指摘し、あわせて「卑南蕃」とフィリピン諸民族の数詞の比較表を提示した(1897a:403-407)。第2回調査の報告書『紅頭嶼土俗調査報告』(1902)では、前述のバタン諸島との関係に加え、言語や習俗がフィリピン北部諸民族と酷似することも指摘した⁹。この報告書とそれに先だって刊行された『人類学写真集——台湾紅頭嶼之部』(1899b)は、フィリピン在住のドイツ人オットー・シェーラー(Otto Scheerer, 1858-1938)により1906年にドイツの学術誌に翻訳掲載され、欧米の研究者に参照されたという(鳥居1912:1-2)。その後、鳥居の第4回までの調査にもとづく原住民族の概論と蘭嶼調査の形質調査の報告は、仏語で刊行された(鳥居1910:1912)。このうち前者に対するフランスを中心とした欧米人類学界や一般社会における評価は、アバが明らかにしている(アバ2020:59)。

台湾での4度の調査を終えた後、鳥居は原住民族と西南中国のミャオ(苗族)との人類学的関係を探るといった課題のもと、1902年(明治35)7月から翌年3月まで西南中国の調査を行った。これもフランス系イギリス人東洋学者ラクーペリー(Albert Terrien de Lacouperie, 1845-1894)の研究に着想を得て、自身の仮説を確かめるために計画されたものだった(鳥居1926:1-2)¹⁰。鳥居の原住民族と周辺諸民族との比較という問題意識は、欧米学術界との対話を経て、鳥居を他の調査地へと赴かせることになったのである。ただし、原住民族と西南中国ミャオとの比較という問いへの解答は明示されないまま、その後の鳥居の主たる研究関心は、北東アジアへと移っていった(末成2001:26)。

言語学研究の進展により、オーストロネシア語族の諸言語のうち、原住民族のそれが極めて多様性に富み、古い特徴を有していることは今日広く知られるようになった。そして、考古学や分子人類学の研究の進展と相俟って、原住民族の来歴や周辺諸民族との関係を探る議論は、現在なお盛んである。鳥居の比較の試みは時代や資料の制約もあり、今日の視点から見れば粗笨な印象は拭えない。しかしその後の学史的展開を振り返った時、鳥居の着眼そのものは、現在までその意義を失っていない。

4 残された資料の今日的意義

鳥居の時代の調査資料の今日における利用と研究

鳥居龍蔵と同時代の台湾研究の調査資料は、今日の台湾で多様な形で公開・利用されている。例えば、伊能嘉矩の手稿、伊能の収集した標本資料や文書・写真類は、現在国立台湾大学と遠野市立博物館に収蔵されるが、それらは1990年代に台湾と日本で展示され、その後国立台湾大学でデジタルアーカイブとして公開された。同大学図書館は、2017年に遠野市と学術交流協定を結び、同年から翌年にかけて遠野市の資料も交えて伊能嘉矩を主題にした特別展を開催した(宮岡2018)。田代安定の手稿類も同図書館で所蔵され、近年やはりデジタルアーカイブとして公開された。その一部は出版、研究もされつつある(呉・陳2014)。他方、森丑之助の関係資料のうち、森が台湾総督府博物館勤務時代に収集した標本資料は現国立台湾博物館に所蔵され、2017年に新装された常設展の一角で、森丑之助の紹介とともに一部が展示されている(2021年2月現在)。

このように、鳥居と同時代に収集され記録された台湾調査の資料は、近30年来、台湾で公開・利用され、さらなる研究を生んできた。それに続いて大正・昭和期の日本語の研究書や調査報告書の翻訳出版も今日まで続いている。この動きの嚆矢が、1980年代後半から1990年代初頭にかけて行われた東京大学総合研究資料館(現東京大学総合研究博物館)所蔵の鳥居龍蔵撮影ガラス乾板写真の研究プロジェクトとその成果公開であったことは言うまでもない。また楊南郡が1990年代後半から2000年代初頭にかけて、鳥居・伊能・森の著作を相次いで翻訳刊行したことも大きな後押しとなった。この一連の動きは、1987年の戒厳令解除を経て台湾の民主化が急速に進み、従来封印されてきた台湾独自の歴史や文化に注目が集まり、それが公に語られ研究されるようになった過程と軌を一にする。統治する側の立場にあった日本の研究者が残した多様な過去の資料やモノが、台湾の歴史的自画像を映し出すものとして、今日さまざまに評価・議論の対象となっているのである。それと歩を合わせ、日本の側でも研究は続いている(笠原2020、清水2014など)。

ファースト・コンタクトの記録

鳥居龍蔵は台湾調査の対象として、漢民族の影響の少ない原住民族の居住地域を意識的に選び、史上初の学術調査を行い、多くの写真を撮影し、標本資料を採集した。このことを、鳥居が調査の対象とした人々の側の視点からとらえ直せば、自分たちと鳥居との出会いは外界とのファースト・コンタクトであり、鳥居の調査資料は、自分たち自身について初めて紙に記され外界に示された記録ということになる。このような記録に、今日の原住民族の人々はどのように向き合っているのだろうか。蘭嶼の例をみてみよう。

蘭嶼の島民を表すのに従来使われてきた「ヤミYami（雅美族）」という語は、鳥居が調査で聞き取り、それを彼らの民族名称と定めて世に紹介したものだ。語義が十分には明らかにされないまま、民族名称としてこの語が使用されたことの妥当性については、1930年代に疑問が出され、1990年代以降は島民から改称を希望する声が上がった。他の原住民族の多くが民族名称に当該民族の言葉で「人」を意味する語を用いるのと同様に、蘭嶼の言葉で「人」を意味する「タオTao（達悟族）」という語を民族名称として用いるべきだという主張である。これは、蘭嶼を島の言葉で「pongso no tao（人の島）」と呼ぶこととも関係している。「タオ」という民族の自称は、マスコミや学術界、一般社会にも広く受け入れられ、すでに普及した。ただし、蘭嶼には今も「ヤミ」という自称を支持する人もおり、決着はついていないという。2021年2月現在、台湾の政府は両方を併記する方法を用いている（宮岡2020：123-125）。鳥居の調査と名は、蘭嶼史に刻まれ、忘れられることはない。

鳥居龍蔵の蘭嶼に関する著作は、近年台湾で中国語に翻訳され出版された（鳥居2017）。同書の編者と監訳者を担った李文茹によれば、この翻訳プロジェクトでは、鳥居の著作を島に持参し、島の老人に対して鳥居の記録した固有名詞や明らかな間違いと思われる点を確認する作業が行われたという。鳥居の調査資料は、その誤解や不備を調査地の人々自身によって正される新たな時代を迎えたのだと理解できる。

同書のもう1人の編者でありタオの作家シャマン・ラポガンは先ごろ、台湾で活躍した「冒険家」を特集する雑誌に鳥居龍蔵に関する散文を寄せた（夏曼・藍波安2021）。「紅頭嶼秘史 老漁民と人類学者との出会い」という副題のその作品には、鳥居が調査報告書に記した島民とのやりとり、シャマン・ラポガンの高祖父と鳥居との関係、鳥居の調査に関する島の人々の伝承などが綴られた。読後には、蘭嶼の人々を観察し計測し撮影した鳥居もまた、蘭嶼の人々に観察され評価され噂される対象であったという当たり前のことに気づかされる。そして、日本で蘭嶼の人々に関する鳥居の記述が共有されてきたことと並行して、蘭嶼の側でも鳥居に関する批判も含めた伝承が共有されてきたということ、この作品は伝えている。

鳥居龍蔵の文章を鳥居の調査地の人々が読み、鳥居の調査を評価し議論する時代になった今日、従来それぞれに共有されてきた記述や伝承は、ようやく相互に参照され対話が生まれる環境をもつことになった。鳥居の記述と蘭嶼の人々との間の対話、蘭嶼の人々と鳥居の記述を読んできた人々との間の対話が積み重ねられることで、120年以上前の鳥居の調査で展開したファースト・コンタクトの実相は、より具体的に明らかになるであろうし、鳥居の研究や調査資料には、また新たな意義や意味が見出されていくに違いない。

おわりに

2020年、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵の鳥居龍蔵のフィールドノートがデジタルアーカイブとして公開され、鳥居の台湾研究の根拠をなす多様な形態の資料——写真、標本資料、フィールドノート——が相互に参照しやすい形となった。従来東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居撮影の写真資料には、撮影地や被写体について不明な点が数多く残されていた。国立民族学博物館が収蔵する鳥居収集の標本資料についても、同様のことがいえる。今回公開された鳥居のフィールドノートには、写真撮影の際の記録、標本資料を収集した際の状況説明などが随所に散見される。日本国内の3つの博物館に分かれて保存されるこれらの資料群を相互に突き合わせることで、各資料の情報と価値が飛躍的に

増大することは間違いない。それにより鳥居の台湾調査の状況をさらに立体的に再構成することが可能である。今後の各博物館の連携を大いに期待したい。

また、このような基礎作業の進展とあわせて、台湾の博物館をはじめとする学術機関との連携や協働が進むことにも大きな期待をしたい。その意義はさしあたり2つの観点から考えることができる。1つは、学史研究という点である。例えば、鳥居のフィールドノートと伊能嘉矩や田代安定が残した手稿や文書との突き合わせによって、当時の原住民族研究の状況についてより多くの点が解明されるのではないか。

もう1つは、原住民族社会との交流、それによる現地社会への還元という点である。今世紀に入り、台湾の人類学系博物館——国立台湾博物館、国立台湾大学人類学博物館、中央研究院民族学研究所博物館——などで、各館が所蔵する原住民族関係の資料を、かつて資料が採集された現地に戻して展示する「返郷特展」(里帰り特別展示)あるいは「共作展」(共同制作展示)などと呼ばれる展示活動が開催されるようになった。原住民族の生活が台湾の主流社会のそれと大きく違わなくなった今日、原住民族の人々にとって博物館に収蔵される資料との出会いは、自民族の古い文化や歴史を学ぶ契機となるだけでなく、それを生み出し使ってきた祖先と出会う機会でもある。筆者は先日、中央研究院民族学研究所博物館が屏東県泰武郷に位置するカヴィヤガン(Kaviyangan、佳平)という原住民族パイワンのコミュニティとともに開催した展示「『カヴィヤガンの記憶と芸術への呼びかけ：佳平への帰郷』共作展」¹¹の成果発表会に参加する機会を得た。同館の「共作展」はこれまで3度行われ、いずれも原住民族の団体が構想段階から参画してきた。このときの成果発表会では、展示会場で資料解説を担った若者たちが、祖先がかつて用いた過去の文物に初めて接した際の感慨、これを機に祖父母と語り合った経験などを語りあった。このような営みにより、博物館資料と原住民族コミュニティとの新たな関係が構築され、資料にも新たな意義と価値が吹き込まれていく様を実感した。

このような台湾における最新の動向に鑑みた時、日本の博物館に収蔵される鳥居の収集した資料が台湾への「里帰りを果たす」、あるいは鳥居が収集した資料と関連する資料が台湾から日本へとやってきて「再会する」、といった形の展示の実現や、その過程における原住民族の人たちの何らかの関与や参画が実現されれば、と夢想する。例えば、台東に位置する国立台湾史前文化博物館は、原住民族プユマのコミュニティと卑南遺跡に隣接し、台湾の先史文化、原住民族文化、世界のオーストロネシア文化を主題としており、本稿で述べた鳥居の台湾研究の視野の広がりにも大きく重なる。日本で鳥居の台湾研究資料を収蔵する博物館と台湾のこのような博物館との連携や協働が将来可能になれば、今後鳥居の資料に、さらに多様な価値と意義が見出される道も開けるであろう。

鳥居が台湾研究において残した資料は、未だ多くの可能性を秘めている。今後のさらなる展開を楽しみにしたい。

謝辞：本稿は、筆者が福岡大学の在外研究で訪れた中央研究院民族学研究所での研究成果の一部である。筆者に在外研究の機会を与えてくれた福岡大学人文学部、受け入れをご快諾くださった中央研究院民族学研究所の張珣所長、郭佩宜先生をはじめとする所員各位、本稿に関わる情報をご教示くださった淡江大学李文茹先生に心より謝意を表したい。

【参考文献】

- アバ、ラファエル「鳥居龍蔵と西洋の人類学界：学問は国境を越えて」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp. 47-64 (思文閣 2020年)
- 石井伸夫「鳥居龍蔵の学説形成における「南方諸民族」把握の試み」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp. 411-432 (思文閣 2020年)
- 石尾和仁「鳥居龍蔵の第5回台湾調査をめぐって」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』1：171-181 (2013年)
- 石尾和仁「鳥居龍蔵の台湾調査に関する諸資料」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp. 397-410 (思文閣 2020年)
- 板澤武雄「伊能先生小伝」伊能嘉矩『台湾文化志 上巻』pp. 1-18 (刀江書院1965年復刻版、初版は同社より1928年刊)
- 伊能嘉矩「臺灣通信 (第二回 台湾人類学会)」『東京人類学会雑誌』11(118)：149-151 (1896年)

- 伊能嘉矩・栗野伝之丞『台湾蕃人事情』（台湾総督府民政部文書課 1900年、草風館 2000年復刻）
- 呉永華・陳偉智『異郷又見故園花：田代安定宜蘭調査史料與研究』（宜蘭県県史館 2014年）
- 荻野馨編著『伊能嘉矩 年譜・資料・書誌』（遠野物語研究所 1998年）
- 笠原政治「師・友人・訪問者たち」楊南郡著／笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳『幻の人類学者 森丑之助：台湾原住民の研究に捧げた生涯』pp. 231-248（風響社 2005年）
- 笠原政治「台湾原住民族を俯瞰する：伊能嘉矩の集団分類をめぐって」『台湾原住民研究』16：3-31（2012年）
- 笠原政治「森丑之助と台湾原住民族の分類」『台湾原住民研究』17：3-23（2013年）
- 笠原政治「伊能嘉矩の原住民族分類における諸種の資料源」『台湾原住民研究』20：5-27（2016年）
- 笠原政治「伊能嘉矩と平埔族の分類」『台湾原住民研究』21：3-37（2017年）
- 笠原政治『日治時代台湾原住民族研究史：先行者及其台湾踏査』陳文玲訳（国立台湾大学出版中心 2020年）
- 黄智慧「蘭嶼とバタン諸島の民族的関連性：研究史をふりかえって」『CASニューズレター』119：37-40（慶應義塾大学地域研究センター 2003年）
- 黄智慧「東南亜與東北亜の接合處：環「東台湾海」海域蘊蔵の學術生機」林美容・郭佩宜・黄智慧合編『寛容の人類学精神：劉斌雄教授紀念論文集』pp.485-506（中央研究院民族学研究所 2008年）
- 斎藤侑子「田代安定の学問と資料」『沖繩文化研究』(32)：275-322（2006年）
- 清水純『画像が語る台湾原住民の歴史と文化：鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探求』（風響社 2014年）
- 末成道男「鳥居龍蔵の研究」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧：日本からの視点』pp. 23-27（風響社 2001年）
- 角南聡一郎「モノを図化すること」山路勝彦編『日本の人類学：植民地主義、異文化研究、學術調査の歴史』pp. 403-441（関西学院大学出版会 2011年）
- 夏曼・藍波安（シャマン・ラポガン）「鳥居龍蔵：紅頭嶼佚事 老海人與人類学家的相遇」『薰風』15（冒険家）（2021年 風月襟懷文化事業有限公司）
- 田代安定「南部台湾の諸蕃族」『東京人類学会雑誌』13(146)：307-310（1898年）
- 坪井正五郎「パリー通信」『東京人類学会雑誌』4(43)：516-524（1889年a）
- 坪井正五郎「パリー通信（凶入）」『東京人類学会雑誌』5(46)：77-90（1889年b）
- 坪井正五郎「我が書棚」『東京人類學會雜誌』6(62)：275-281、6(63)：316-323、(68)：61-65、7(69)：103-105、7(70)：135-138、(72)：214-216、7(74)：272-277（1890-1891年）
- 鳥居龍蔵「東部台湾に於ける各蕃族及び其の分布」『東京人類学会雑誌』12(136)：378-410（1897年a、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵「東部台湾ニ棲息セル平埔種族」『東京人類学会雑誌』12(132)：222-226（1897年b、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵「台湾基隆ノ平埔蕃ノ体格」『東京人類学会雑誌』14(153)：112-118（1898年、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵「埔里社方面にて調査せし人類学的事項」『東京人類学会雑誌』15(174)：473-478（1900年、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵「南部臺灣蕃社探検談」『地学雑誌』11(5)：338-347（1899年a、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵『人類学写真集 台湾紅頭嶼之部』（東京帝国大学 1899年b、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵『紅頭嶼土俗調査報告書』（東京帝国大学 1902年、『鳥居龍蔵全集第11巻』所収）
- 鳥居龍蔵「Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose. (1r Fascicule.)」『東京帝国大学理科大学紀要』28(6)（東京帝国大学 1910年、『鳥居龍蔵全集第5巻』翻訳所収）
- 鳥居龍蔵「Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose. (2e Fascicule.)」『東京帝国大学理科大学紀要』32(4)（東京帝国大学 1912年、『鳥居龍蔵全集第5巻』翻訳所収）
- 鳥居龍蔵『人類学上より見たる西南支那』（富山書房 1926年、『鳥居龍蔵全集第10巻』所収）
- 鳥居龍蔵「江戸人としての恩師 坪井正五郎先生」『武蔵野』17(2)：1-3（1931年、『鳥居龍蔵全集第12巻』所収）
- 鳥居龍蔵「学界生活五十年の回顧（一）」『ミネルヴァ』1(8)：303-401（1936年、『鳥居龍蔵全集第12巻』所収）
- 鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』（岩波書店 2013年）
- 鳥居龍蔵『紅頭嶼研究第一本文献』夏曼・藍波安・李文茹主編、李文茹監訳、徐佩伶・楊智景訳（原住民族委員会 2017年）
- 中生勝美「田代安定伝序説：人類学前史としての応用博物学」『現代史研究』(7)：129-164（2011年）
- 長谷部言人「田代安定氏に就いて」田代安定著・長谷部言人校閲『沖繩結繩考』pp. 1-13（養徳社 1945年）
- 范如苑「鳥居龍蔵の記録した台湾」鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵研究』1：173-182（2011年）
- 松崎直枝「隠れたる植物学者田代安定翁を語る」『伝記』1：112-131（1934年）
- 三木健『八重山近代民衆史』（三一書房 1980年）
- 宮岡真央子「野人の文化人類学：森丑之助の生涯と研究」『南方文化』24：123-137（1997年）

- 宮岡真央子「学術探検の開拓と展開：鳥居龍蔵と森丑之助の台湾調査をめぐって」『鳥居龍蔵研究』2:121-148 (2013年)
- 宮岡真央子「今日の台湾における伊能嘉矩の“踏査”」：国立台湾大学図書館特別展「重返・田野：伊能嘉矩與台湾文化再發現」『台湾原住民研究』22:151-156 (2018年)
- 宮岡真央子「台湾調査：第1回、第2回を中心に」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（思文閣 2020年）
- 森丑之助「生蕃の台湾に及ぼせる影響及び蕃族の学術的調査」『東洋時報』179:30-42 (1913年)
- 柳本通彦『明治の冒険科学者たち—新天地・台湾にかけた夢』（新潮社 2005年）
- 楊南郡「学術探検家 森丑之助」楊南郡著／笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳『幻の人類学者森丑之助：台湾原住民研究に捧げた生涯』pp. 15-107 (風響社 2005年)
- Barclay, Paul D. “An Historian among the Anthropologists: The Inō Kanori Revival and the Legacy of Japanese Colonial Ethnography in Taiwan.” *Japanese Studies*, 21 (2) : 117-136. (2001)
- Edwards, Elizabeth “Bonaparte, Prince Roland (1858-1924)” in John Hannavy, ed. *Encyclopedia of Nineteenth-Century Photography*, vol. 1. pp. 172-173. (New York: Routledge, 2008)

- ¹ 本稿では、台湾のオーストロネシア語族系先住民を原住民族と表記する。この語は1980年代半ばに始まる台湾における先住民運動で先住民の自称として主張され、1990年代に憲法に記載されるようになった。政府に公認される原住民族は、人口約57万人（台湾全体の約2.4%）、アミ（阿美族、Amis）、タイヤル（泰雅族、Atayal）、パイワン（排灣族、Paiwan）、ブヌン（布農族、Bunun）、ルカイ（魯凱族、Rukai）、プユマ（卑南族、Pinuyumayan）、ツォウ（鄒族、Tsou）、サイシヤット（賽夏族、Saisiyat）、ヤミ／タオ（雅美族／達悟族、Yami／Tao）、サオ（邵族、Thao）、クヴァラン（噶瑪蘭族、Kavalan）、タロコ（太魯閣族、Truku）、サキザヤ（撒奇萊雅族、Sakizaya）、セデック（賽德克族、Sediq）、サアロア（拉阿魯哇族、Hla'alua）、カナカナブ（卡那卡那富族、Kanakanavu）の16民族である（2020年末現在）。この他に、清朝期にその統治下におかれて漢化し、今日政府公認の原住民族には含まれない「平埔族」と呼ばれる人々もいる。本稿で原住民族という語は、その両者ともを指す。また本稿では、鳥居の台湾調査当時に用いられた「蕃」のつく語などの不適切な表現を、引用箇所に限って使用する。どうかご寛恕いただきたい。
- ² この3名については、後述の参考文献のほか柳本通彦による優れた評伝がある（2005）。
- ³ 鳥居の台湾調査資料には、今日の分類でいう自然人類学の形質調査資料や考古学資料も多く含まれる。しかしその検討は筆者の力量を超えており、ここでは立ち入らない。
- ⁴ ここで鳥居は「土俗学」をethnography（民族誌）の訳語として用いている。
- ⁵ 田代の経歴は、斎藤2006；長谷部1945；中生2011；松崎1934；三木1980などを参照。
- ⁶ 伊能の経歴は、荻野編1998、板澤1965などを参照。
- ⁷ 森丑之助の生涯については、宮岡1997；楊2005などを参照。
- ⁸ 森丑之助は鳥居の探検型の調査を踏襲し、文献を多用した伊能の研究を辛辣に批判した（森1913:40；笠原2012:6-7）。1990年代以前の日本の文化人類学者の間でも、フィールドワークより文献研究に重きを置いた伊能は「歴史学者」と認識され、鳥居に比べ低い評価が与えられてきたとバークレーは指摘する（Barclay2001:119-120）。
- ⁹ 鳥居以来の蘭嶼とバタン諸島との関係に関する多方面の研究については、「東台湾海」海域の文化的関係を研究する黄智慧の論考を参照されたい（黄智慧2003；2008など）。
- ¹⁰ 原住民族をより広い地理的広がりの中で把握しようとする鳥居の問題意識は、後に日本人の源流に南方系人類集団との関係を探ろうとする視線へと繋がった（石井2020）。
- ¹¹ 《召喚kaviyangan的記芸一回佳》共作展、佳平社区発展協会・中央研究院民族学研究所主催、会期：2020年8月1日-9月30日、於佳平ファティマの聖母教会旧聖堂。

南米ペルー考古学との出会い

～ナショナリズムを超えた文明史観～

関 雄 二

1 鳥居龍蔵の南米行

アジア世界をフィールドに活躍した人類学者・考古学者の鳥居龍蔵は、次男の龍次郎とともに、1937年、文化外交使節として南米のブラジル、ペルー、ボリビアを訪問した。ことに、わずか70日あまりの滞在ではあったが、ペルーにおける現地学界との接触や意見交換は、その後、東京大学によって開始された古代アンデス文明の研究の先鞭となったという意味で、考察する意義は大きい。

昭和12（1937）年3月12日、鳥居龍蔵は東京を発ち、外務省から依頼された文化使節としてブラジルを訪問した。その後、ペルー在住の日系人の勧めでペルーを訪問し、人類学、考古学的研究の現状を把握し、研究者と交流を深めた（図1）。

国内不況にあえぐ日本政府が、その打開策として移民政策に傾倒した面もあるが、すでに現地に根を下ろしていた日系人側からの、日本の学術的水準の高さを示す学者を招くことで、社会的地位を確保したいという渴望に応えた点も忘れてはならない。それだけに現地の日系人の歓迎ぶりは在留公館以上であった。

ブラジルにおける調査を終えた鳥居父子は、アマゾン川を船で遡り、8月30日にペルーに入国する。ペルー領アマゾンの拠点都市からは就航間もない航空路線をたどり首都のリマに到着した。わずかな休養の後、インカ帝国の都クスコや隣国ボリビアを含む、古代文明の遺跡を視察し、精力的に情報を収集した。本発表では、二人の考古学者との出会いを中心に鳥居の文明観に迫ってみたい。

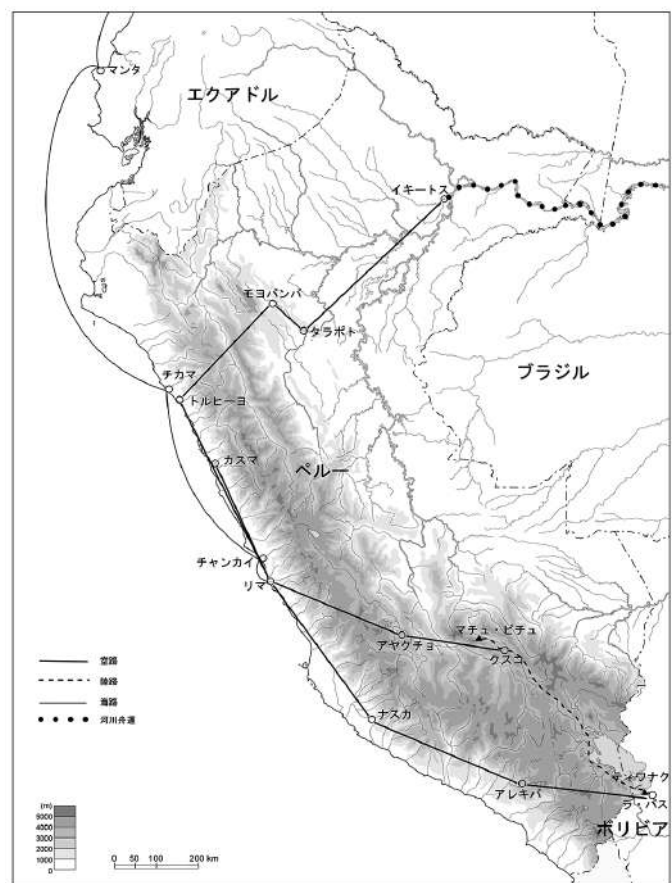


図1 日誌をもとに復原した鳥居のペルーでの移動経路

2 ペルー考古学の父、テーヨとの邂逅

リマに着いた鳥居は、歓待役の日系人とともにペルーの内務大臣や外務大臣らを表敬するが、それに先立ち、真っ先に訪問しているのが国立サン・マルコス大学であった（図4）。1551年に創立したアメリカ大陸最古の大学で待ち受けていたのは、インカ研究の第一人者であり、当時文学部長を務めていたオラシオ・ウルテアーガであったが、同大学には、彼以上に有名な時代の寵児がいた。先住民

出身の考古学者のフリーオ・C・テーヨである。しかし、当時、テーヨは、中央海岸北部にある遺跡を発掘していたため不在であった。大学での情報を仕入れたためか、古代文明の痕跡なら山ほどあるペルーにおいて、鳥居が最初に選んだ調査地は、テーヨの手がけていた遺跡群であった（図2）。

大学から知らせを受けたテーヨは鳥居を歓迎したが、どこかよそよそしさが見られた。ちょうど調査中であったモヘケと呼ばれる遺跡で、テーヨは多彩色のレリーフ像を発見していたが、布で覆い隠したまま鳥居らには見せなかった。テーヨは用心深い性格であり、ことに重要な考古学的発見については、新聞紙上でスクープさせるなど広報感覚にも長けていた。写真機を持ち込んだ鳥居らに猜疑心を向けたとしてもおかしくはない。

いずれにせよ、テーヨは鳥居とアンデス文明の起源について議論したことがうかがわれる。鳥居龍蔵記念博物館が所蔵する鳥居直筆の南米調査日誌（南米のたび）には、テーヨの学説の要約ばかりでなく、テーヨ自身が描いたスケッチが残っている（図5）。それによれば、ペルーの文化は、この地で暮らす先住民の祖先が築いたものであり、中米メキシコあたりの文化よりも古い。しかし、最初の人類はアジアから渡って来たことと主張したことがわかる。

テーヨが活躍する直前の20世紀の初頭、ペルー考古学は、外国人によって牽引されていた。とくにペルーの国立博物館長を務めたドイツ人考古学者マックス・ウーレは、中米の古代文化の先進性を強調し、ペルーの古代文化の起源をそこに見た。その後、ペルーでは、政府から一般社会に至るまで、先住民擁護主義（インディヘニスム）の思想が広がり、国家の歴史はナショナリズムの基盤となった。

ペルー独自の古代文化が国家アイデンティティの根拠として強調され、先住民出身の考古学者テーヨに大きな期待が寄せられるようになる。テーヨが鳥居に語った文化の発展過程は、まさにこの流れに位置づけられる。

ナショナルな文明論を語るテーヨに対し、鳥居は、自らの関心に引きつけ、肩すかしのような解釈を行っている（南米のたび6 9月8日）。モヘケのレリーフが、芯の部分に木の枝が埋め込まれた後に土で固められ、その上から白色の上塗りが施され、さらに黒と赤で塗色されていることに注目し、その製作技法が中国大陸部の塑像の技術と同一であると判断している。そのためか、鳥居は、テーヨのペルー独立起源説には共感せず、少なくともアメリカ大陸に渡ったのがアジア人であったからこそ類似性が生まれたと考えた。その類似性をテーヨに語り、彼をたいそう驚かせたと鳥居は記している。

首都に戻った鳥居は、熱心に集めた書物のなかで、フランシスコ・ロアイサという人物の著作に大きな関心を抱いたようだ。ロアイサは、初代インカ王について1冊の本を著し、その中で、アメリカ大陸の古代文化にアジアの影響があると論じた。先に述べた鳥居の

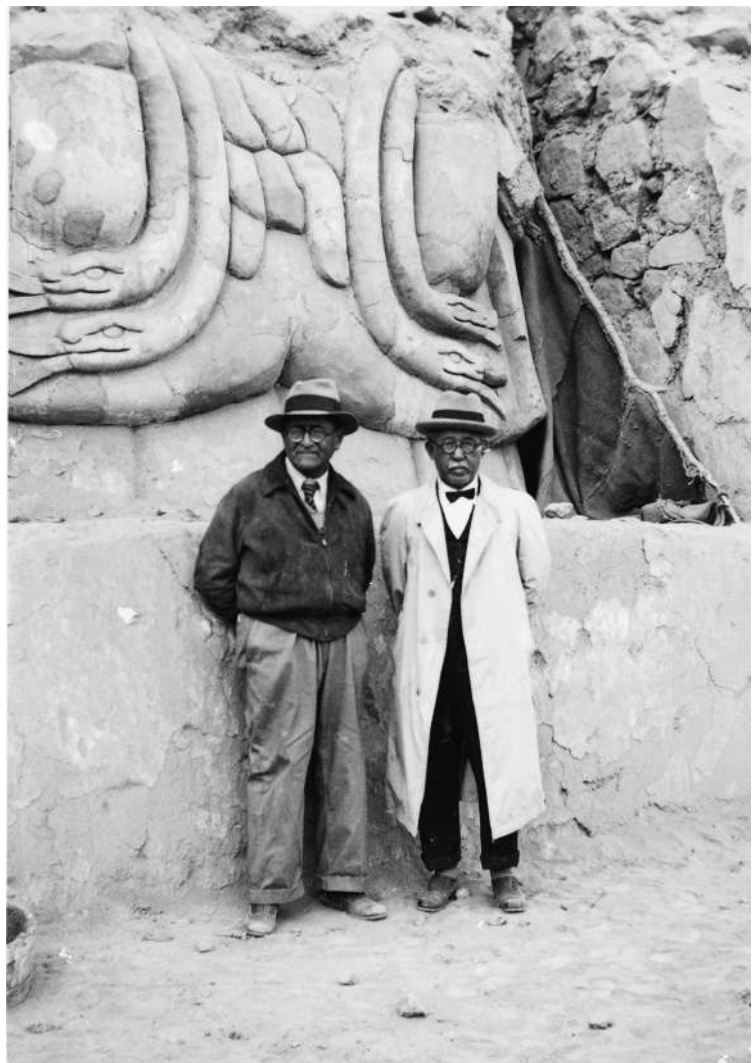


図2 ペルー中央海岸に位置するモヘケ遺跡のレリーフの前に立つテーヨと鳥居（ペルー国立考古学人類学歴史博物館提供）

見解とも呼応する。単純な伝播論ではなく、いわばアジアから渡っていった人類の基層文化に興味を抱いたと考えられる。

テーヨの文明史観は、現在のペルー考古学を覆う逆のナショナリズムと対比させるとおもしろい。逆と言ったのは、テーヨの時代、ペルーの独自性を強調することで、国家統合の思想と共鳴しあった。ところが、現在のペルー考古学の中には、独自性よりも、旧世界の文明と比較し、ペルーにも同じくらい古くから都市が存在し、社会階層が成立していたと主張する声大きい。古代アンデス文明を他の文明のモデルを持ち込み、競合させ、誇りや自尊心につなげるという屈折したナショナリズムという点で、まさにテーヨが唱えた正統派ナショナリズムの真逆なのである。

いずれにせよ、鳥居の日誌から補強することができたテーヨの思想は、現代の学問の世界を相対化するのに大きな意味を持つと考えられる。

3 在野の考古学者ラルコ・オイレとの出会い



図3 ラファエル・ラルコ・オイレ
(ラルコ博物館提供)

もう一人忘れてならないのは、ラファエル・ラルコ・オイレであろう(図3)。鳥居らは、10月の半ばに、リマから北に600キロも離れたペルー第2の都市トルヒーヨに出発する。これには、日本名誉領事である、カルロス・ラルコ・エレラ氏の計らいが大きかった。ラファエルの叔父に当たる人物である。カルロスは、トルヒーヨ行のスケジュール調整、滞在先の提供、文献の入手など鳥居に多大の支援を行った。彼の計らいで、日本の産業博覧会にペルーの考古遺物を出展させることができた。また太平洋戦争中は、連合国側にもかかわらず日系人を守り、戦後、日本政府からの叙勲も受けている。

このラルコ家は北海岸でサトウキビの大農場を営む富豪で名高い。甥のラファエルもチクリンと呼ばれる場所に大農場を構え、その土地から出土する考古遺物に興味を示し、後にペルーを代表する考古学者となる。鳥居が、ラファエルを訪ねた折には、不在であったが、自らの農園に建設した博物館を弟が案内している。収集品、

とくに金属製品のみごとさに圧倒されたようだ。

鳥居はラファエルに会えないまま、いったんは日本に向かう船に乗るが、よほど彼のことが気にかかったようで、楽陽丸が、ラファエルの農園に近いチカマ港に停泊した2日間を利用し、再び、ラファエルを訪ね、彼の邸宅に泊まっていることが日誌で明らかになった。チカマ川河口には、後に壁画が出土したことで有名になるエル・ブルッホ遺跡があり、ラルコ・オイレと訪問するとともに、北海岸で出土した遺物に描かれた図像など、さまざまな考古学的テーマについて語らったことがわかる。こうした篤いもてなしとラルコ・オイレの博学に感服したとみえ、鳥居は、彼に学位論文としてまとめることを勧めたと龍次郎が私に語ったことがあった。この言葉に刺激されたためかはわからないが、翌年よりラルコ・オイレは次々と著作を発表し、その内容は今日、私たちの研究にも大いに役立っている。

ラファエルは、テーヨとは全く異なる出自であったが故に、ナショナリズムからは距離を置いていた。収集家からの出発であったが故に、考古遺物に対する真摯な、そして自由なまなざしが確保されていたと思われる。しかし、大農場主として、何不自由なく暮らしていたラファエルもまた、現実の社会を肯定することにつながる社会進化論のイデオロギーから逃れることはできなかったと考えられる。実際に、土器形式から社会発展を論じる研究スタイルからは、この点がうかがえる。とはいえ、極端な人種差別などを生み出す古典的な社会進化論を現実社会に投影したわけではなかった。ラファ

エルの経営するチクリン農園では、小作人に対する教育や衛生管理が行き届くなど、彼の活動は、過酷な労働を強いる極悪な農場主のイメージからはかけ離れたものであった。総じてラルコ家は慈善家として名高かったようだ。同じカトリック信者として、テーヨ以上に、鳥居の心をつかんだのは、信仰心が関係しているのかもしれない。

4 現代考古学に通じる鳥居の視点

こうしてみると、鳥居がペルーを訪れた頃、現地の学界の潮流は、テーヨらのインディヘニスマ、そしてナショナリズムであった。伝播論で解釈する時代が終わりに近づき、ある意味で正統的な考古学が始まるという点では、確かに学術的議論を交わす幸運さに恵まれたのかもしれないが、やや窮屈な世界でもあったように思う。先住民出身で、先住民の国民化を推進する政府に利用された面を持つテーヨは、ひたすらペルー内部に目を向けた文明形成論を展開していたからである。アジアを股にかけ、俯瞰的な視野から文明形成を捉えようとした鳥居にとっては、テーヨは、イデオロギーに染まった頭の固い人物だったのかもしれない。



図4 国立サン・マルコス大学文学部における鳥居の講演会（エル・コメルシオ紙1937年10月28日）

しかし考えてみれば、鳥居の立場は微妙であった。当時の日本政府や在留の日系人は、ナショナリズムの立場から鳥居に期待し、日本、日本人、そして日本人の知的水準の高さを現地社会に認めてもらうことを望んだからである。それに対して、鳥居は、現地講演会などで日本文化を堂々と語り、その期待に応える反面、学術的議論になると、ナショナルなものを超える視点がにじみ出てくるからである。もっともアジアという領域全体をナショナルなものとして捉えていた可能性を捨て切れはしないが。こうした点から、現代の私たちが学ぶことができるとすれば、それは、自らの研究が、同時代の社会状況から無縁ではないという点であろう。鳥居の足跡を追うことは、学問の相対化を行っていくことにつな

がるのである。

いずれにしても、テーヨと鳥居のすれ違いは、現代の学問状況を想起させる。考古学では、精緻な調査とデータの多角的分析が必要なことは確かではあるが、そこから文明史や人類史に結びつく論は少ないように思う。むしろ結びつけることに躊躇すること自体を真摯な姿勢として褒めそやす向きの方がいまだに強いかもしれない。とはいえ、近年、これに風穴を開けるような動きが出始めている。物質性の研究や認知論の展開である。かつて「じっと遺物を観察していれば、遺物の方から意味を語ってくれる」という根拠のない精神論的考古教育で使われてきた言葉の意味を反芻し、もっと大きな文脈に置き換え始める学問的営みともいえる。

人間は、自然界から物質を持ちだし、それを加工して土器なり石器なりを製作してきた。そうしてできあがった加工品は、いつのまにか、その目的とは異なる使い方がされ、やがては、そのことに気づいた人間が加工品に手を加え、改造を重ねていく。人間と加工物の間に、こうした相互関係が成立しているという物質論が近年強く唱えられるようになった。加工物には人間の魂や意図が込められて

いるという、人間からモノへの一方的な働きかけを唱えてきた二元論を否定する大胆な見方である。その意味で、モノ、遺物、加工物には人間に作用する力があると言い換えることもできる。この立場に立てば、先の精神論的教育指導の言葉も、あながち間違いとはいえない。

ずいぶんと鳥居と離れたように思われるが、もう一つの認知論、認知考古学的アプローチならば、いささか鳥居にも近づく。人類は、進化の途上で、言葉を獲得し、モノに対して名前を与え、意味を授けてきた。しかも、その意味は一つのモノに対して一つの意味を与えたわけではなく、複数の意味、すなわち多義性をもたせ、さまざまな脈絡のなかで、それらを複雑に組み合わせた。道具の多様性の誕生もこうした言葉の獲得と関係しているという説も強い。この人類進化の観点は、人類の移動とも連動する。言語の獲得は、人類の集団での行動を容易にし、また道具の多様性の増加は、人類の可動域を広げたからである。

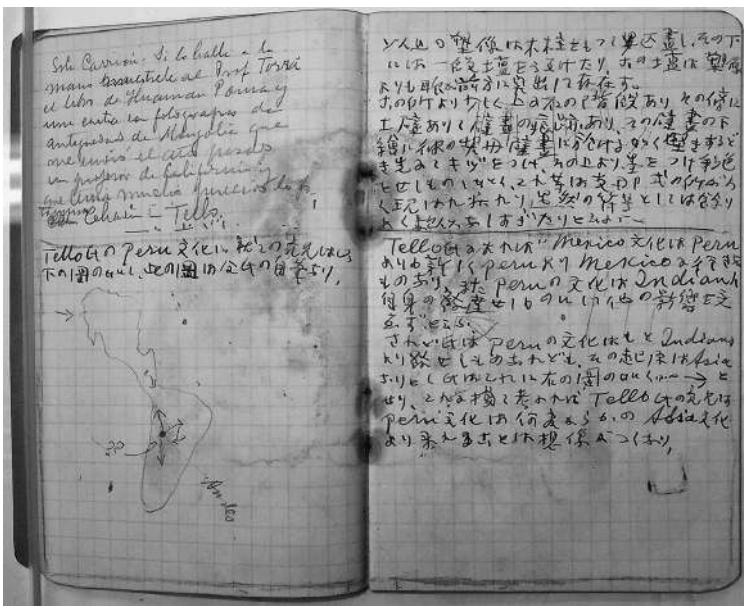


図5 テーヨの説明を記したフィールドノート（南米のたび6
9月7日）。左ページの鉛筆書きはテーヨの直筆部分。

とがどのような関係にあったのかについては謎のままである。なぜ、遠く離れ、直接的接触のなかった場所で、巨大なモニュメントが建設されるのか、これは人間の視覚や記憶とどのように関連するのだろうか。もちろん、鳥居自身が認知的考察の先鞭をつけたとは思わないが、新旧両大陸の文明比較を基本的手法とした鳥居が、似たような疑問を抱いたことは想像に難くない。むしろ、そうした基礎的な比較という作業方法にこそ、創造的な議論に昇華させていくヒントが隠されているように思えてならない。

5 文化交流からみた鳥居

最後に、学問以外の点にも言及しておこう。考古学は厄介な学問である。発掘や図面製作というスキルを習得せねば、調査許可は下りず、専門用語に満ちた論文を執筆することもできない。ある意味、非常に閉鎖的な世界である。遺跡のような文化遺産の調査や保存において、意見を求められるのは、こうした専門的知識を有する研究者であり、遺跡周辺で暮らす人は二の次になる。祭りや工芸技術のように、一般の人々が主体性を発揮する世界とは大きく異なる。それだけに、考古学が置かれた構造を解体していく作業は容易ではない。

ところが南米滞在中の鳥居の日記を読むと、日系人を中心にじつにいろいろな人々が約束もせず、ひっきりなしに訪問していることがわかる。高名な学者に接したいという日系人らの渴望があったにせよ、それを素直に受け止め、応対する鳥居には、象牙の塔のイメージは似合わない。学歴を持たず、

人類の移動には、当然のことながらアジアの地からアメリカ大陸に渡り、各地に定着していったホモ・サピエンスの動きが含まれる。いつ、どのようなルートで人類はアメリカ大陸を拡散していったのかは、依然としてアメリカ考古学の主要なテーマであることは間違いないが、この過程で、人類が持ち込んだ認知機能がどのようなものであったのかについては、なかなか議論が進んでいない。各地に定着した後に、誕生した文化や文明の生成過程は、そのほとんどが、その地の生態環境と人類の適応の枠組みで議論が終始する。いわばテーヨのように個別文化の枠組みで語られる。いったい、人間が生物として備え、育んできた機能や行動、認知能力と、後天的に生み出した文化

独学で研鑽を積んだ経験が、一般社会との垣根を取り払う役割を果たしたのだろうか。鳥居の開放的態度に磁石のように引き寄せられた人々の姿を想像するだけで、社会的還元という言葉がむなしくなるほど学問の世界が近く感じられる。

そう考えると、当時の日本政府の文化外交はなかなかと思わせるところがある。決して専門的な研究対象ではなかった南米であっても、鳥居ならばなんとか期待に応えてくれるという期待があったにちがいない。今の時代、見識を持ち、初めて出会う世界を分析できるような人物は少ないと思う。いわゆる大御所の大名旅行ではなく、政府からの旅費も十分でない中、訪問先の文化を理解しようと努める姿には舌を巻く。

私自身、研究と並行する形で身の丈に合った文化交流を40年にわたって続け、つねに対象社会との上下関係の克服を心がけてきたが、いまだに満足できる成果は得られていない。わずか2ヶ月強の滞在で、信頼感を勝ち得たように見える鳥居の南米行は、つねに私自身の目標であり、手本となっている。

【参考文献】

Kaulicke, Peter 'Julio C. Tello vs. Max Uhle en la emergencia de la arqueología Peruana' In P. Kaulicke (ed.) "Max Uhle y el Peru Antiguo", pp.69-82 (Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, 1998).

Larco Hoyle, Rafael "Los Mochicas" (Empresa Editorial "RIMAC" S.A, 1938-40).

Loayza, Francisco A. "Manko-Kapa" (Brazil, 1926).

Mejia Xesspe, Toribio 'Historia de la expedición arqueológica de 1937' In Julio C. Tello (ed.), "Arqueología del Valle de Casma" (Universidad Nacional Mayor de San Marcos, 1956).

関雄二「鳥居龍蔵と南米調査行」(東京大学編『精神のエクスペディション』(東京大学創立百二十周年記念東京大学展－学問の現在・過去・未来 第2部)、pp.45-54 (東京大学総合研究博物館、1997年)。

関雄二「もう一人のラルコとの出会い」『まほら』43、pp.42-43 (旅の文化研究所、2005年)。

関雄二「ペルーの鳥居龍蔵を追って－2人の考古学者との出会い」『民博通信』128、pp.29-32 (国立民族学博物館、2010年)。

中藺英助『鳥居龍蔵伝』(岩波書店、1995年)。

鳥居龍蔵とファミリー

天羽利夫

1 鳥居龍蔵の学問の特色

〈幅広い領域の学問〉

今で言う人類学、民族学、民俗学、考古学、歴史学の領域
強い好奇心と探究心 読書家・蔵書家・努力家

〈フィールドワーカー〉

野外調査を基調にして、日本人学者たちが未踏の東アジアを駆け巡った →自分の目で現地を見て確かめる

1895年の遼東半島調査を皮切りに、台湾、西南中国（貴州、雲南など）、中国東北部（旧蒙古・満州）、モンゴル、朝鮮半島、東部シベリア、サハリン（旧樺太）、クリール（千島列島）などのほか、南米（ブラジル、ボリビア、ペルー）まで足をのびした。

〈最新機器の導入〉

カメラ、鑑管蓄音機などの最新機器を野外調査に導入し、多くの貴重な記録を残した。

カメラは1896年の第1回台湾調査から携行し、各地で撮影した写真乾板は東京大学総合博物館や東洋文化研究所、韓国国立中央博物館などに大量に残されている。

鑑管蓄音機は1904年の第2回沖縄調査から使用。沖縄の民謡などを録音したと思われるがデータは現存しない。

〈調査成果の公表〉

調査で得た成果は積極的に公表し、膨大な著作物を残す。欧文の著作物も多く、海外への情報発信を心がけた。

海外で出版された書物をいち早く購入して、最新の研究を雑誌で紹介したり、翻訳本も刊行した。

〈鳥居龍蔵の語学力〉

- ・鳥居龍蔵は若き独学の頃から欧文の書籍を購入して読む。
- ・東京遊学早々、本郷弓町のドイツ語学校に通いドイツ語を学ぶ。
- ・東京移住後は神田駿河台のニコライ神学校に学生からロシア語を学ぶ。
- ・麻布のカトリック教会に通い、ツルペン神父らからフランス語を学ぶ。
特にフランス文化やフランス語については特別な思いをもっていた。
- ・アイヌ語は東京帝大の言語学科の講義を聴講。神保小虎博士の依頼で鳥居家に住まいしたパラサマレックから学ぶ。

〈家族同伴の調査旅行〉

他の学者には見られない家族を伴った調査旅行は鳥居龍蔵の大きな特色である。この背景には、1924年6月、東京帝国大学を辞職したことが大きく影響していると思われる。

2 家族とともに学問を

鳥居龍蔵は、自叙伝『ある老学徒の手記』（朝日新聞社 1953年）の結語で次のように語っている。

私は学校卒業証書や肩書で生活しない。

私は自身を作り出さんとこれまで日夜苦心したのである。されば私は私自身で生き、私のシンボルは私である。のみならず私の学問も私の学問である。そして私の学問は妻と共にし子供達とともにした。これがため長男龍雄を巴里で失った。

また、「私と子供達」(『満蒙其他の思ひ出』所収、岡倉書房、1936年)では次のような記述がある。我が家は、夫婦・子女に至るまで、いづれも人類学・考古学の闘士であって、ために我が一家のホームは、斯学の空気にみたされて居る。その意味に於て、亡き龍雄の霊もまた、今日この中に這入って居るやうな気がするのである。

我が家は内地は固より、欧米の学会・学者との交渉が頻繁であるから、小さいものながら『鳥居人類学研究所』を設立し、家の人々でこれを維持して、共に斯学を研究したり、旅行したりして居る。



左から鳥居龍蔵、龍次郎、幸子、緑子、きみ子
『西比利亜から満蒙へ』(1929)より

《鳥居龍蔵の家族構成》

○鳥居きみ子(1881～1959)

本名キミ。1881(明治14)年2月13日、市原応資・サカの三女として徳島市富田浦町に生まれる。富田尋常小学校、徳島県尋常師範学校附属小学校高等科、淑慎女学校を経て徳島県師範学校師範科を卒業。卒業後、撫養尋常小学校の訓導として勤務、その後上京して東京音楽学校に入学。1901(明治34)年、鳥居龍蔵と結婚する。

1906(明治39)年3月、蒙古喀喇沁王府から龍蔵とともに招聘され、きみ子は龍蔵より一足先に単身で赴任する。その道すがら綴った紀行文が『蒙古行』として刊行された。龍蔵は2ヶ月後赴任、きみ子は女学堂、龍蔵は男子学堂とそれぞれの教師となる。その傍ら蒙古語を学んだほか、近辺の遺跡調査を行う。

出産のため1年後帰国、出産後間もなく産まれたばかりの幼子と伴って再び蒙古へと出かけ、親子三人で蒙古の調査旅行を敢行。きみ子の著した『土俗学上より観たる蒙古』、龍蔵との共著『蒙古を再び探る』はこの時の調査成果である。

きみ子は龍蔵の妻として、助手として龍蔵の国内外の調査に同行し、数々の著書を残した。近年、女性民族学者としての評価が高まっている。



○鳥居初音（1904～？）

1904（明治37）年10月1日生まれ。1919（大正8）年、神奈川県瀬谷村大塚弥市・マサ夫妻の養女となる（鳥居龍次郎記「鳥居龍蔵小伝」『鳥居龍蔵全集』（第1巻、1975年、所収）。その後、阿部弥太郎と結婚。鳥居龍蔵一家は北京から帰国後、一時阿部家に寄留した（阿部英明『自叙伝波乱の人生』2005年）。

○鳥居龍雄（1905～27）

1905（明治38）年8月28日生まれ。暁星小学校、暁星中学校に学ぶ。父の影響を受けて、早くから人類学・考古学を学び始め、中学校在学中に校誌『暁星』に見学記などを投稿。1923年3月、中学校卒業後、パリに留学。暁星学校と関係の深いサンマリー学校に入学、3年間学ぶ。その後ソルボンヌ大学に入学して基礎的な学問を学び、同時に人類学院で考古学・人類学を学ぶ。1927.1.30（昭和2年）、パリにて病死。

- ・鳥居龍蔵 1927.4 「若き人類学者鳥居龍雄一本篇を我が子龍雄に捧ぐ」『太陽』33巻4号 博文館
- ・鳥居きみ子 1927.12 「この痛手こそ十字架の道」『婦人画報』268号 婦人画報社
- ・鳥居幸子編著 1930.3 『白百合』 鳥居幸子発行 *龍雄追悼文集



龍雄の肖像画

○鳥居幸子（1907～1999）

1907（明治40）年3月23日生まれ。1924（大正13）年3月25日、私立聖心女子学院高等女学校卒業。卒業後、パリに留学中の兄龍雄を追って留学。ソルボンヌ大学で仏語や美術史・デザイン等を学ぶ。龍雄の死去に伴い遺骨を抱いて帰国。帰国後は龍蔵の調査に同行し、著書に多くの挿図を残す。北京時代には日本語講師なども務めた。

○鳥居緑子（1910～1985）

1910（明治43）年5月2日生まれ。姉幸子と同じ聖心女子学院高等女学校に学ぶ。中途退学し、柿内青葉のもと日本画を学び、渡辺庄三郎に古典版画を、和田三造・山本鼎の浮世絵版を学ぶ。龍蔵の調査に同行してスケッチなど担当、鳥居の著書の装丁や『武蔵野』などに挿絵を数多く残す。とくに慶陵石室壁画の模写の功績は大きい。1934年、鳥居人類学研究所から人類学・考古学研究視察のため渡米、博物館等の資料調査を行う。

北京時代に鳥居龍蔵の調査の助手を勤めた張雁深（燕京大学教授）と結婚、龍蔵一家が帰国後も娘と北京に留まる。張雁深・鳥居緑子合輯『民国外交史料輯佚』（1951、開通書社、北京）を刊行。

○鳥居龍次郎（1916～1998）

1916（大正5）年7月6日生まれ。龍雄と同じ暁星小・中学校に通う。兄龍雄の死去をうけて、龍

蔵の調査に同行し助手を勤める。とくに写真技師として多くの成果を残す。仏像や金石文等を研究、『武蔵野』などに成果を投稿。1939年、旭川砲兵隊に入営。翌年、中国東北部戦線に出征。鳥居龍蔵・きみ子死去ののち、1965年3月、徳島県立鳥居記念博物館会が鳴門市に開館、同時に鳥居博士顕彰会事務局長に就任、館の管理運営を担う。1998年12月17日、鳴門病院にて死去。

3 家族を伴う海外調査

○龍蔵・きみ子、蒙古カラチン王府の招聘で蒙古へ赴く

・1906（明治39）年 蒙古調査（きみ子同伴）

1906.3.8~5.22 きみ子「蒙古行 道すがら（其1~29）」『読売新聞』 読売新聞社

1906.5.29~8.10 きみ子「蒙古行 喀喇沁の春（其1~45）」『読売新聞』 読売新聞社

1906.8.11~29 きみ子「蒙古行 喀喇沁の春（其1~13）」『読売新聞』 読売新聞社

1906.10 きみ子『蒙古行』 読売新聞社

・1907~08（明治40~41）年 蒙古調査（きみ子・幸子同伴）

1909.7 きみ子「乳幼児を抱いて良人と共に未開の蒙古を探検せし実験」（君子名、取材談話録）『婦人世界』4巻8号 実業之日本社

1910.3 きみ子「良人を助けて再度蒙古に遊びし私の苦心」『婦女界』1巻1号 同文館

1927.2 きみ子『土俗学上より観たる蒙古』 六文館

【1923（大正12）年2月 長男龍雄がフランス・パリに留学】

【1924（大正13）年 幸子、フランス・パリに留学 6月2日 東京帝国大学を辞職】

【1927.1.30（昭和2年）留学中の長男龍雄がパリにて死去】

【上智大学創立に尽力、文学部長・教授に就任】

・1928（昭和3）年 東部シベリア（幸子同伴）・満洲調査（きみ子同伴）、山東省調査（きみ子同伴）

1928.10 きみ子「婦人之友サロン（親子三人満蒙の旅）」『婦人之友』22巻10号（同年8月29日、自由学園ホールにて龍蔵・きみ子・幸子座談会録） 婦人之友社

1929.5 きみ子『西比利亚から満蒙へ』（龍蔵・幸子共著） 大阪屋号書店

・1930（昭和5）年 蒙古調査（きみ子同伴）

・1931（昭和6）年 満洲調査（きみ子・龍次郎同伴）（1931年9月満洲事変）

・1932（昭和7）年 満洲・朝鮮調査（緑子・龍次郎同伴）

・1933（昭和8）年 蒙古・満洲調査（きみ子・緑子・龍次郎同伴）

【1933年12月31日 国学院大学教授を辞職】

・1935（昭和10）年 満洲・北支那調査（きみ子・緑子・龍次郎同伴）

・1937~38（昭和12~13）年 ブラジル・ペルー・ボリビア調査（龍次郎同伴）（1937年7月日中戦争）

・1938（昭和13）年 華北調査（緑子・龍次郎同伴）

【1939（昭和14）年 北京の燕京大学から招聘され一家で北京に移住。ハーバード燕京研究所客座教授就任】

・1939~41（昭和14~16）年 北京在住中、満洲・山西省・山東省調査

【1941年12月太平洋戦争勃発、燕京大学閉鎖。一家は北京に留まり契丹研究を継続】

【1945年終戦により燕京大学再開、復帰】

【1951（昭和26）年7月 燕京大学を退職、12月一家をあげて帰国】

1952.2 「燕京大学の思い出」『婦人之友』46巻2号 婦人之友社

1952.7 「夫と共に「歴史」を歩む」『文芸春秋』30巻10号 文芸春秋新社
 【1953（昭和28）年1月14日 龍蔵死去、享年82歳】
 【1959（昭和34）年8月19日 きみ子死去、享年78歳】



『遼の文化を探る』表紙絵緑子画



『西比利亜から満蒙へ』口絵緑子画



『満蒙を再び探る』慶州城白塔前の夫妻



『西比利亜から満蒙へ』「農夫の娘」幸子画



『遼の文化を探る』興安嶺山中一行露営光景



『遼の文化図譜 第三冊』東陵内山水壁画秋図と模写する緑子

【鳥居きみ子関係文献目録】

○鳥居きみ子著述目録

- 1903.10 「お爺さんと鼠」『少年』創刊号 時事新報社
 1906.3.8～5.22 「蒙古行 道すがら（其1～29）」『読売新聞』読売新聞社
 1906.3 「御誕生の記」『聲』354号 三才社
 1906.4 「上総のやどり」金尾文淵堂
 1906.5.29～8.10 「蒙古行 喀喇沁の春（其1～45）」『読売新聞』読売新聞社
 1906.8.11～29 「蒙古行 喀喇沁の春（其1～13）」『読売新聞』読売新聞社
 1906.10 『蒙古行』読売新聞社（再録『明治シルクロード探検紀行文集成』18巻 ゆまに書房 1988.9）
 1907.3.10 「鬼婆」『中央新聞週報』19号 中央新聞社
 1907.3 「蒙古の別天地」（著者名 鳥居喜美子）『女学世界』7巻4号 博文館
 1907.3 「蒙古の童話」『太陽』13巻4号 博文館
 1907.4 「蒙古の童話」『太陽』13巻5号 博文館
 1907.4 「蒙古の話」『女鑑』17年4号 国光社
 1907.4 「蒙古の奇習 鳥居君子史談」（取材談話録）『珍世界』1巻4号 光村出版部
 1907.4 「蒙古は如何（女子海外渡航案内）」『ムラサキ』3巻4号 読売新聞日就社
 1907.11.12 「秋の色」『読売新聞』読売新聞社
 1908.12.7,8 「蒙古旅行奇談（1～2）」『読売新聞』読売新聞社
 1908.12.13,14,16 「蒙古の禮式」（取材談話録）『時事新報』9051、52、54号 時事新報社
 1908.12.25 「蒙古の少年（続）」（取材談話録）『時事新報』9063号 時事新報社
 1909.2.12 「蒙古の楽器類」『時事新報』9112号 時事新報社
 1909.2.13 「蒙古の楽器類（続）」（取材談話録）『時事新報』9113号 時事新報社
 1909.2.15 「蒙古の歌謡」（取材談話録）『時事新報』9115号 時事新報社
 1909.3 「喇嘛の舞踏」『東亜之光』4巻3号 東亜協会
 1909.4 「蒙古の砂漠旅行」『少年』67号 時事新報社
 1909.4 「蒙古の牧畜と貿易」『殖民の世界 南米』2巻3号 成功雜誌社
 1909.7 「乳幼児を抱いて良人と共に未開の蒙古を探検せし実験」（君子名、取材談話録）『婦人世界』4巻8号 実業之日本社
 1909.8 「蒙古の楽器類」『音楽界』2巻8号 楽界社
 1909.8 「東部蒙古旅行記（其1）」『東京人類学会雑誌』24巻281号 東京人類学会
 1909.9 「東部蒙古旅行記（其2）」『東京人類学会雑誌』24巻282号 東京人類学会
 1909.9 「蒙古奇談一附日記の一節」『ムラサキ』6巻9号 読売新聞日就社
 1909.10 「東部蒙古旅行記（其3）」『東京人類学会雑誌』25巻283号 東京人類学会
 1909.11 「東部蒙古旅行記（其4）」『東京人類学会雑誌』25巻284号 東京人類学会
 1909.12 「東部蒙古旅行記（其5）」『東京人類学会雑誌』25巻285号 東京人類学会
 1910.2 「東部蒙古旅行記（其6）」『東京人類学会雑誌』25巻287号 東京人類学会
 1910.2 「内外蒙古婦人の状態（上）」『通信協会雑誌』19号（1909年9月25日通信協会女子部講演録）通信協会
 1910.3 「内外蒙古婦人の状態（下）」『通信協会雑誌』20号（1909年9月25日通信協会女子部講演録）通信協会
 1910.3 「良人を助けて再度蒙古に遊びし私の苦心」『婦女界』1巻1号 同文館
 1910.4 「東部蒙古旅行記（其7）」『東京人類学会雑誌』25巻289号 東京人類学会
 1910.5 「東部蒙古旅行記（其8）」『東京人類学会雑誌』25巻290号 東京人類学会
 1910.5 「蒙古の音楽に就いて」（講演会録）『東亜之光』5巻5号 東亜協会
 1910.7.10 「花まくら」『読売新聞』読売新聞社
 1910.7 「蒙古の音楽に就いて」（講演会録）『東亜之光』5巻7号 東亜協会
 1910.10 「蒙古の音楽」『音楽界』3巻10号 楽界社
 1910.12 「若き学者の妻に」『東亜之光』5巻12号 東亜協会
 1911.3 「東部蒙古旅行記（其8）」『東京人類学会雑誌』26巻300号 東京人類学会
 1911.4 「続東部蒙古旅行記（其1）」『人類学雑誌』27巻1号 東京人類学会
 1911.5 「続東部蒙古旅行記（其2）」『人類学雑誌』27巻2号 東京人類学会
 1911.6 「続東部蒙古旅行記（其3）」『人類学雑誌』27巻3号 東京人類学会
 1911.7 「続東部蒙古旅行記（其4）」『人類学雑誌』27巻4号 東京人類学会
 1911.7.9 「逆境」『読売新聞』読売新聞社
 1911.8 「続東部蒙古旅行記（其4）」『人類学雑誌』27巻5号 東京人類学会
 1911.9 「続東部蒙古旅行記（其4）」『人類学雑誌』27巻6号 東京人類学会
 1912.11 「蒙古日記」『世界』102号 京華日報社 * 5月17日～22日の日記
 1912.12 「蒙古日記」『世界』103号 京華日報社 * 5月23日～27日の日記
 1913.1 「蒙古旅行」『世界』104号 京華日報社 * 5月28日～31日の日記
 1913.2 「蒙古日記」『世界』105号 京華日報社 * 6月2日の日記
 1913.6 「たうときかげ」『現代』4巻6号 現代社
 1913.11 「我勢力範囲たる可き内蒙古」『学生』4巻12号 富山房
 1915.6.29～7.2 「潢河から興安嶺まで（其1～4）」『読売新聞』読売新聞社
 1915.7 「蒙古の天幕生活」『女学世界』15巻7号 博文館
 1916.1.3 「蒙古の奇風俗」『読売新聞』（取材談話録）読売新聞社
 1916.3 「蒙古の昔話」『家庭と玩具』2巻2号 家庭倶楽部
 1916.4 「蒙古の昔話」『家庭と玩具』2巻3号 家庭倶楽部
 1926.8 「自由な気持で研究を」（取材談話録）『婦人世界』22巻8号 実業之日本社
 1927.2 『土俗学上より観たる蒙古』六文館
 1927.8 「母の立場」『婦人之友』21巻8号 婦人之友社

- 1927.12 「この傷手こそ十字架の道」『婦人画報』268号 婦人画報社
 1928.10 「婦人之友サロン（親子三人満蒙の旅）」『婦人之友』22巻10号 婦人之友社
 （同年8月29日、自由学園ホールにて龍蔵・きみ子・幸子座談会録）
 1928.10 「我扱った理想の結婚式」『婦人倶楽部』9巻10号 大日本雄弁会講談社
 1929.5 「西伯利亚から満蒙へ」（龍蔵・幸子・幸子共著）大阪屋号書店
 1929.7 「娘二十ごろの座談会」『婦人倶楽部』10巻7号（座談会録）大日本雄弁会講談社
 1931.5 「山東紀行（一）」『東亜』4巻5号 東亜経済調査局
 1932.1 「満蒙の風俗と生活」、「跋」（龍蔵・きみ子共著）『満蒙を再び探る』六文館
 1932.6 「内蒙古人の風俗習慣を語る」『科学知識』12巻6号 科学知識普及会
 1932.11 「遅々とした楽しみ」『家庭』2巻11号 東京家庭雑誌社
 1933.3.19 「熱河風景 蒙古人の生活」『サンデー毎日』12年14号 大阪毎日新聞社
 1933.3 「夫の職業と妻の苦心を語る座談会」『婦女界』47巻3号（座談会録） 婦女界
 1933.5 「この頃の社会への私の言分 実力を認めよ」『婦女界』47巻5号 婦女界社
 1933.7 「文の道（十首）」『蒙古の音楽に就いて』『梧桐集』大倉廣文堂（「蒙古の音楽に就いて」は東亜協会講演再録）
 1934.3 「新興の満州国を旅行して」『婦女界』49巻3号 婦女界社
 1935.5 「雲門から駝山へ（山東旅行記の一節）」『旅と伝説』89号 三元社
 1935.7 「白塔子（遼の慶州城）からボロホトン（遼の上京）へ（其一）」『旅と伝説』91号 三元社
 1935.9 「白塔子（遼の慶州城）からボロホトン（遼の上京）へ（其二）」『旅と伝説』93号 三元社
 1936.1 「愛児を抱いて蒙古の砂漠に」『婦人倶楽部』19巻1号 大日本雄辯会講談社
 1936.4 「蒙古の童話」『旅と伝説』特輯百号 三元社
 1936.4 「蒙古を語る」『報国』5巻4号 野間会本部
 1936.5 「蒙古の喜び月」『処女の友』19巻5号 大日本聯合女子青年団
 1936.10 「衣類の手間を読書に向けて」『家庭』6巻10号 東京家庭雑誌社
 1937.2 「旅立つ娘と共に」『婦人之友』31巻2号 婦人之友社
 1937.10 「北平からドロノールまで」『海』7巻10号 大阪商船株式会社
 1939.2 「思ひ出」『科学ペン』4巻2号 科学ペンクラブ
 1939.3 「蒙古の土俗」『ホームライフ』5巻3号 大阪毎日新聞社
 1952.2 「燕京大学の思い出」『婦人之友』46巻2号 婦人之友社
 1952.3 「最初の蒙古踏査」『婦人之友』46巻3号 婦人之友社
 1952.7 「夫と共に「歴史」を歩む」『文芸春秋』30巻10号 文芸春秋新社
 1953.12 「昔の食物 蒙古」『美しい暮らしの手帖』22号 暮らしの手帖社

○鳥居きみ子参考文献

- 天羽利夫 2007.1 「とくしま人物列伝 鳥居きみ子」『いのち輝く』54号 とくしまあいランド推進協議会
 天羽利夫 2013.8 「龍蔵と歩んだ鳥居きみ子の足跡と業績」『鳥居龍蔵研究』2号 鳥居龍蔵を語る会
 伊沢修二 1907.3 「蒙古より帰朝せる鳥居君子女史」（著者名 栗石生）『婦人世界』2巻3号 東京実業之日本社
 大日本雄辯会講談社編集部 1936.1 「乳児を抱いて蒙古の砂漠に—人類学の権威鳥居龍蔵夫人—」『婦人倶楽部』17巻1号
 大日本雄辯会講談社（1940.12 岩村武勇編・発行『教育勅語と徳島縣』に再録）
 岩村武勇 1955.3 『撫養小学校沿革史』撫養小学校創立八十周年記念会
 ウ・ムングルゲレル 2003.12 「モンゴル人子女教育に貢献した2人の日本人女性」『旅の文化研究所研究報告』12号 旅の文化研究所
 影山稔雄 1953.2 「日本のキューリー夫人—鳥居龍蔵博士の妻きみ子女史の半生—」『婦人生活』17巻3号 同志社
 陰山栄編 1963.12 『ツルベン神父の生涯とその思い出』中央出版社
 カトリック麻布教会百年史編集委員会編 1990.5 『カトリック麻布教会 一八八九年—一九八九年』カトリック麻布教会
 久保たつ 1970.3 「鳥居夫人の学歴と私たちとの親交」『鳥居龍蔵博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館
 小長谷有紀 1993.3 「鳥居夫妻の「満蒙」調査行」『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館
 小長谷有紀・オンドロナ 2012.1 「蒙古行（鳥居きみ子）」『日記に読む近代日本』5（アジアと日本）吉川弘文館
 『女性教養』誌記者 1954.4 「考古学者鳥居きみ子女史訪問記」『女性教養』1954年4月号（183号）大日本女子社会教育会
 鈴木綾子 2009.10 「君と行かば」『阿波の歴史小説』30号 阿波の歴史を小説にする
 佐々木信綱選 1907.1 『玉川集』修文館
 大日本女子社会教育会記者 1954.4 「考古学者鳥居きみ子女史訪問記」『女性教養』183号 大日本女子社会教育会
 田畑久夫 1995.9 「鳥居龍蔵の満蒙調査—調査記録の分析から」『比較民俗研究』12号 筑波大学比較民俗研究会
 東洋婦人画報編 1907.12 「蒙古喀喇沁王誕辰式と敏正女学堂落成式」『東洋婦人画報』1年5号 東京社
 徳島県博物館編 1983.3 「鳥居きみ子」『徳島の女性先覚者展図録』徳島県博物館
 徳島毎日新聞 1965.5.30 「女流ナンバーワン物語（5）人類学鳥居きみ子女史」『徳島毎日新聞』徳島毎日新聞社
 鳥居博士顕彰会 1965.9 「図説鳥居龍蔵伝」鳥居博士顕彰会
 中蘭英助 1995.3 『鳥居龍蔵伝 アジアを走破した人類学者』岩波書店
 長谷川時雨 1935.10 「鳥居きみ子」『春帯記』岡倉書房
 松永友和 2017.3 「鳥居きみ子宛坪井正五郎書簡」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』3号 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
 矢田喜美雄 1953.3 「故鳥居博士の偉業を継ぐ きみ子夫人の横顔」『婦人朝日』昭和28年3月号 朝日新聞社
 矢田喜美雄 1970.3 「鳥居博士夫妻とわたし」『鳥居記念博物館紀要』4号 徳島県立鳥居記念博物館
 山崎朋子 1968.7 「アジア女性交流史第3回 蒙古女子教育に尽くした日本女性」『アジア女性交流史研究』第3号 アジア女性交流史研究会
 山崎朋子 1995.4 「蒙古女子教育に尽くした日本女性 河原操子と鳥居きみ子」『アジアの女性交流史 明治・大正期編』筑摩書房
 横田素子 2009.3 「1906年におけるモンゴル人学生の日本留学」『和光大学総合研究文化研究所年報 東西南北』和光大学総合文化研究所

【鳥居龍雄関係文献目録】

○鳥居龍雄著述目録

- 1918.7 「芝の古墳」(第1学年A組)『暁星』12号 61～62 暁星学校
1921.12 「宇治見物」(4A)『暁星』19号 30～31 暁星学校
1923.4 「渡仏途上瞥見」『人類学雑誌』38巻4号 東京人類学会
1923.5 「セイロン島通信」『人類学雑誌』38巻5号 東京人類学会
1923.6.2～8.23 「バリーの学生生活(1～9)」『東京日日新聞』東京日日新聞社
1925.12 「ドルドイニユの有史以前の遺蹟について」『考古学雑誌』15巻12号日本考古学会
1926.2 「Tumulus式古墳見物の記」(大正14年7月20日記)『考古学雑誌』16巻2号 38～39 日本考古学会

○鳥居龍雄参考文献

- 1922.11 「東京人類学会記事 入会者」『人類学雑誌』37巻11号 東京人類学会
1923.1.2 「鳥居龍蔵博士の令息巴里へ留学」『徳島日日新報』徳島日日新報社
1923.2 「鳥居龍雄君の渡仏」『人類学雑誌』38巻2号 東京人類学会
1924.2 「鳥居龍雄氏の消息」『人類学雑誌』39巻2号 東京人類学会
1927.2 「会報 逝去」『人類学雑誌』42巻2号 東京人類学会
中島利一郎 1927.2 「鳥居博士令息故龍雄君を悼みて」『武蔵野』9巻2号 武蔵野会
鳥居龍蔵 1927.4 「若き人類学者鳥居龍雄一本篇を我が子龍雄に捧ぐ」『太陽』33巻4号 博文館
鳥居幸子 1927.6 「羅馬の聖ペトロ寺院とヴァチカン宮殿(1)」『婦人画報』262号 婦人画報社
鳥居幸子 1927.7 「羅馬の聖ペトロ寺院とヴァチカン宮殿(2) 羅馬法王に拝謁して」『婦人画報』263号 婦人画報社
鳥居きみ子 1927.12 「この痛手こそ十字架の道」『婦人画報』268号 婦人画報社
鳥居幸子編著 1930.3 『白百合』鳥居幸子発行

【鳥居龍次郎関係文献目録】

○鳥居龍次郎著述目録

- 1930.7 「京都通信」『武蔵野』16巻1号 武蔵野会
1931.11 「鳥越から出た原史時代の遺物に就て」『武蔵野』16巻4・5号 武蔵野会
1932.7 「武蔵に現存する兜鉢毘沙門天像に就いて」(鳥居龍蔵共著)『武蔵野』19巻1号 武蔵野会
1932.8 「満州だより」(鳥居龍蔵共著)『武蔵野』19巻2号 武蔵野会
1932.8 「満州だより」(鳥居龍蔵共著)『武蔵野』19巻3号 武蔵野会
1933.3 「西新井大師で発見した金剛童子鏡に就て」(鳥居龍蔵共著)『武蔵野』20巻3号 武蔵野会
1934.2 「武蔵野考古行脚 立川普濟寺の巻」(七代鳥新・世田茂之共著)『武蔵野』21巻2号 武蔵野会 (七代鳥新は龍次郎)
1934.3 「父の研究を助けて満蒙へ 仏蹟とところどころ」『科学知識』14巻3号 科学知識普及会
1934.3 「武蔵野考古行脚(3) 一宝珠花の巻一」(服部清五郎共著)『武蔵野』21巻3号 武蔵野会
1934.4 「武蔵野考古行脚(4) 一浅草橋の巻一」『武蔵野』21巻4号 武蔵野会
1934.5 「蒲櫻遊記一武蔵野考古行脚一」(服部清五郎共著)『武蔵野』21巻5号 武蔵野会
1934.6 「蓮田から辻合まで一武蔵野考古行脚一」(服部清五郎共著)『武蔵野』21巻6号 武蔵野会
1940.2 「戦線夜話・馬場美濃守」『武蔵野』27巻2号 武蔵野会
1940.12 「荒城の蓮池」『武蔵野』27巻12号 武蔵野会 *口絵 荒城の蓮池(鳥居龍次郎撮影)
1943.2 「来迎の弥陀」(燕都游生名)『武蔵野』30巻2号 武蔵野会
1943.3 「拓碑漫録(上)」(燕都游生名)『武蔵野』30巻3号 武蔵野会
1943.4 「拓碑漫録(下)」(燕都游生名)『武蔵野』30巻4号 武蔵野会
1943.5 「戦陣の古蹟」(燕都游生名)『武蔵野』30巻5号 武蔵野会
1943.6 「武状元」(燕都游生名)『武蔵野』30巻6号 武蔵野会
1943.8 「荆卿里碑放談」(燕都游生名)『武蔵野』30巻8号 武蔵野会
1943.11 「風韻ある禁札」(燕都游生名)『武蔵野』30巻11号 武蔵野会
1975.12 「ドルメンじゃ!」『鳥居龍蔵全集』2巻・附録月報3 朝日新聞社
1976.1 「父と外国語」『鳥居龍蔵全集』7巻・附録月報4 朝日新聞社
1976.2 「父の蔵書」『鳥居龍蔵全集』3巻・附録月報5 朝日新聞社
1976.3 「父の発掘・採集品」『鳥居龍蔵全集』8巻・附録月報6 朝日新聞社
1976.4 「「龍」の読み方」『鳥居龍蔵全集』5巻・附録月報7 朝日新聞社
1976.5 「父と宗教」『鳥居龍蔵全集』10巻・附録月報8 朝日新聞社
1976.7 「父のスケッチ」『鳥居龍蔵全集』4巻・附録月報10 朝日新聞社
1993.7 「家族ぐるみの調査行」『文』32号 公文教育研究会

○鳥居龍次郎参考文献

- 1939.1 「会報 鳥居博士令息の入営」『武蔵野』26巻1号 武蔵野会
1939.5 「鳥居博士令息龍次郎氏より」『武蔵野』26巻5号 武蔵野会
1939.10 「鳥居博士令息龍次郎氏より(父母宛)」『武蔵野』26巻10号 武蔵野会
1939.12 「会報 消息 鳥居龍次郎氏より」『武蔵野』26巻12号 武蔵野会
1940.1 「会報 消息 鳥居龍次郎氏の戦地だより(磐瀬宛)」『武蔵野』27巻1号 武蔵野会
1940.2 「会報 消息 鳥居龍次郎氏より(磐瀬宛)」『武蔵野』27巻2号 武蔵野会
1940.4 「会報 消息 戦地だより(磐瀬宛)」『武蔵野』27巻4号 武蔵野会
1941.9 「会報 消息 鳥居龍次郎氏(北支)より」『武蔵野』26巻1号 武蔵野会
末成道男 1999.12 「鳥居龍次郎氏を偲ぶ」『台湾原住民研究』4号(日本順益台湾原住民研究会編) 風響社

【鳥居幸子関係文献目録】

○鳥居幸子著述目録

- 1920.4 『復活』(私家本)
1926.3 「マリアの聖地(パリにて)」『婦人世界』22巻3号 実業之日本社
1927.6 「フランスに兄を喪ひて」『婦人之友』21巻6号 婦人之友社

- 1927.6 「羅馬の聖ペトロ寺院とヴァチカン宮殿 (一)」『婦人画報』262号 婦人画報社
 1927.7 「羅馬の聖ペトロ寺院とヴァチカン宮殿 (二) 羅馬法王に拝謁して」『婦人画報』263号 婦人画報社
 1927.7 「現代令嬢書簡集 一九二七年二月五日 (プールラレヌにて)」『婦人俱樂部』8巻7号 大日本雄辯会
 1927.9 「ローマ式及びゴシック式美術に就いて」『太陽』33巻9号 博文館
 1927.11 「若しも私に五坪の部屋を興へられたならば」『婦人画報』267号 婦人画報社
 1927.11 「霊界よりの聲」『聲』622号 教友社
 1928.2 「小さき家の装い」 萬里閣書房
 1928.10 「シベリアの旅の感想」『全関西婦人連合会』5巻10号 全関西婦人連合会
 1929.3 「蒙古婦人を見て」『婦女界』39巻3号 婦女界社
 1929.5 「学術研究の父を助けてシベリヤに吹雪と戦ふ」『婦人俱樂部』10巻5号 大日本雄辯会講談社
 1929.5 「シベリアの旅」『西比利亞から滿蒙』(龍蔵・きみ子・幸子共著) 大阪屋號書店
 1929.5 「平民的な室内装飾」『婦人公論』14巻5号 中央公論社
 1929.9 「初秋にふさわしい装飾」『婦人画報』290号 婦人画報社
 1929.12 「日本間の暖房装置と装飾」『婦人公論』14巻12号 中央公論社
 1930.1 「ヴェ・ジ・トルマチヨフ著「滿州の旧石器時代に就いて」(幸子訳)『考古学』1巻 東京考古学会
 1930.3 『白百合』(鳥居幸子編著、発行者)
 1930.4 「裏表さまざま世界の女を語る座談会」『婦人俱樂部』11巻4号 大日本雄辯会講談社
 1930.7 「南国の旅」『旅と伝説』31号 三元社
 1930.8 「他山の石」『武蔵野』16巻2号 武蔵野会
 1931.3 「朗かな気持ちか根本」『健康時代』2巻3号 実業之日本社
 1931.6 ~ 12 「ル、ドの巡禮日記その1~7」『聲』665~671号 カトリック中央出版社
 1932.5 「聖イメルダの聖劇 (メール、マリ、ルイ著、幸子訳)」『聲』676号 カトリック中央出版部
 1932.6 「中世に於けるフランスの聖櫃」『聲』677号 カトリック中央出版部
 1932.7 「フランス中世に於ける携帯用の祭壇」『聲』678号 カトリック中央出版部
 1932.7 「フランス中世に於ける労働と美術について」『カトリック』12巻7号 カトリック中央出版部
 1932.9 「フランス中世に於ける聖体盒」『聲』680号 カトリック中央出版部
 1932.11 「フランス中世に於ける聖爵」『聲』682号 カトリック中央出版部
 1932.12 「フランス中世に於ける釣燭臺」『聲』678号 カトリック中央出版部
 1933.1 「ヨーロッパ年中行事のマスク」『ドルメン』10号 岡書院
 1933.3 「ルルド城塞の纏る伝説」『旅と伝説』63号 三元社
 1936.4 「惻巧で努力家の蒙個人」『家庭』6巻4号 東京家庭雑誌社
 1952.6 「男女平等は実現しているか—婦人の服装はどうなっているか—」『新中国の基礎知識 100の疑問に事実でこたえる』ハト書房
 1952.7 「昔語り三つ」『婦人之友』46巻7号 婦人之友社
 1952.3 「赤い中国の婦人—ものの見方・考え方」『婦人画報』570号 婦人画報社
 1953.1 「解放前の中国学生の動向」『文部時報』905号 文部省
 1953.2 「沈黙の自由もない—解放中国の理想と現実—」世界平和協議会
 1953.5 「見たままの新中国」『大陸問題』16号 大陸問題研究所
 1953.10 「中京見たまま」(講演録)『民主社会主義』1巻6号 社会思想社
 1954.2 「中共下における生活」(龍蔵共著)『自由と正義』5巻2号 日本弁護士連合会 座談会録
 1930.1 「令嬢ばかりの結婚問題の座談会」(座談会録)『主婦之友』14巻1号 主婦之友

○鳥居幸子参考文献

筑水 1933.4 「鳥居家の慶事」『武蔵野』20巻4号 武蔵野会

【鳥居緑子関係文献目録】

○鳥居緑子著述目録

- 1932.3 「第九回白日會展覧会版畫出品目録 マリアントネット 鳥居緑子」『版画CLUB』4年2号 創作版畫俱樂部
 1932.8 「満州国婦人使節歓迎の夕べ (座談会)」『婦人俱樂部』13巻8号 婦人俱樂部
 1932.12 「契丹文化の跡を訪ねて」『婦人世界』27巻12号 婦人世界社
 1933.3 「私の観た満州」『少女俱樂部』昭和8年3月号 大日本雄辯会講談社
 1934.3 「父の研究を助けて滿蒙へ 陵墓壁面模写の15日」『科学知識』14巻3号 科学知識普及会
 1934.4 「蒙古の生活を訪ねて 惻巧で努力家の婦人達」『家庭』6巻4号 東京家庭雑誌
 1934.5 「蒙古旅行の思出」『隨筆集 文体』2巻3号 文体社
 1935.2.22 「私の見たアメリカの女性」『週刊国際写真新聞』96号 新聞聯合社
 1935.7 「花と雨と 七月の蒙古地を行きて」『婦人文芸』7月号 新知社
 1935.8 「蒙古路の夏から秋」『婦人文芸』8月号 新知社
 1936.4 「父を語る」『科学知識』16巻4号 科学知識普及会
 1936.5 「三千年前の生活を探る」(文 鳥居龍蔵、画 鳥居緑子)『アサヒグラフ』26巻20号 朝日新聞社
 1936.6 「私の研究 回想」『婦人公論』21年6月号 中央公論社
 1937.1 「上代の女性風俗」『婦人文芸』新年号 新知社
 1937.1 「父の研究を助けて滿蒙へ」『章華社月報』6巻1号 章華社
 1937.2 「上代の女性風俗」『武蔵野』24巻2号 武蔵野会
 1939.9 「日本を去る日の感想」『婦人公論』24巻9号 中央公論社
 1951.8 『民国外交史料輯佚』(張雁深・鳥居緑子合輯) 開通書社 (北京)

○鳥居緑子参考文献

- 1937.1.7 「若き時代を擔って 二女性海外へ」『大阪毎日新聞』大阪毎日新聞社
 1940.10 「会報 消息 鳥居博士の消息」(龍蔵・緑子の消息)『武蔵野』27巻11号 武蔵野会
 2003.5 「白日會第九回展覧會目録 マリアントネット 鳥居緑子」『近代日本 アート・カタログ・コレクション白日会』2巻 ゆまに書房

「鳥居龍蔵と現代社会」の関係を問う

—シンポジウムの趣旨と論点の整理—

石井伸夫

はじめに

2020年度は、鳥居龍蔵の生誕150周年となる記念の年であり、同時に、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館（以下「当館」）10周年の節目にもあたる。このようなことから、今回のシンポジウムのテーマは「鳥居龍蔵と現代社会」とした。鳥居が残した足跡のなかに、1世紀を越える長大な時間を越えて、現代の我々に問いかけてくるものが「有る」のか「無い」のか。仮に「有る」とするならば、それは何なのか、節目の年に改めて確認したいと考えたからである。この試みは、言葉を換えるならば、「鳥居龍蔵は、現代社会に「生きて」いるのか」という問いかけと同義である。もとより比喩的な意味においてではあるが、その学説、生き様、また残された資料群の現代的価値をこの機会に改めて問い直してみたいと思う。

1 150周年記念事業と記憶の「風化」について

まず、考えを整理する端緒として、半世紀前の生誕100周年の様子を振り返ってみよう。この年の記念事業の目玉の一つとなったのが、鳴門市にあった徳島県立鳥居記念博物館、いわゆる「旧館」が、同館の紀要第4号として刊行した記念論集『鳥居龍蔵博士の思い出』である。八幡一郎、山内清男、樋口清之などの碩学を含む43名の執筆者による、総頁数約200ページの論集であり、当時の編集担当者の熱意の伝わる一冊である。しかし、論集の内容に関しては、各論とも概ね3～5ページ程度の短文が大半を占め、書名にあるとおり、鳥居龍蔵個人に対する「思い」を語るエッセイ集となっている。この当時は、膨大な資料群の全容把握が進んでいない時期であったこと、また、執筆者の大半が鳥居龍蔵と実際に面識があり、何らかの交流があったことから、このような構成・内容となったのであろう。

一方、150周年にあたる2020年にも記念論集が編まれた。当館と地元で活動する「鳥居龍蔵を語る会」が編集を担当し、去る2020年12月20日に思文閣出版から刊行された『鳥居龍蔵の学問と世界』がそれである。論集の執筆は、当館開設以降の10年間で、講演や資料調査、研究報告の執筆等でお世話になった国内外の研究者を中心にお願いくることとし、これに当館学芸員や「語る会」のメンバーが参画するかたちをとった。その結果、寄稿を依頼した各論考の対象とする地域は、日本国内はもとより、アジアの全域、さらにはヨーロッパにまで及ぶこととなり、それぞれの論者が専門とする学問領域も、考古学、文化人類学、歴史学や、発掘された資料の生物科学的分析など極めて多様で、かつ、最新の成果を盛り込んだものとなった。また、書籍としてのボリュームも、総頁数で550ページを超える大冊となっている。100周年と150周年の二つの記念論集を比較した場合、エッセイ集から学術論集への内容的深化、また、鳥居が残した資料に関する情報量も桁外れに増加しており、学術面での積み上げを感じさせるものとなっている。さて、このように対比すると、一見着実な歩みに見えるが、その背景に隠れた隘路はないのであろうか。

ここで今一度、過去の記憶にもどろう。半世紀前、すなわち1970年は、戦後日本の経済成長を象徴する「大阪万博」の年である。個人的な述懐となり恐縮であるが、当時小学5年生であった私が、鳥居龍蔵の名を初めて明瞭に意識したのも、この年の夏のことであった。前後の状況は詳しく覚えていないが、確か、父と二人で徳島公園（旧徳島城跡）の園路を城山に沿って歩く道すがら、不意に父

が立ち止まり、とある石碑の前で語り始めたのだ。曰く、「この石碑の人物をよく覚えておきなさい。鳥居龍蔵博士だ。博士は事情があって小学校も出ていないが、独学で研究の道に進み、世界中を旅してまわった、もの凄く偉い人なのだ」と。父は地元高等学校の歴史教員であったが、特に鳥居龍蔵研究をライフワークにしていたわけではない。今にして思えば、その言説は、郷土の歴史に関心を抱く人々の、その当時における共通認識であったのかもしれない。また当該年は、鳥居の没年からは17年目にあたり、比較的時間の経過が浅いことから、「郷土の偉人」の記憶がまだしもリアリティをもって生きていた時代であったのだろう。

時は流れて21世紀をむかえ、さらに20年が経過する。現在当館では、鳥居が生涯をかけて蒐集した約7万点といわれる膨大な、かつ大半が未公開の資料の整理に取り組んでいる。資料によって見いだされる新たな知見は、様々な機会を捉えて公開されていく。その方法は、各種の展示、広報誌への掲載、研究報告の執筆など多様であるが、「講座」というかたちで多くの方々に直接成果を伝える場合もある。時にもよるが、上手く話ができただけには、お褒めの言葉を頂戴することがある。「いやあ、本当に驚きました。もの凄い人物だったんですね。名前は知っていたんですが、具体的な生き様については、今、初めて知りました」とのご感想である。歴史系の講座は、年配の方の参加が多い。この感想をいただいた方も、私から見れば人生の大先輩にあたる。しかし、鳥居の業績については、ほとんど初見に近い認識だったのである。

このような体験を経る中で、よく思うことがある。「鳥居龍蔵は、現代社会に「生きて」いるのか」。冒頭で述べたとおり、今年には鳥居の生誕150周年にあたる。当然ながらご本人は亡くなっており、「生きて」はいない。数年後には没後70年を迎えるのであるが、今この機に考えなくてはならないのは、生物的生命のことでなく、一人の碩学が残した「学問」と、その「世界」についての生命、すなわち「学的価値」に関わる問題なのではないのだろうか。周年事業というのは不思議な側面を持っている。50周年より100周年、100周年より150周年と、年季を経るごとに価値の高まりを見るのであるが、同時に、個人についての記憶のリアリティは喪失を続けているのかもしれない。この、碩学個人に対する記憶の「風化」への対応が、「鳥居龍蔵と現代社会」を語る上での、大きなキーポイントとなるのではないだろうか。このことをディスカッションの論点の一つとしておきたい。

2 戦後考古学における鳥居龍蔵の評価のあり方について

今一つ、鳥居龍蔵と現代社会の関係を考えるうえで、注意しておかなければならないのは、本シンポジウムの中村報告で直接的な問題提起のある、戦後考古学界における鳥居龍蔵に対する否定的な評価についてである。曰く「国策協力者」という、また「日鮮同祖論」を掲げ植民地政策に荷担した人物という見方であり、鳥居を「否定されるべき旧体制下の研究者」とする評価である。このような見方、評価が定着することとなった背景はどこにあるのであろうか。

自明のことではあるが、1945年8月15日、大日本帝国は敗戦の日を迎え、無条件降伏とともに崩壊した。あまりにも大きい戦争の惨禍を前に人々の意識は、「何故このようなことになったのか?」、「何が間違いであったのか」という方向に自ずと向かう。過去を検証し、過ちを認識し、惨禍を繰り返さないようにしようという思いは尊いことであるが、これまでの規範が崩壊した状況下で、ともすれば、「誰が悪いのか?」、「誰のせいでこうなったのか?」という、いわゆる犯人捜しに陥る部分はなかったのであろうか。例えば、「軍国主義が悪い、陸軍が悪い、だから東条英機が悪い」という、また、「歴史学が悪い、皇国史観が悪い、つまり平泉澄が悪い」というように、旧体制下で影響力のあった個人を責めるステレオタイプの言説が芽生えてくるのである。もとより、様々な問題を含むことがらであり、それぞれの個人に全く責任なしともいえないのであるが、一方で、国民の多くが同様の意識で動いていたことも事実であり、その当時は、何人も時代の潮流の中で生きざるを得なかったのではないのだろうか。本質的に「戦争の惨禍に学ぶ」ということは、特定の個人の責任をあげつらうことではない。もっと大きく構造的な問題意識にもとづき、過ちを繰り返さない教訓を創り、これを継承していく営みであるべきであろう。

鳥居龍蔵は、大正期に独自の日本人起源論（固有日本人論）を唱え一世を風靡した著名人であり、日中戦争勃発後、時を置かず中国のハーバード燕京研究所に招聘され、彼の地で日本の敗戦を知ることとなる。戦後も中国にとどまり、中華人民共和国成立後に、新独立国家として復興の道を歩む「日本」に帰国し、1年で没した。したがって彼は、戦中も、占領期間も日本には存在していない。戦後社会の様々なセクトで敗戦の犯人捜しが始まるなかで、人類学者、考古学者として抜群の知名度を持つ鳥居は、恰好のターゲットになったのではないだろうか。しかしその時点で、彼は自らの意見を述べる場所にはいなかったのである。しかれば、鳥居龍蔵の研究スタイルや人間像は、単純に「国策協力者」として割り切れるものなのであろうかという疑問が生じる。このことの検証を、もう一つの論点としてあげておきたい。

おわりに

近年の当館での資料整理の結果、鳥居の学問のあり方や人間像を示す資料が次々と確認され、これまで以上に鳥居の人間像をクリアに描けるようになりつつある。このシンポジウムでは、この10年間で新たに確認された資料にもとづき、鳥居の研究スタイルや人物像の再評価を試みたい。シンポジウムでの報告やディスカッションをとおして、多くの方々に、鳥居龍蔵の現代的価値を再認識いただけたら幸いである。

執筆者一覧（掲載順）

長谷川賢二（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

中村 豊（徳島大学）

齋藤 玲子（国立民族学博物館）

吉開 将人（北海道大学）

宮岡真央子（福岡大学）

関 雄二（国立民族学博物館）

天羽 利夫（鳥居龍蔵を語る会）

石井 伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム 「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集

編 集 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電 話 088-668-2544
FAX 088-668-7197

発 行 徳島県

印刷・製本 グランド印刷(株)

